山梨県立甲府中学校　山梨県立甲府第一高等学校

創立百二十周年記念誌

山梨県立甲府中学校　山梨県立甲府第一高等学校

創立百二十周年記念誌

山梨県立甲府中学校　山梨県立甲府第一高等学校
創立120周年記念事業協賛会

目　次

歴代校長…… 1

挨　拶…… 2

創立120周年記念誌刊行によせて　協賛会会長　海沼　昭
創立120周年記念誌刊行に寄せて　同窓会会長　井上　雅雄
甲府一高の伝統に触れて　ＰＴＡ会長　功刀　利一
刊行にあたって　校　長　輿石　順一

第１部　120年の歩み

第１章　甲府中学創立まで …… 11
1．創立以前 …… 11
幕末期を支えた徽典館の学者たち　若き藤村権令、粘る

第２章　創立から明治期 …… 13
1　産みの苦しみ …… 13
自由な「教育令」のもとで　地元の無理解に苦しむ
2　「学校令」のもとでの尋常中学校 …… 14
ふたたび「徽典館」を名のる　尋常中学の発足と充実
幣原校長の着任と校舎の充実

第３章　大正期 …… 19
1　大島正健校長の13年間 …… 19
2　舞鶴城跡の学校生活と教師群像 …… 22
3　山梨県立中学校の生徒たち …… 24
成績評価　寄宿舎生活と校友会活動　創立30周年の頃
4　江口俊博校長と強行遠足の始まり …… 27

第４章　昭和前期（戦前）…… 30
1　新校舎への移転と50周年 …… 30
2　昭和初年の学校生活－軍事教練から甲子園出場 …… 32
3　戦火の下の学園 …… 35

第５章　戦後期 …… 40
1　敗戦後の混乱と復興のきざし …… 40
2　新教育と生徒自治会の発足 …… 41
3　強行遠足の復活 …… 43
4　改革は進む …… 45
校内の改革と共学　新校歌の制定　「Ｐ.Ｔ.Ａ」の発足
5　働きながら学ぶ－定時制・通信制の教育 …… 48

第６章　創立100周年まで …… 52
1　「原型」としての30～40年代 …… 52
生徒会活動　委員会活動と応援練習　文化祭から一高祭へ
2　総合選抜制度の拡大 …… 55
3　「政治」の季節 …… 58
4　研修旅行・宿泊研修会の始まり …… 60
5　強行遠足、佐久往還コースに …… 62
6　更なる前進－活躍する各部 …… 64

第２部　近年20年の記録

はじめに …… 71

第１章　校舎改築 …… 72

第２章　学制の変遷 …… 78
1　英語科の設置とその後 …… 78
2　選抜制度の変遷・学校週５日制（土曜休日）の導入 …… 80
3　大学入試制度の変容・進路の状況 …… 82
4　研修旅行・対外交流・ＡＥＴ …… 83

第３章　生徒会活動20年の歩みと近況 …… 87
1　生徒会活動の変化と課題 …… 87
2　今日の生徒会活動の状況 …… 88
3　生徒会部活動について …… 94

第４章　強行遠足 …… 105
1　20年間の変遷 …… 105
2　2000年第74回強行遠足救護検印所の点描 …… 110

第３部　特集・寄稿

甲府一高　　校歌・応援歌・その他歌の歴史　　依田道彦 …… 115

校章探訪記　　三井　誠 …… 131

石橋氏胸象について　　大西　勉 …… 136

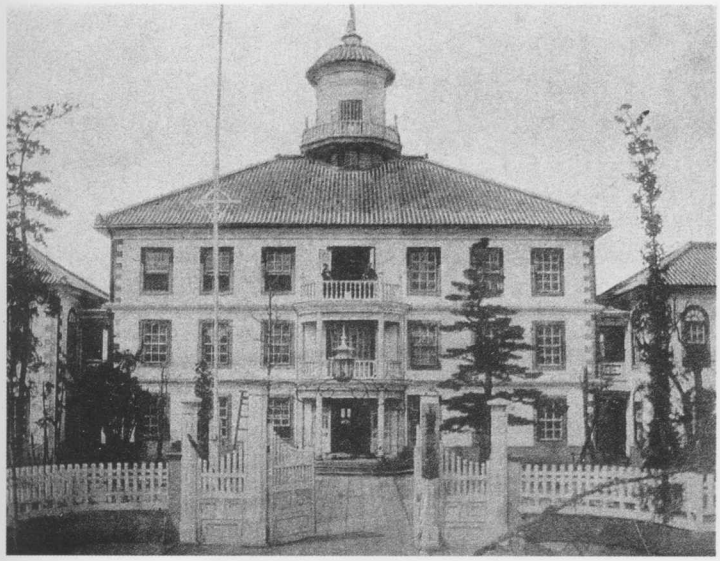
120周年記念事業 …… 139

回想・寄稿
回想 …… 149
笠井重治「甲府中学校創立百周年記念に際して」から …… 149
石橋湛山「３人の校長」他から …… 150
望月春江「なつかしい甲府一高」 …… 153
渡邉大藏「一本の日章旗」 …… 155
金丸　邁「鎮魂の五十回忌」から …… 156
三井伸夫「生物部で活躍した高校時代」他から …… 159
山村正光「君島を憶う」から …… 160
中沢新一「ピューリファイ」から …… 161
寄稿 …… 164
「私の映像の原点は甲府第一高等学校だ！」　小林俊一 …… 164
「オウムとの闘い」　井上幸彦 …… 166
「音楽家としての半生」　平野忠彦 …… 168
「甲府一高と私の人間形成」　内藤悦次 …… 170
「変化のゆくさき」　五味文彦 …… 172
「私の競技生活」　恒吉恵子 …… 172

年表・歴代同窓会会長・Ｐ.Ｔ.Ａ会長 …… 175

編集後記・編集委員・執筆者一覧 …… 巻末

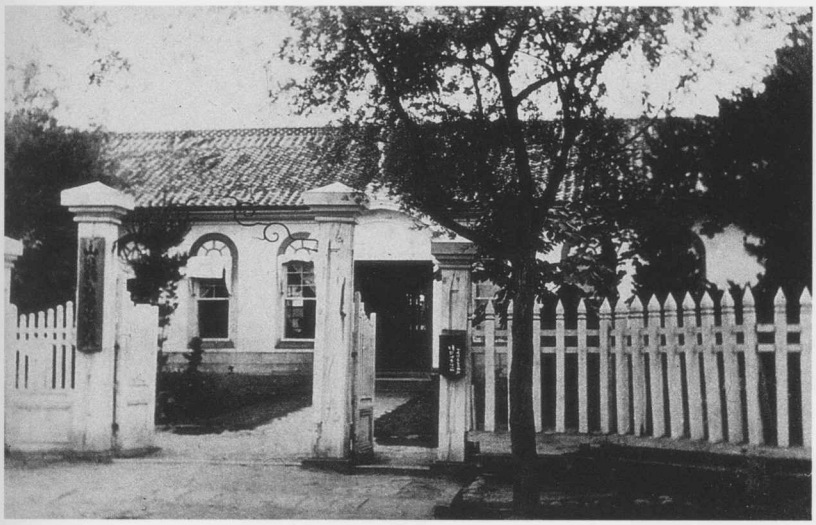




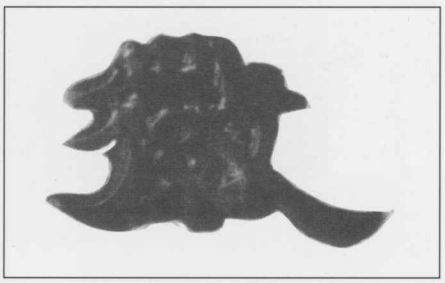
徽典館　明治９年新築　同16年焼失



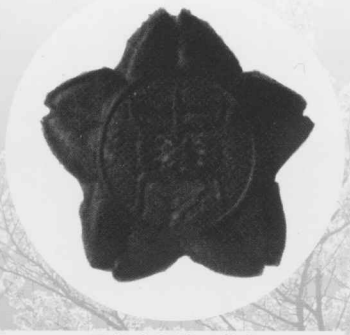
徽典館　明治17年再築



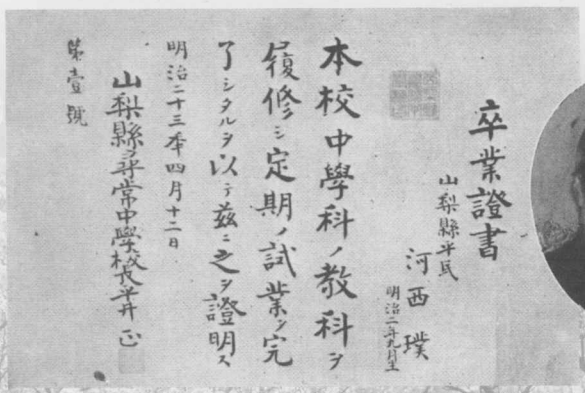
明治20年　山梨県尋常中学校校舎



徽典館の徽章



尋常中学校の徽章



卒業證書

山梨縣平民　河西璞　明治二年九月生

本校中學科ノ教科ヲ履修シ定期ノ試業ヲ完了シタルヲ以テ茲ニ之ヲ證明ス

明治二十三年四月十二日

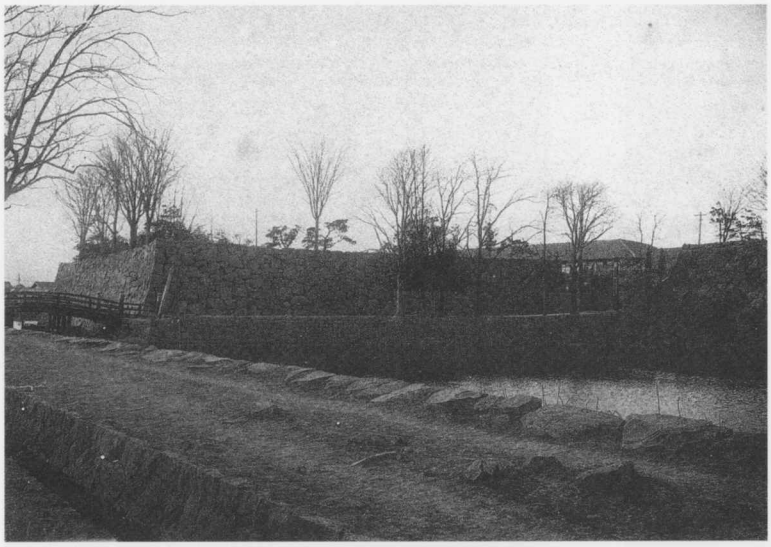
山梨縣尋常中學校長　井心

第壹號

山梨県尋常中学校卒業証書第１号



河西　璞



山梨県立甲府中学校正門



太鼓楼の擬宝珠



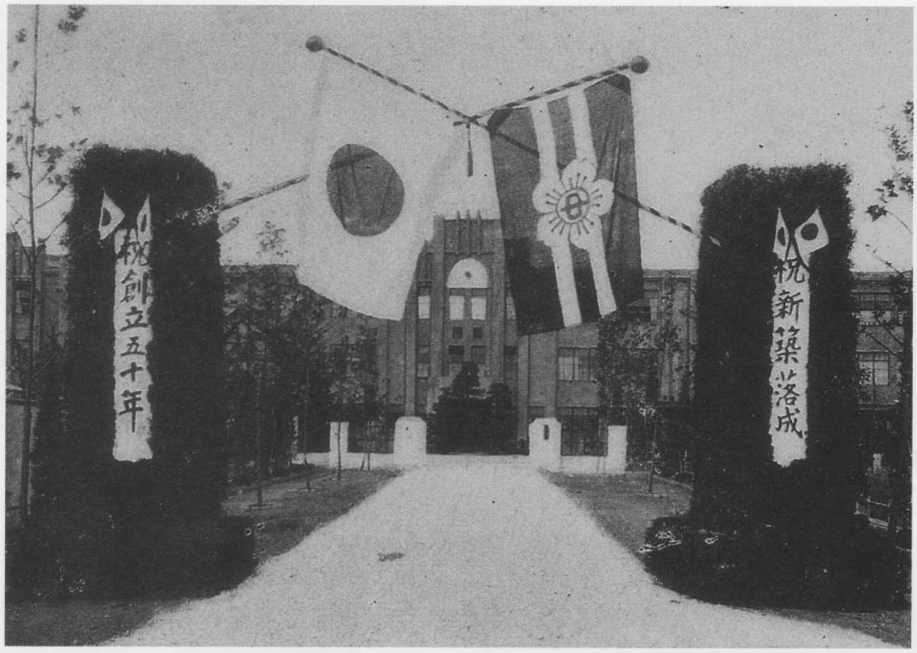
校舎前庭のテニスコート



県立山梨中学校第16回生徒卒業生

庭球部選手（明治42年）





創立50周年、校舎新築落成記念のアーチ（昭和５年）



昭和４年落成の講堂



校舎前庭園の記念碑（昭和４年）


甲中軍晴れて甲子園へ

強剛神工を抑へ
三蹉の制覇成る

球場に爆發した狂喜亂舞
中校球界十九年の宿望達成

殊勲五味の健闘
五回一點勝敗を決す

甲中 000 020 000 2
神工 100 000 300 4

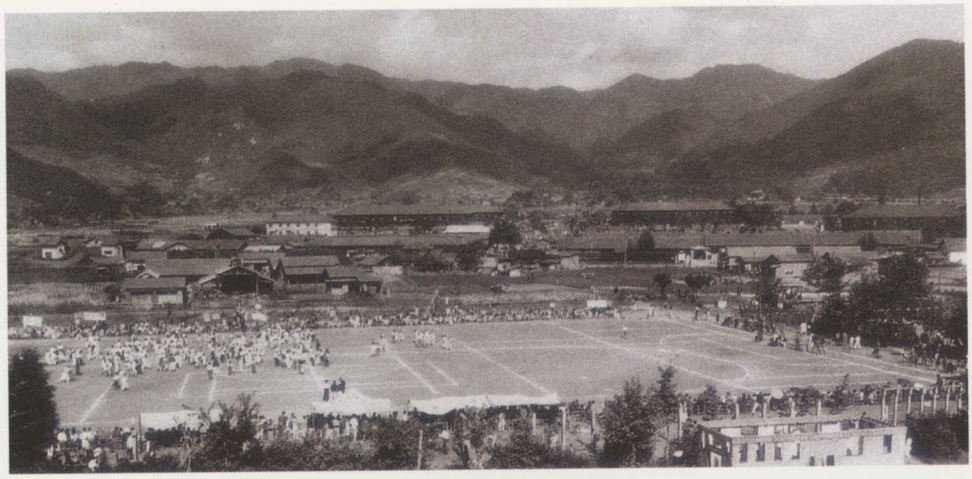
五味の好
奥村の

昭和10年８月４日、山・神・静ブロック大会で甲中優勝。甲子園初出場に観衆は興奮。（甲府飯田球場）

昭和10年　甲子園初出場



予科練入隊の壮行会（昭和19年）



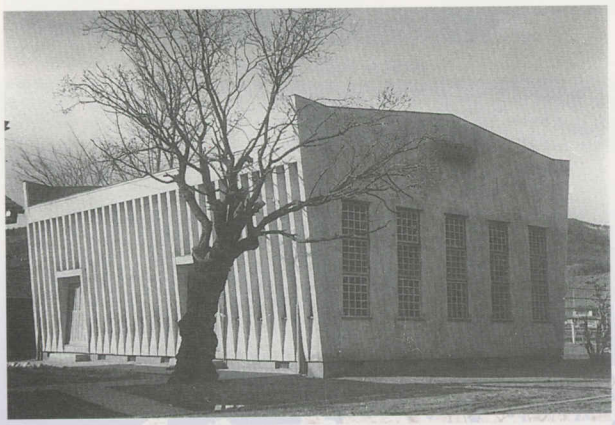
戦後初の大運動会



定時制　通信制開校（昭和23年）



強行遠足（昭和21年）



音楽室落成（昭和28年）



男女共学第１回生（昭和25年）



体育館落成（昭和30年）玄関



百周年記念館竣工（昭和56年）

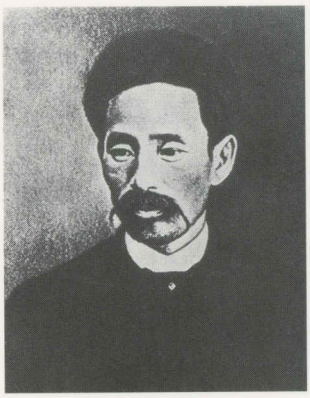
歴代校長



初代校長
吉田義静
明治17年着任



第２代校長
平井　正
明治20年～



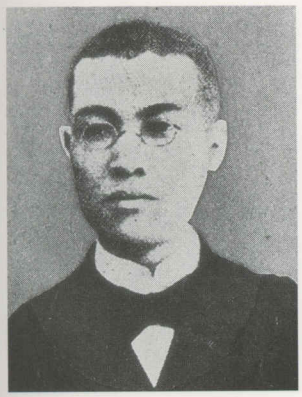
第３代校長
長倉雄平
明治23年～



第４代校長
村上孚光
明治23年～



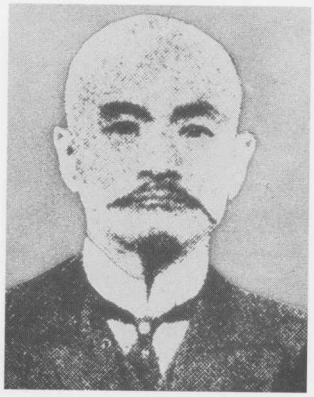
第５代校長
黒川雲登
明治26年～



第６代校長
幣原　坦
明治31年～



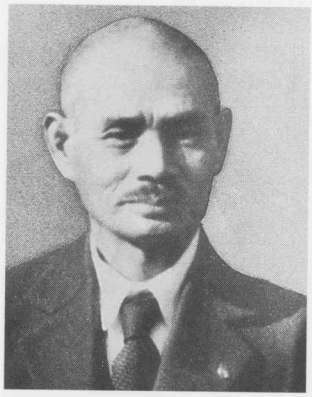
第７代校長
大島正健
明治34年～



第８代校長
末　久　喜十郎
大正３年～



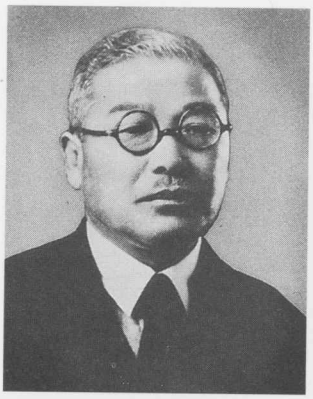
第９代校長
田　村　喜　作
大正７年～



第10代校長
江　口　俊　博
大正12年～



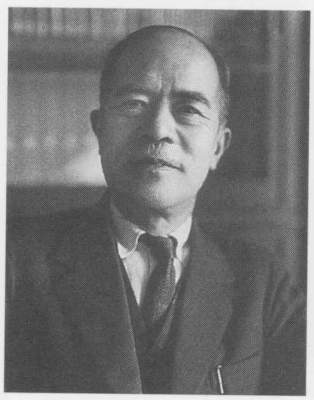
第11代校長
隈　部　以　忠
昭和７年～



第12代校長
大　野　芳　麿
昭和12年～



第13代校長
永　井　徳　潤
昭和19年～



第14代校長
近　藤　兵　庫
昭和21年～



第15代校長
篠　原　寛　二
昭和25年～



第16代校長
雨宮重治
昭和29年～



第17代校長
斎藤俊章
昭和32年～



第18代校長
廣瀬勝雄
昭和36年～



第19代校長
高遠啓一
昭和41年～



第20代校長
根津修蔵
昭和44年～



第21代校長
若林勇
昭和49年～



第22代校長
山下穆
昭和51年～



第23代校長
岩波政雄
昭和55年～



第24代校長
山　村　鉄　夫
昭和58年～



第25代校長
望　月　政　廣
昭和61年～



第26代校長
三　澤　弘　毅
平成元年～



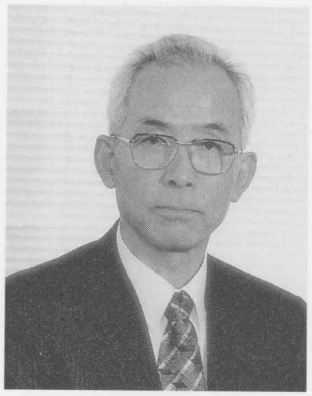
第27代校長
広　瀬　重　雄
平成３年～



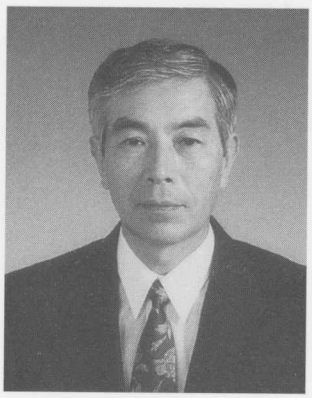
第28代校長
伊　藤　喜　雄
平成５年～



第29代校長
関　口　稔　夫
平成７年～



第30代校長
雨　宮　　惇
平成９年～



第31代校長
輿　石　順　一
平成11年～

創立120周年記念誌刊行によせて

創立120周年記念事業協賛会
会長　**海沼　昭**



西暦2000年と創立120年という歴史と周年の節目を迎えるにあたり、同窓会とＰＴＡは教職員の皆様と相携えて協賛会を組織し、120周年を記念する事業・行事を平成10年より企画し準備を進めてまいり、皆様の厚いご理解ご支援を得て計画どおり実施することができました。協賛事業にかかわられたすべての皆様のご尽力ご貢献に対してあらためて深く感謝申し上げる次第です。

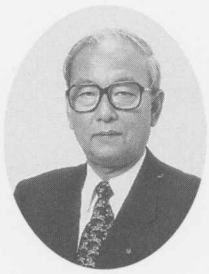
盛大・厳粛に開催された10月20日の創立記念式典、式典に続く洋楽・邦楽両分野にわたる卒業生の音楽家による豪華な記念音楽会、10月19日にオープンし、23日まで一般公開された卒業生の美術家・有志による豊富・多彩な名作・傑作を集めた記念美術展、資料展示・保存施設としての機能アップを内容とする100周年記念館改修・整備事業、創立120周年の当年に２年先行して実施して来た同窓会奨学金強化事業など協賛会の掲げた目標のすべてが達成されました。

かつて100周年記念事業のひとつとして刊行された「甲府中学・甲府一高　百年誌」に続く「甲府中学・甲府一高　創立120周年記念誌」が、編集委員の皆様の短期日での多忙きわまるご奮闘、ご労苦によって記念事業の掉尾としていまここに完成されるはこびとなったことは、誠に喜びにたえません。

19世紀後半県下で最初の公立中学校として創設された本校は、本年（西暦2001年）いままさに３つめの世紀の第一歩を踏み出したのであります。幾星霜の紆余曲折の道のりの中で本校を築き、支えてこられた関係各位の営々たるご努力に対し厚く御礼申し上げますとともに、本誌の刊行が他の記念事業とともに、母校が校歌に歌われるが如く日日に新たに、大いなる望みをもちて、ますます輝かしい新世紀の歩みをすすめるよすがとなることをご祈念申し上げ、ご挨拶といたします。

創立120周年記念誌刊行に寄せて

同窓会　会長　**井上雅雄**



Be Gentleman!　これはクラーク博士の残された言葉である。この言葉を大島正健校長から教えられた石橋湛山大先輩は、「君たちよ、紳士であれ、自分の良心に従って判断し、行動し、責任をとれ」と説かれた。この思想を、私たち同窓生は甲府一高で学ぶ生徒たちに伝えていかなければならない。このほか本校に伝えられる　Boys be Ambitious!、日に新たに、天地の化育を賛く、質実剛健、文武両道など、さまざまな精神的財産の形成の歩みを120周年記念誌にたどることには大きな意味がある。

これまで３万１千を超える卒業生が、国の内外の政治、経済、文化、教育、スポーツなど各分野ですばらしい活躍をしている。120年の伝統は甲府一高が21世紀ではばたく立派な基盤となるはずである。記念誌の多くの頁で知ることのできる卒業生のさまざまな業績の蓄積を踏み台にして、生徒諸君がさらに飛躍することを期待したい。

昨年（平成12年、西暦2000年）は甲府中学・甲府一高創立120周年を記念するさまざまな行事・事業が行われた。式典、音楽会、美術展などの記念行事、奨学金強化、記念館改修整備、会員名簿作成などの記念事業に続いて、掉尾を飾る記念誌の刊行がここになったことを心より喜びとするものである。

甲府一高の伝統に触れて



ＰＴＡ会長　**切刀利一**

甲府第一高等学校が創立120周年を迎えましたことを、心からお祝い申しあげます。同窓生の皆様には日ごろからＰＴＡ活動にご理解いただき、感謝しております。甲府第一高等学校は、創立以来31,000余名の卒業生が巣立ち、県内のみならず、国の内外のあらゆる分野で活躍されてきましたことは、在校生の子を持つ親として非常に心強く思います。

さて、120年という年月の中で、甲府一高の伝統を考える時、真っ先に浮かんでくるのは強行遠足です。私はＰＴＡの役員として全線巡視の役割を与えられ、３年間強行遠足のお手伝いをすることができました。強歩遠足は毎年、教師の他、地域の人たち、350人の保護者と60人を越す卒業生の協力のもと行われています。私は全線巡視をしながら、卒業生がどうしてこんなに多く協力しているのか不思議に思っていましたが、今年、若神子の検印所の横断歩道で交通整理をしていた卒業生が『私は強行遠足で多くの方に大変お世話になりましたので、少しでもお役に立てばと思いお手伝いしています。』と話していたことを、北見北斗の校長先生から伝え聞き、胸が熱くなると同時にようやく納得がいきました。

苦しいときほど人の優しさが身にしみます。

強行遠足という苛酷な体験を通し、生徒の心に、人に感謝する気持ちが育ち、そしてそれが、思いやりの心へと昇華されていたのです。

今、日本の教育に一番必要な『人を思いやる心』が、強行遠足を通じて養われていたことを知り、私はこの強行遠足の価値を再認識しました。

甲府一高の生徒には、高校生活の中で、意識するとしないとにかかわらず、一高の伝統が３年間のうちにしみこみます。そして、その精神は卒業後も脈々と生徒の心に流れ続けるのです。

日本の社会では、残念ながら未だに、有名大学に何人入るかで高校の価値を決めたがる風潮があります。しかし、高校の価値は有名大学に何人合格したかではなく、将来社会人になってから、どれだけ多くの人間が社会に貢献し、また、厳しい国際化の時代に逞しく生きているかにあると思います。

甲府一高こそ、その名にふさわしい高校ではないでしょうか。

グローバルスタンダードが問われる時代、一高という伝統の中で高校生活を過ごす生徒たちは、自らを律しつつ、人と協力し、他を思いやる心を持って、21世紀の厳しい国際社会の中で逞しく生き、活躍してくれると思います。

このような素晴らしい甲府一高に子供を通わせることができたことを、親とし

て誇りに思うとともに、伝統を築き続けてきてくれた同窓生の皆様に、改めて保護者を代表して御礼を申し上げたいと思います。

栄光の甲府一高が、さらに伝統を積み重ね、21世紀も光り輝きつづけることを祈念し、ご挨拶といたします。

刊行にあたって



校長　**輿石順一**

平成12年（西暦2000年）は本校創立120周年にあたるメモリアルな年でありました。平成10年より組織された記念事業協賛会の御奮闘で協賛募金は目標の９割を越え、記念式典、音楽会、美術展などの諸行事、百周年記念館改修整備、奨学基金強化などの諸事業が実施されました。続いてここに120周年記念誌が完成のはこびとなり、記念諸事業が完結できましたことは喜びにたえません。足かけ３年に渡り事業の企画、準備、推進にあたられた協賛委員、同窓会、PTA、学校教職員の皆様の並々ならぬご尽力に深甚なる謝意を表します。

本校120年の歴史を振り返ってみますと、大きな変革が３回あります。初めの２回は、我が国が近代教育制度の歴史の中でこれまでに行った２回の教育改革と軌を一にします。

第１回目は本校の誕生です。明治５年、明治維新政府は学制頒布を手始めに寺子屋を廃止して小学校、中学校、大学を設置するとともに、教育内容を定め、国力の充実を目指し、その基礎条件である国民の知的水準の向上のために学校体系創出の方向を打ち出しました。このような中で、本校は明治13年（西暦1880年）、山梨県中学校として開校いたしました。

第二回目は我が国における第二の教育改革に基づくもので、終戦直後の昭和22年、教育基本法が制定され、教育の民主化と機会均等の理念のもと、六・三・三・四制がしかれ新制高等学校が発足しました。新制高等学校においては「学区制」「男女共学」「総合制」の原則がGHQから打ち出され、このうち、学区制は学校間の格差を解消し、高等学校の普及を図るものでした。本校は昭和23年、山梨県立甲府中学校から山梨県立甲府第一高等学校となり、昭和25年には男女共学となり、また、学区制も導入されて、甲府学区の学校となりました。

第三回目は、昭和30年代後半からの高校急増期に新設校の健全育成と学校間の格差縮小を目的とした「総合選抜制度」の導入です。甲府学区においては昭和43年、本校と甲府南高との間で始められ、中学区においても学校選択の自由はなくなりましたが、平成６年から入学校の希望を取り入れる方式が導入されています。

本校は開校以来このような大きな変革を経て山梨県中等教育の府としてそれぞれの時代の使命を担い、政治、経済、文化の各方面に傑出した人材を数多く輩出して参りました。光輝ある歴史と伝統は、その時々の教育制度のなかで整わぬ教育条件を克服するとともに、高遠な理想を揚げ、甲府一高の近代教育の確立に情熱を注いできた教師と生徒の努力の賜であります。

本誌が120年の伝統を回顧すると同時に21世紀の本校のあるべき姿を考えるよすがとなることを念じてご挨拶といたします。

第1部
百二十年の歩み





第１章　甲府中学校創立まで

１．創立以前

幕末期を支えた徽典館の学者たち

寛政年中、甲府勤番支配・近藤淡路守政明・永見伊予守為貞により、勤番士の子弟のために甲府学問所が創設された。はじめは初代教授方富田富五郎の役宅を利用した私塾であった。

文化２年、学問所は、大学頭林衡（たいら）により徽典館と命名され、同年４月には、松平定信揮毫の額が掲げられ、旗本・御家人の子弟を教育する学館としての体裁が整った。享和年間には入学希望者も増え、独立校舎が建設されることとなり、文化６年11月には完成した。

天保14年には、徽典館は、駿府（静岡）の明新館とともに、江戸昌平坂学問所の分校として、改めて発足することとなった。以来、学頭・学正には、岩瀬修理・平岩右近・田辺新次郎・矢田堀景蔵・乙骨彦四郎・中村敬助（敬宇）などを迎えることとなった。



松平定信筆「徽典館」額

彼らの多くが、その後の幕末期に、幕府の旧体制（アンシャン・レジーム）を支えて行政・海軍・陸軍・外交の表舞台に立つこととなる人物だったのである。徽典館はそうした人材の揺籃であった。東上してきた官軍が、甲府城攻略を大きな目標としたのは、一つには江戸防衛の拠点としての甲府城－軍事的理由である。一方では、薩摩・長州・土佐・肥前を始めとする「維新」派にとって、ここが優秀な官僚を輩出した徽典館－「官学」のシンボルだったからでもある。さらに彼らの多くは明治の啓蒙期においても活躍することとなる。

幕末になると、徽典館は甲府近郊の商人・富農・神官・僧侶など、武士の子弟以外にも聴講を許し、教場をはみ出して廊下まで聴講生が溢れたという。

明治維新後、幕府の「学正」は解散し、幕府学問所としての役割は終えた。が、幕末ここに学んだ地元の人々により、徽典館は明治５年まで存続した。

若き藤村権令、粘る

明治５年８月２日（太陽暦９月４日）、政府は「太政官布告」によって、全国に「学制」及びその趣旨を公布した。同時に、従来府県に設立されていた学校はいったん全て廃校し、「学制」によって改めて設立すべきだとした。全国を８大学区に分け、１大学区を32中学区、１中学区を210小学区とした。計画によると、全国に大学校８、中学校256、小学校53,760を設けることとしていた。これは人口600人について小学校１校、13万人について中学校１校を目標としていたことになる。

徽典館も、この「学制」によって廃止されることになった。９月には「規則変革書」を提出して、「学制」に基づく中学校としての再出発を図ったが、地租改正に伴う「大小切騒動」が山梨県内を混乱させ、土肥県令も引責辞任をし、計画は頓挫した。

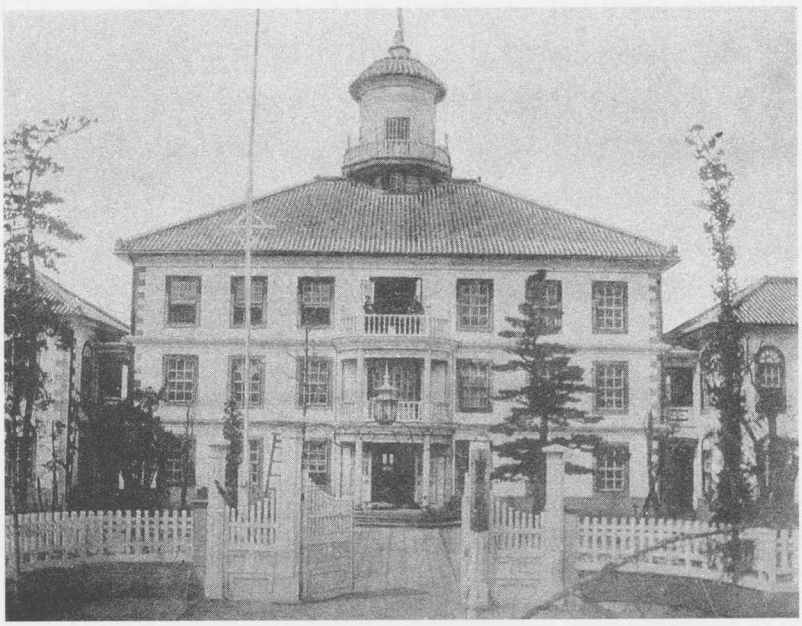
明治６年３月、着任早々の藤村権令は、山梨県の名で、「甲斐国」の石高と人口等の参考資料を付けて、第43番～45番中学区として３校を設立する旨の「伺」を第１大学区督学局あてに提出した。設立伺書は「校則・舎則・教員履歴・教員給料・生徒員数・授業料・学校費用」等の項目が完備していた。

政府からの回答は、小学校の設立が急務であり、また、その教員養成のための師範学校の設立は認めるが、中学校の設立は当面認めない、というものだった。

明治６年、藤村権令は、師範学校の中に「私立」の学校として中学校的な課程を持つ「開智学校」を設けた。「私立」とはいいながら、県の掛官員が「指揮統括」していた。が、同年末、「開智学校」は突如廃校となり、師範講習所のみ残された。この間の詳しい事情を説明する資料は未詳だが、政府の指導によるものと推察される。

藤村は諦めず、翌７年、８年……と中学設立の「伺」を繰り返し提出するが、認められることはなかった。しかも、認可を信じて疑わない藤村は、校地を確保し、さらには中学校の開設準備を粘り強く進めていった。

明治９年、甲府市内中心の錦町（現中央一丁目）に、附属教室・寄宿舎・炊事場・浴室・食堂まで備えた白亜３階建ての師範学校の校舎が竣工した。翌10年には、実質的には中学校である「中学予備学科」の設立が認められた。教育課程の内容は当初予定し、大学区督学局に提出したものとほとんど変わりがなかった。



明治９年竣工した師範学校

第２章　創立から明治期

１．産みの苦しみ

自由な「教育令」のもとで

明治12年９月29日、「学制」にかわり「教育令」が公布された。これも47か条中45条までが「小学校」についてであり、「中学校」についてはわずかに２か条だった。翌13年暮、「各府県は土地の情況に従ひ中学校を設置し又専門学校農学校商業学校職工学校等を設置すべし」という１条が追加公布された。

「教育令」は頭に「自由」を冠して呼ばれるように、中央集権的画一主義だった「学制」への批判によって改正された自由主義的なものだった。例えば、学区制の廃止、権限の大幅な地方への委任など「学制」とは打って変わった大胆なものだった。その行き過ぎを憂慮した結果、翌13年には、「国家の統制・政府の干渉」を基本方針として付け加える「改正」を行った。

機会を逃さず藤村県令は、明治13年８月６日、文部卿・河野敏鎌宛に「公立中学校設置之儀に付開申」を提出した。もちろん、学年ごとの使用教科書まで明らかにした「教則・教育課程表」等が添えられていた。「教育令」も「改正教育令」も、中学校の教育課程について特に規定が設けられてはいず、「地方の便宜に由りて斟酌編成」すべしとされていたのである。これがはっきりするのは、明治14年の「中学校教則大綱」まで待たねばならなかった。

国の基準がはっきりしないまま藤村の提出した「中学校設置之儀」は、文部省から「不明晰」な部分についての照会を受けた。その結果、「教則」の訂正を経て、10月１日、藤村県令は再度「公立中学教則之儀伺」を提出、10月７日、「伺之通」と正式許可となった。

藤村はこれに先立つ９月13日、入学資格・試験規定・成績認定・卒業認定・学費等の「通則」を付けた「布達」を出し、山梨県中学校の設置を全国に宣言していたのである。

同時に藤村は、すでに設置されている師範学校と設立される中学校とに教員を二分し、「中学予備生徒」を４クラスに編入させていた。10月１日から、授業は始められるなか、10月19日、綿引泰を初代の校長心得（師範学校長を兼ねる）として任命、23日に「開校式」を挙行した。この日をもって、本校創立の日とされている。

この年６月は、明治天皇が山梨・三重・京都を視察する、いわゆる「中央道巡幸」を実施しており、山梨では師範学校を行在所とした際、「中学予備生徒」（中学生）のうちの優秀者を拝謁させている。

地元の無理解に苦しむ

ところが、「改正教育令」が中学校について、「府県はこれを必ずしも設置しな

「布達」
当県師範学校内に中学校を設置し規則別紙之通相定候条此旨布達候事
但入学志願者は本月30日迄に同校へ申出可し
明治13年9月13日
山梨県令　藤村紫朗

くてもよい」とトーンダウンしたのを受けて、明治14年３月の県会には、中学校を廃止すべきだという議論が提出された。理由は、中学校は一部の者のためであり、志ある者は東京に出ている、また、中学校のために３千円を越える地方税を支出することは「民心に適応せざるの姿」であり、したがって中学校は公立でなく、私立でもよいではないかという趣旨だった。藤村県令の要請で、県会でも再三論議されたが、「公立」廃止論は根強かった。

藤村は、明治14年７月25日付で文部省に「名称変更の開申」を提出、中学校を「山梨学校」と改称し、師範学校と合体させる旨、決定した。これは合併のかたちをとって「中学校」を存続させようとする作戦だった。が、県会での「廃止論」はさらにくすぶり、藤村は翌15年には、国に対し、「府県に必ず中学校を設置するの制を立つべき事」を国策として制定されるよう請願を行っている。

さらに厳しい状況もあった。藤村らの熱心さとはうらはらに、在籍生徒の異動が激しかったのである。当時の社会風潮・保護者の考えもあるのだろう、初年度の明治14年には33名が新たに入学してきたが、在籍者から25名が退学している。最古の「生徒原簿」第１号では、在籍10名、卒業２、退学８（在籍２か月～２年半ととりどり）となっている。「２期制」をとっていたが、「後期」になると出席状況が悪く、上級学年になるにつれて、さらに、出席、在籍状況が悪化した。



藤村紫朗肖像

2.「学校令」のもとでの尋常中学校

ふたたび「徽典館」を名のる

明治15年２月、校長を欠いていた山梨学校では、広瀬範治を教務監督として迎える。広瀬は青邨と号し、豊前の広瀬淡窓の養子で当代の碩学で知られていた。京都府典事や岩手県権参事等を歴任し、宮内省文学之職・学習院教師兼監事を務めていたが、病を得て山梨に療養のために滞在していた。熊本（肥後）出身の藤村県令が「三顧の礼」をもって広瀬を迎えたのかもしれない。

広瀬の就任後半年で、山梨学校は再び伝統ある「徽典館」に改称した。新生徽典館は、師範学科・中学科・医学科・漢学科の四科を備えた「総合学校」となった。学校の充実と広瀬の名声とで、入学者は増え、退学者は減った。また、校内の風紀も改善したという。

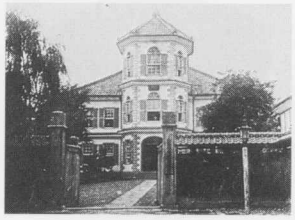
16年12月、「徴兵令」が改正された。戸主は徴兵されないほか、公立学校の生徒は「兵役一か年」でよいとの特例が与えられたことも追い風となった。公立学校への入学者もにわかに増加した。徽典館も例外ではなく、毎日４、５名が入学希望で来校し、初等８級（今で言えば「１年８組」とでもいうか）は、なんと在籍数114名だった。

徽典館がようやく活性化してきた矢先の明治16年１月29日、教員詰所から出火、強風にあおられて何物も持ち出すこともできずに全焼した。太田町公園内の共進会施設を間借りして、授業は継続された。創立以来の学籍が失われたため、学校では在籍した者は学科、在籍の長短にかかわらず申告をするようにと呼びかけている。

再建したいという動きも活発で、同年末には、県は用材の準備にかかり、翌17年1月からは北巨摩郡篠尾の官有林で伐採した材木を釜無川へ落とし、中巨摩郡竜王で岸に引き上げる計画まで立てている。また、2月には上積翠寺から大量の石材を採取している。

藤村の陳情のせいか広瀬の影響力か、全国に例のないことだったが、再建に当り宮内省は2百円の「恩賜金」を下している。

徽典館は、明治17年3月23日着工、10月2日、落成開校を見た。八角三層楼の洋風建築だった。建築経費の1万7千円余りは地方税を使うことなく、校内の蓄えと有志者の寄付金でまかなえたという。もちろん、宮内省の「恩賜金」も含めてのことである。


再建された校舎

病がちだった上に、焼失によって心労を募らせた広瀬は、東京帝大の医師ベルツ、陸軍軍医監橋本綱常の処置も空しく、着工直前の17年2月、帰らぬ人となった。

尋常中学校の発足と充実

明治19年4月9日、勅令第15号で「中学校令」が公布された。そこでは、中学校を「実業」に就く、あるいは「高等の学校」に入ろうとする者の教育の場であると位置づけた。また、高等、尋常の2種類に分け、地方税と国の補助による尋常中学校は府県に1校設置できることとなった。

中学校令は途中改正されたものの、第二次世界大戦後の「学制改革」まで、60年間にわたる、わが国の中等教育の柱となった。

「中学校令」と同時に「小学校令」「師範学校令」が公布されたため、師範学科・中学科・農学科を併置していた徽典館の存在を、この「学校令」へ整合させる必要が生じた。

同年12月11日、まず師範学校が独立、設置された。

次いで、翌明治20年3月22日、山梨県尋常中学校が設立された。同月、在県14年、中学校設立と維持運営に腐心した藤村県令は、愛媛県知事に転任した。4月、徽典館長から初代校長となっていた吉田義静も、欧州渡航のために辞任した。5月、新潟県尋常中学校長・平井正が第2代校長として着任した。

中学校の経費は生徒1人当たり月額50銭の授業料で充て、不足分を地方税から補助することとなった。20年11月の県会には、21年度予算として中学校補助費が初めて上提された。総額5千60円を個人負担の授業料と県費による補助費とで半分ずつ負担するという案だった。その8割強は人件費－教員の給与だった。が、中学校の性格が県会でも再び論議を呼び、紛糾の末、ようやく原案通りに可決された。反対意見の多くは、官の教育への干渉反対、私学の興隆発達、地方税への負担軽減など、6年前とほとんど変わりはなかった。

翌年、生徒1人当たりの授業料が月額1円と増額された。21年、22年と補助費が上提されるたび、県会は紛糾した。特に22年の県会では、山梨の尋常中学校が上級学校進学のレベルに達していないとの指摘を受けて、廃校派と充実改良派とに真っ二つに分かれて議論が伯仲した。激論はこの年の「内務省令」まで続けられた。「内務省令」で、各府県尋常中学校の経費はすべて地方税によって負担せよとの指令が下され、翌年から「補助費」の名目を廃止、全額「校費」として計上

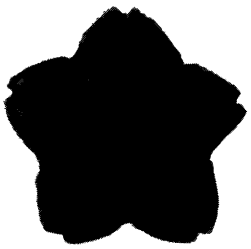
されることとなった。

この間、明治20年４月には、帽子に「徽」の文字の帽章をつけることとした。その他、学校充実のための改革が次々に行われた。

21年１月には、西山梨郡甲府錦町（現甲府市中央一丁目・小宮山外科病院付近）に独立の専用校舎を得た。もともと女子師範の校舎だったが、女生徒を師範学校に収容したため、増改築して中学校校舎に充てたのである。

同年４月からは、定員を150名から300名に増やした。当時の入学試験科目としては、読書・作文（国語）・日本地理・日本史・数学・理科・習字・英語が課されたほか、体操は希望の者が受験した。

英語教師のサンビーや体操・音楽教師を招いた。また、静岡方面への見学旅行を実施するなど、知徳体の教育の拡充を図った。21年の「学事概況」では、教員13名、生徒196名とある。生徒は36歳から12歳までの者がいた。同年、東京への転学、家業の為、疾病などのため42人が退学した。小学校・中学校生徒から文章を募集していた文芸投稿誌「少年園」で、237篇中「甲賞（第１位）」を得た生徒もいた。



山梨県尋常中学校の徽章

当時、「山梨日日新聞」に報道された行事のいくつかを挙げる。

・尊影（明治天皇肖像）拝賀式（明治22年11月）
・天長節及び立太子式を祝って風船100個に水素を入れ、短歌を付けて飛ばした（同月）
・師範学校との合同大演習（明治23年４月）
・服制を決め、海軍型帽子に「中」の字の入った桜花章、ヘルまたは小倉地の紺色の軍服型立て襟とした（24年１月）
・在校生の中の優等生表彰（24年７月）
・県会議事堂での卒業式（25年５月）
・雪合戦（26年１月）
・修学旅行（同年10月）
・日清戦争勝利祝賀運動会（27年11月）

尋常中学校の活性化もあり、根強かった中学校廃止論も26年を最後に影を潜めていった。

一方、生徒が町なかの牛肉店や割烹で飲酒放吟するなどの、風紀の乱れと学校の指導処置について指摘する記事も、地元の新聞には散見するようになった。２７年には、３年生数名が、遊興の結果、傷害事件を起こし、さらに学校の指導に従わず、授業妨害、校長以下の教員への暴言や「強迫」の挙動があった。６名を放校処分とした結果、復学を求めて３年生が授業ボイコット（ストライキ）を起こし、登校したものは百余名中６名という騒ぎもあった。指導を決定した黒川校長の決意は変わらず、最上級の５年生が下級生を説得して、事態は鎮静した。この騒動は県内の識者を巻き込んでの議論となった。

その後も、修学旅行中の不品行で停学処分を受けた件など、たびたび騒動が起

こっている。

このところ低迷していた入学者も、日清戦争（明治２８年講和）の後から、ふたたび増え始めた。ようやく「完成期」に差しかかった明治国家の学歴重視、立身出世への風潮が、県民の意識をとらえたものだった。

幣原校長の着任と校舎の新築

明治30年７月、太田町公園で校友会発会式が行われた。現在の生徒会本部、体育局・文化局の部活動、各委員会活動を統括するような組織である。が、会長は校長、副会長は教頭、庶務・編纂・記録・運動・会計の各委員会の長は教員が当った。

同年10月、「校友会雑誌」の第１号が創刊されている。記録を見ると、体育・文化両面で活発な校内の活動が行われていた様子がうかがわれる。

志願者も30年は280名、31年が350名、32年が400名と、年々増加をみた。けれども、手狭な校舎の収容能力からいって100名を合格させるのがやっとであった。しかも老朽していたから、新校舎建設論議が起こってきた。県でも、廃校か存続かの論議の鎮まった明治26年当時から、校舎新築の検討を始めていたところだった。

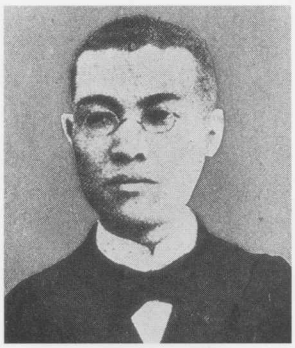
28年には、県会に西山梨郡里垣村（善光寺付近）の予定地が提案された。が、市街から離れていて不便だとの理由で反対が多く、富士川町の県有地が代替案として答申された。が、ここも鉄道（現在のＪＲ中央線）の敷設が確実となり、撤回された。

建設の予算も29年以降、県会に提案されていた。当初の計画では29年度中に起工、30年度に竣工の予定だった。が、建設地が決定しないことと、２校目の中学校を設置すべきとする論議で、計画は頓挫していた。その後、建設地については東光寺付近（30年８月）、竜王村付近……と複数の提案があった。最終的に東光寺付近への建設が決まったが、中学校の東西２校設置論が顕在化してきたために、この案も保留になり、結局、着工には至らなかった。

当時の卒業生は、30年29名、31年31名、32年35名、33年33名となっている。30年の卒業生の中には、後に、本校初の大臣となった田辺治通（平沼内閣書記官長・逓信大臣、近衛内閣内務大臣）と博士第１号の川村麟也（東京帝大医学部卒、宮内省侍医）などがいた。

志願者の増加などに見られるように、学校の評価が上がる一方で、学園騒動も相変わらず起こっていた。31年１月、授業ボイコットに端を発した騒動は、黒川校長の辞任、５名ほどを除いて職員全てが交代するという結末を迎えた。騒動は生徒が校舎を損壊するほどまでに至っていた。

同年５月、鹿児島造士館の教授だった幣原坦（当時20代）が校長として着任した。校内は騒動の余波で統制が乱れ、授業も欠けがちで、周囲の教育関係者の憂慮するところとなっていた。幣原は文部省専門学務局長から、鹿児島・宮崎と並んで天下の「３難中学」と言われた山梨県尋常中学校に「騒動の鎮定」に行かな


幣原校長

いかと言われての着任だった。

就任式は立錐の余地もない合併教室で行われた。体操教師の指導の声も届かず、床を踏みならしたり、奇声を発して爆笑を誘ったり、口笛を吹いたり、手のつけられないほどの騒ぎだった。

幣原は大声を発して「黙れ」と一喝した。さらに「教師は当分手が揃わぬかも知れないから、騒動を起こすならば今起こせ」と怒鳴った。これが後に、大島正健校長（第７代）が着任の際、「黙れ、甲州の山猿ども」と一喝したと誤って伝わった事態の真相だった。

県内では、幣原の着任後、校内の騒動は起こらず、校風が締まってきたという評判が立った。幣原は、寄宿舎などでの生徒の不品行を監督するために実施していた教師の見回りも廃止させた。確かに問題行動は跡を絶ったかに見えた。

教員が足りないため、校長の幣原自身も、週に２４時間の授業を受け持ちながら、校務を処理した。幣原は新校舎建築について知事、県議会関係者と粘り強い交渉を行っていた。が、この問題はなおも、中学校を他に増設する、あるいは分校を作るなどの一部の世論とも無関係ではなかった。

幣原の尽力が実って、32年３月、４年ごしの懸案だった建設地が甲府市内舞鶴城跡に決まった。当時、舞鶴城跡は陸軍省の所有だったが、払い下げが確実となっていたのである。

５月、着工。同月、都留分校（現都留高校）の設置、翌34年４月には、錦町の旧校舎に第２中学校（現日川高校）が設置されて中学校の増設論も決着した。さらにその後、実業学校、高等女学校の開校と続いた。

およそ１年後の33年４月25日、樺山文部大臣の臨席で新校舎の落成式を挙行した。文相は東海道線御殿場から富士吉田・谷村・笹子を経て入甲、来校した。文相が中学校の新築落成式に臨場するのは、当時でも異例のことだった。

当日は雨天だったが、文相は席上、徳川幕府の官学徽典館以来の淵源に触れ、「国家の富強発達」を図るために「中流人士の教育」は当然のことと演説し、山梨では資格のある者のうち４分の１しか入学できなかった事態を解決することの重大さに及んだ。

33年度の「学事年報」によると、校地9,410坪、建坪1,013坪。通常教室・特別教室・講堂・寄宿舎等が具わっている、とある。


明治33年に竣工した新校舎

第３章　大正期

１．大島正健校長の13年間

幣原校長が転出して５か月の間、後任の校長の決定を見なかった。地元の「山梨日日新聞」にも校長不在を憂う記事が載った。

県知事・加藤平四郎は、鹿児島・宮崎とともに天下の「３難中学」といわれた甲府中学は、普通の校長では治まるまいから立派な人物を迎えたいと、友人の麻布中学の校長・江原素六に相談をかけていた。江原が推薦したのは、奈良の私立中学校の校長だった大島正健だった。加藤知事が直接交渉に当ったところ、大島は学校教育に官民がみだりに口出ししないことを約束するなら引き受けようとの返事だった。

明治34年４月、大島は奈良から東海道線で御殿場に降り立ち、籠坂峠、山中湖、河口湖、御坂峠を越えて甲府入りした。

新任式で、全校500人の生徒の猛烈なざわめきと床を踏みならす音で騒然としていたのを、大島校長が「静かにしろ！　この山猿ども！」と一喝したことになっているが、クラーク博士仕込みのジェントルマン・シップとキリスト教に裏打ちされた共鳴的な教育観で知られた大島校長のこと、幣原校長着任の際と混同した誤伝だと思われる。

大島は相模の海老名（現神奈川県高座郡海老名町）で名字帯刀を許された名主の家の出身だった。東京英語学校（現東京外国語大学）在学中、札幌農学校の学生募集に応じ、宮部金吾・内村鑑三・新渡戸稲造らと共に、第１期生としてクラーク博士の薫陶を受けた１人だった。没落士族あるいは地域の旧支配階層の出身の子弟の中に脈打っていた「武士道」精神と「Ambition」は、アメリカ南北戦争の敗者・南軍の軍人だったクラークのそれと共鳴したと指摘する者もいる。たった８か月の教育で日本の青年に大きな感化を与えた謎は、たしかにそう考えないと理解しがたい。大島は卒業と共に母校・札幌農学校の教鞭を執っていたが、新島襄の懇請で同志社の教授に迎えられる。その後、私立奈良中学校の校長として転任していたのである。

甲府の中学校へ着任して間もない頃、地元紙のインタビューに対して、大島はこう語っている。

「何事も規則づくめでやる窮屈な学校は気に合いませんので、常に平民主義によって教育するということを希望いたしております。一体学問を文部省の一手に任せて置くというようなことは面白くない訳です。」

げんに着任した大島が定めた校則は「Be gentleman」という一言だけだった。他の瑣末な「規則・心得」は撤廃してしまったという。ほかでもない、これは「本校の学生は紳士である。紳士は規則に縛られるものではなく、自己の良心に従って行動するものである。従って校則は簡単なものでよい」とした札幌農学校の

クラークゆずりの校是だった。

実際、威あって猛（たけ）からずと言われる大島の前では、生徒はおのずから品行を正したという。大島は身長は５尺たらずでどちらかといえばずんぐりしており、広い額、大きな眼、よく通った鼻筋とその下のピンと跳ね上がったヒゲ。話す時も、少々どもりながら静かに諄々（じゅんじゅん）と語り、決して雄弁というのではなかった。温かく穏やかな中にも、謹厳で犯しがたい威厳を感じさせたという。一方で、大島は剣道や柔道にも造詣が深く、寄宿舎の生徒らと乱取りや相撲に興じることもあった。


大島校長

クリスチャンだった大島の禁酒主義。成績不振の知事の子どもを落第させた逸話。明治の元勲・伊藤博文の肖像を「不品行の点は師表とするに足らない」として拒絶した話。落第を続けていた石橋湛山がその人柄に感化された話。高山樗牛の『滝口入道』を読んでいる生徒を視学官が軟弱だと非難するのを、文学史上価値あるものと生徒をかばった話。三里も離れたところから通ってくる生徒の家を杖をひいて徒歩で訪ね、第一高等学校（現東京大学教養学部）への進学を説いた話……同窓生・旧師の伝える在任中のエピソードは枚挙に暇がないほどだ。

推理小説作家で大脳生理学の医学者だった林髞（木木高太郎）は、『故郷とその中学』という随筆の中で、自分と同年代の者の中には、中学校で動物のように扱われた者が多いのに、大島校長の薫陶のしみこんだ甲府中学で、自分が人間として扱われたことは幸いだった、と書いている。また、その声望をしたって神奈川、静岡など近県から、甲府中学を目指す者も少なくなかったとも。

日露戦争で国内が騒然とするなか、大島が「校友会雑誌」に発表した文章は「真面目論」だった。戦争のさなか、非戦論を唱えるトルストイを売国奴のように言うロシア国民を批判する文章である。36年卒業の中村星湖が早稲田大学在学中、厭戦論を唱えて、好戦的なナショナリズムに燃える周囲に顰蹙（ひんしゅく）を買ったといわれているが、これも大島の感化だったかもしれない。さらに「小国主義」と「戦争不経済論」を根底に置く石橋湛山の自由主義と大島の持論とは、さほど遠くはない。

大正３年９月、13年の間、甲府中学の精神的、教育的基盤を作ってきた大島が甲府を去る時がきた。県の政界の確執の結果とする説もあるが、地元紙には「本県教育界のためまことに遺憾」「光明を奪われた感」とのことばが見える。大島の後任には同じく難中学の一つと言われた宮崎中学校の校長だった末久喜十郎が着任した。古代中国語の音韻学者でもあった大島は、晴耕雨読の日々を送るつもりが、請われて宮崎中学校の校長として赴任して行くことになった。「天下の難中学」同士で校長を交換したかたちである。

大島の離任は、生徒に何とも言えない虚脱感を抱かせたようで、後年になっても「同窓会会報」にこんな回想を寄せる同窓生もいる。

「柔道、角力（すもう）、雄弁に青年の意気を昂揚して、明るい朗らかな大島校長の送別については、記憶しなく淋しく去って行った」

こういう雰囲気の中で、後任の末久喜十郎校長の船出も安閑としたものではなかった。まず、末久を迎えたのは、最上級の５年生を先頭にした大島校長留任運動である。大島自身の辞意が固いと知るや、生徒の騒動は杉本栄一郎教頭の校長昇格運動に変わった。それらはそのまま末久新校長への排斥運動となったのである。騒ぎは同窓生や保護者まで巻き込んだものとなった。

末久は東京帝大哲学科の出身である。難中学の悪名高い甲府中学への赴任に際し、彼は山梨県人の崇敬してやまない武田信玄の研究をして乗り込んできた。これをもって生徒を感化しようと計画していたのである。生徒の眼には、スマートで英語にも強く、紳士然とした大島に比べて、末久の教育方針はあかぬけないものと映った。さらに小説・映画を見れば停学、試験で１科目でも60点を下回れば落第させるという、まさに「灰色の青春」とでも言うべき厳しい指導方針も、末久の手で復活された。

大島が退任した大正３年は、大正天皇が「教育に関する御沙汰」を発し、これを受けた文部省も「列強競いて国力の充実を図り、国運の進展に努むる」時にあたり、「益々教育の徹底を図り、将来の国民をして各々其本分を尽くさしむべき」といういう訓令を出した時代でもあった。甲府中学だけが、とりわけ校長の末久ひとりが硬派の教育を実践しようとしたのではなかったのである。

が、生徒の自主性や自律を重んじ、キリスト教精神に裏打ちされた大島校長の自由主義の横溢した校風が、一挙に冷却したように、生徒の眼には映ったのである。

下級生に対する意味のない暴力行為も校内に頻発し、生徒の中には気持ちのすさんだ行状に及ぶ者もいた。遊興の巷（ちまた）を彷徨する者もいれば、彼らに対する「清潔組」の鉄拳制裁も起こった。授業ボイコット（ストライキ）の計画もあったが、未然にくい止められた。これらは地元紙にも報じられるほどの状況だった。

しかし、末久が生徒の暴力行為を「兄弟げんか」とし、生徒の遊興行為を保護者の監督不行き届き、あるいは大人社会に影響された悪習として戒めるに及んで、校長に対する生徒の見方が変わった。末久はただの専制君主ではなかったのである。最終学年において大島校長を失った憤懣（ふんまん）から、騒動の煽動者の一人となっていた前述の林繰の文章は感動的ですらある。

わし達五年生一同は同級生と下級生の遊惰者と認むる者をなぐった……「お前の身体に宿る悪魔を追い出してやるのだ」と声なきうちにてんでがこう叫んで居たのじゃなかったか。心が緊（ひ）きしまってみんなであれほど強く一致団結したのをわしは頼もしく思うた。みんなの顔を見ると心から一緒になる念が湧き立って来る。学校を愛する心が湧き上がって来る。校風のために人一倍論じたり心配したりして居たわしは、わしに勝って強く校風を愛する多くの人々を見た。……末久先生の子となってわし達は温かく五年の級の後半期を過ごした。今度のなぐった事件などで先生の夜の目も眠られぬ御心配をおかけし

たことはまことにおはずかしいのです。等しく子供と見らるるお心に甘えてお父さんに対するような我儘をして御迷惑をかけたことをわし等ははじる。先生の立場を思うときあの寛大な処置が感謝される。

2．舞鶴城跡の学校生活と教師群像

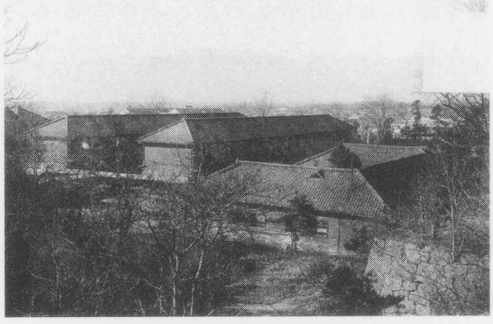
『山梨県立中学校・山梨県立甲府第一高等学校百年誌』（平成４年５月）には、舞鶴城時代の卒業生の回想をもとにまとめた文章スケッチが収められている。当時の様子が生き生きと再現されているから、ここに引用してみたい。

擬宝珠のついた太鼓橋を渡る。左は大石で築いた高い石垣がある。右は内堀で夏は蓮華が咲き釣り糸を下げる人も点々と見える。強烈な匂いを放つうるしの並木を通りすぎると橋の約50メートル先、旧大手門の所に黒い校門がある。山梨県立甲府中学校とその歴史を物語る看板が掲げられている。校門をくぐると門衛所がある。時には厳めしく、時には笑顔で迎えてくれる。すぐ左に曲がった広場に下駄型の二階建ての校舎本館があり、両袖が特別教室、中央のつき当たりに講堂、講堂の東にはほぼ同じ大きさの生徒控所があり、その東の石垣の南に土蔵造りの金蔵が一つ残っている。

生徒は門をくぐると左に曲がって、校舎の東を回り、生徒控所に入る。控所の中には大きな下駄箱のような本箱があり、各級ごとに別の位置におかれ、それに書物や弁当を入れ、ベルを合図に南の入口の側に廊下から校舎に入る。控え所と講堂の裏に寄宿舎が東西に二階建ての二棟があり、その左に賄（まかな）いがあり、その東に食堂や、風呂場があり、西に銃器室があり、その西に西の門があったが、日常は閉めてあり、運動会の時だけは開いて運動場への通路とした。その後ろに高い石垣があってその西端から北の運動場に通じている。運動場は南は石段で寄宿舎の北の石垣の裏、西は内堀の石垣の内側の坂で、運動会の時などは自然の観覧席に役に立った。運動場の北寄りの中央に一本の高い松があり、松のため運動場の地ならしの時、その周囲だけ土を残したので、そこは小山のようになり、しかもその周囲には水が湧いて年中ぬかるみになっている。

春になると学校の土手にはあめ色の葉と一緒に山桜が美しい。秋になると真っ赤な蔦がお濠の石垣を明るく綴る。

夏の休みにはまわりの濠一面が、蓮の花でうずまる。旧橘町に面した堀の石垣の上からは白峯（根）山が遠望され、生徒たちはこの遠山を眺めながらよく



寄宿舎全景

弁当を食べた。構内の至る所に緑の濃い安息所があった。

風格はあったものの、県を代表する中学校としては質素な校舎だった。大島校長時代にも県に校費の増額を要求することが難しく、設備の点でも十分とは言えなかった。が、ここで繰り広げられていた学校生活の中身は実にぜいたくなものだったと言える。

明治32年の「中学校令」改正に即応するため、県では「山梨県中学校学則」を制定、更に翌年、文部省の「中学校令施行規則」に準拠して「県立中学校学則」を制定した。その後も35年、41年、44年の改正に伴って、甲府中学校の「学則」も部分的な改正を行った。

ことに文部省による44年の改正は、全国の中学校の教育課程にもかかわる全面改正となった。文部省の方針として、国家主義の観点から、修身・国語及漢文・外国語・歴史・法制及経済などの教育目標並びに教授内容が改められた。また、実際生活に対応する観点から、数学・博物・物理・化学の教授内容が変更され、新たに実業の科目が設けられた。身体訓練の観点から、体操の教授内容に撃剣・柔道を加えることができることになった。また、訓育の観点から、寄宿舎の建設が奨励された。

45年３月、甲府中学校でもこの指示を受けて教育課程を全面的に改変した。これは大正期に継承、実施されていった。

明治40年から大正６年にいたる間、本県の中学校は本校と日川中学校、それに43年に開校された都留中学校の３校だった。そのため各校の定員を150名（都留中学校は60名）として、３校連名で生徒募集を行い、第１志望校と第２志望校を認めていた。

当時の本校の志願者はおよそ300名から350名の間であり、定員から言えば、倍率は２倍から2.5倍だった。大正３年の「山梨教育」によって、志願者が多い地域を見ると、中巨摩77・北巨摩69・甲府53・西山梨42・東八代23・南巨摩20・他府県17……となっている。かなりの難関校であったことには間違いなく、小学校の３年あたりから準備にとりかからねば、甲府中学校の「白線二条」の校帽をかぶれなかったという。成績優秀者でなければ、小学校では推薦をしてくれず、たとえ受験をしても、第２志望の遠隔校に振り分けられる可能性もあった。大正期後半になると、倍率は３倍近くになった。「山梨教育」などには小学校での受験勉強のもたらす弊害を憂う記事が見られる。

同窓生で自然主義の作家・中村星湖（明治36年卒）が、二葉亭四迷・島村抱月などの絶賛で「早稲田文学」の懸賞小説第１等を得た『少年行』は、明治末、地方から甲府中学を目指した生徒の心情、生活、さらには懊悩（おうのう）のうかがわれる名作である。この小説の影響で東京に出て学問を目指したという日本各地の高齢者で今なお、「『少年行』を再読したいが、どこで手に入るか」と尋ねる人々も少なくない。

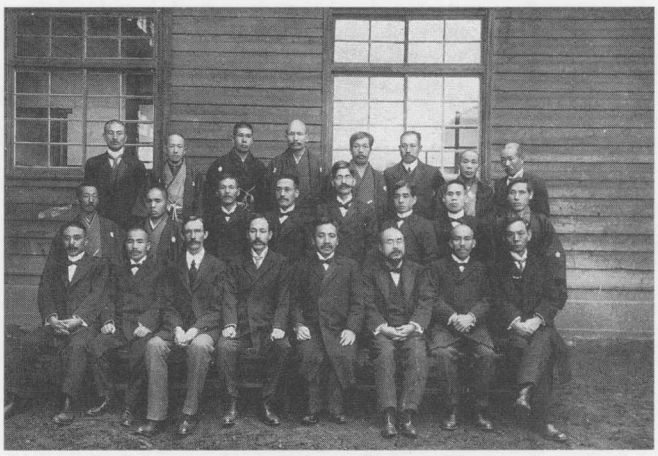
また、志賀直哉が「世界」（岩波書店）に発表した短編小説『いたづら－野尻抱影君に』（昭和29年）は、大正期の甲府中学校の生徒・教師の姿を描く、貴重な作品である。野尻抱影は大島正健校長の娘婿で本校英語教師であった。野尻は後年

ラジオ・テレビで星と文芸について倦むことなく語り、多くの天文愛好家を育てた。また、今も読み継がれる多くの著作で知られる。昭和12年に発見された「冥王星（プルートー）」の和名の命名者でもある。彼が星に目覚めたのは、毎夜甲府中学校の理科室の天体望遠鏡を使ってからだというし、山岳に強い関心を持ったのは、生徒と北岳登山をした時からだという。野尻の白根山登山記は近代南アルプス登山史上でも、最も古いものの一つである。

野尻のような名物教師も少なくなく、日本画壇の重鎮・望月春江（大正２年卒）の回想を見ると、次の名が挙がっている。付したコメントも望月の表現である。

・大島正健
　北海道大学のクラーク博士の薫陶を親しくうけられた明るく大きな人柄
・物理の宮北（順太郎）・博物の菊地（留五郎）教諭
　その分野に名だたる教育家
・体操の加藤（五郎）大尉
　西南戦争に従軍された勇士で皆こわがっていながらも心服していた
・中山（正俊）教諭－われわれ生徒などにはもったいないようなえらい漢学者
・マンロー（ロバート＝Ｂ）先生－イングランドのそれこそ本物の英会話
・モノオウ（物應虎之助）先生－神様のように通訳のうまい
・小林（大次郎）先生（国語）
　俗ばなれしていて個性をもって力強い内容を発表される
・野尻抱影（正英）先生－星の研究家のスマートな江戸っ子の青年英文学者

その他、教頭の杉本栄一郎（英語）、伊藤啓次郎（図画）、渡辺義丸（国語漢文）など、個性豊かで優秀な教師が独特の校風を作り出し、生徒たちに大きな影響力を持っていた。この陣容はひとえに校長だった大島正健の人柄によるものだった。



明治末から大正初期の職員（大正２年）

3　山梨県立中学校の生徒たち

成績評価

明治末から大正初めにかけては、中途退学者が多く、卒業する者は入学者のほ

ぼ半数だった。中途退学の理由は疾病、転学、懲戒、死亡のほか、成績不良などによるものだった。

また、落第、留年も少なくなかった。大正５年の学年ごとの不合格者（落第者）の数は、１学年８名、２学年５名、３学年９名、４学年13名、５学年９名の計44名だった。年度によって多少の差はあるが、在籍生徒の約１割が落第したことになる。１年と３年の在籍は多かった。３学年が３学級だったのを４学年では２学級にするために、落第が多かったという見方もある。

明治43年卒のＯＢの回想では、「二回三回は普通、隔年落第すれば十年計画で中学をやらねばならぬ」などとあり、「一度落第した方が重みがあって『多額納税者だぞ』と自任して威張ったし、幅を利かした」という。「学則」にも１科目でも「甲乙丙丁」の評価の「丁」があれば進級できないと定められていた。「及落判定会議」の行われる会議室の縁の下に潜んだり、上の階の床に耳を付けて、いち早く様子を知ろうとする生徒もいた。

とは言え、一部の「赤い腕章」組（秀才）を除いて、かなりの生徒はのんびりしたもので、テニスや野球に熱中していた。が、試験の日程が発表になるや、「連合艦隊が敵艦見ゆとの報に接した以上の大狼狽（ろうばい）」で、学校中がざわめいて上っ調子になり、廊下を歩く足音さえ違ったという。授業は上の空だから、多くの教師が気をきかせて休講とした。さらには職員室にたむろして、教師からヤマを聞こうとしたり、さぐりを入れたりする風景が見られたのは、現在とそう違いはなかった。

寄宿舎生活と校友会活動

大正末年には寄宿舎は１５室あり、各室には１年から５年まで各一人ずつ５名が入っていた。起床後、就寝前の「気をつけッ」「番号」「１・２・３…」という人員検査や「自修室」「寝室」での生活態度、外出時間、物品の所持などについてもこと細かな規定が設けられていた。寄宿生にはこの規定を窮屈だとして不満をもらす者もあった。

が、一方で平日の放課後から夕食まで、休日の朝食から夕食まで、金曜日の掃除から夕食までの外出が許されたり、舞鶴城内で肝試しをやったり、大島校長や寄宿生との相撲、内緒の買い食いなど、青春を謳歌することもあった。

舎監は若い教師が務め、厳しいながらも、それぞれの今日の得意の「課外」を毎夜のように開催して、寄宿生以外の者も聞きに訪れたこともあった。なかでも、野尻正英（抱影）が舎監だった頃は、恩師坪内逍遥ゆずりのシェークスピア講義のほか、『レ・ミゼラブル』（ユーゴー）『ポンペイ最後の日』（リットン）『ドン・キホーテ』（セルバンテス）『失楽園』（ミルトン）『ウイリアム・テル』（シラー）について語る「課外」が大人気だった。野尻作詞といわれる「甲中寄宿舎歌」も「嗚呼玉杯」のメロディーで盛んに歌われたという。

運動部には柔道、撃剣（剣道）、庭球、野球、遊戯の各部があったが、文化部は「学術部」としてひとくくりだった。その他、「校友会雑誌」の編集にあたる編纂部、会計部、庶務部があったのみである。

甲府中学校寄宿寮歌

金甌無漏たぐひ無き
三千年の大八島
わきて自然の寵あつく
國の数より撰まれて
山河の粋を集めたる
吾等の甲斐を誇れ人

山に白根の雪ありて
人に機山の偉圖ありて
彼の霊此の偉おのづから
宿せる既に凡ならず
かてゝ母校の懐に
学べる兒等よ何の幸

其の若き子が行末の
いや安かれといつくしみ
育み守る南北や
二寮の甍こゝぞ実に
時流の外に虹を吐く
自由の郷土自治の領

自由よさあれ不羈は敵
放逸は此れ自治の賊
縁も深き室友と
規則に越へさる春秋を
いそしみ勵め諸共に
理想の道の果迄も

明治42年４月20日

運動部の試合相手も、大正６年ころまでは日川中学、甲府商業学校、師範学校、陸軍甲府歩兵四十九連隊、あるいは社会人のグループ、さもなければ県外の中等学校との対抗試合や大会しかなかった。当然ながら、県下ではいずれの部も無敵を誇っていた。

なかでも庭球部の伝統は古く、鉄道が甲府まで延長された後、日露戦争当時、運動部長だった教師の加藤五郎が創部した。にもかかわらず、大尉でもあった加藤は「テニスなどは女子（おなご）どものワザじゃ」と柔剣道を奨励していたという。城内のコートは草も生え凸凹もあり、ライン代わりに綱や針金を張った粗末なものだった。

記録に残っている試合としては、明治38年６月の連合紅白ゲームが最初である。これには甲府中学の教師チーム、師範学校・甲府高等女学校・甲府商業の混成職員チーム、甲府中学生徒チームで闘ったが、優勝組はほとんど甲中の生徒チームだったという。その後、師範や日川中との対戦はあったが、古い儒教倫理が禍いしたのか甲府高女との試合はなかった。ただし、甲府高女のコートはよく整備されており、甲中・日中・師範の対抗試合の会場として利用したというちゃっかりした面もあった。興奮のあまり、甲中・日中の応援団があわや血の雨をふらすような緊迫した場面もあった。

県下に敵なしと誇った甲中だったが、明治39年、諏訪中学に遠征し、敗戦を喫した。翌年の試合は雨天で中止、雪辱を記したのは、43年の遠征だった。この間、甲府商業に続き、農林、甲府工芸（現甲府工業）、蚕糸（現石和）などにテニス部ができ、甲中に試合を挑んだが、県下では相変わらず無敗を誇っていた。



寄宿舎

創立30周年の頃

明治39年、山梨県立甲府中学校と改称した本校は、校旗を制定した。制定の経緯は次の通りである。

明治13年以来、本校には校旗がなく、最上級の５年生が制定の提案をした。全校生が醵金をし、校友会が制作して学校へ寄贈したものだった。図案は図画担当の伊藤啓次郎が当たり、甲府の大木呉服店が制作した。９月17日に行われた校旗樹立式の様子を「校友会雑誌」は次のように記す。

一同グランドに整列す、須臾（しゅゆ）にして東隅石垣の間より彩雲のたなびくが如く我が美はしき校旗は現はれ来りぬ。一同捧銃。校旗は場の中央に翩

翻（へんぽん）として朝風に翻りつ。

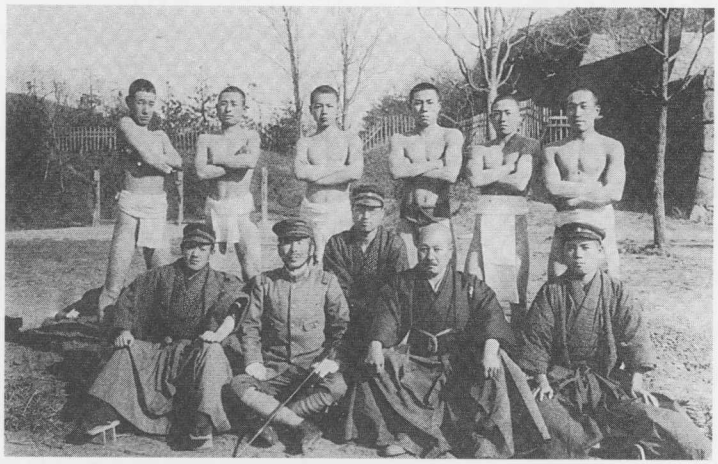
まさに、生徒一同の感激ぶりが感じられる描写である。

岩波政雄元校長によれば、第２次世界大戦の敗戦後、アメリカの占領軍将校が旗の美しさに感激、「記念品」として接収、アメリカに持ち帰ったという。岩波は行方を求めてアメリカ合衆国内を探したことがあったが、所在が知れなかったという。

明治43年10月23日、創立30周年記念式典が挙行された。卒業生主催の祝賀会の席上、大島校長によって同窓会設立の提案がなされ、満場一致で決定を見た。創立委員を選出し、翌年４月、弁護士・山本保を初代会長とする同窓会が創立された。

45年の３月には、明宮嘉仁皇太子（後の大正天皇）の甲府中学行啓があった。舞鶴城内東曲輪の行在所機山館を出て、人力車に乗った皇太子は熊谷知事の先導で太鼓橋を渡り、学校に到着した。大島校長より「学校要覧」の説明を受けた後、３年から５年までの教室を視察した。「論語」の講義をしている教室では、皇太子が生徒の机に歩み寄り、教科書を手にとって見るというハプニングもあった。代数、図画の授業を見たのち、展示してある生徒の作品を見た。記録によれば40分間の学校訪問だった。

同じ年の７月、明治天皇が崩御した。大正と年号が改まった９月、大島校長以下３人の教師が明治天皇御大葬参列のために上京した。



角力部員（大正８年）

4　江口俊博校長と強行遠足の始まり

大正９年、本校は創立40周年を迎えた。

記念行事は１週間もの間行われたが、その皮切りの日の夕刻、生徒は校庭に集まり、手に手にほおずき提灯を持って市内の目抜き通りを行進した。行進しながら声を張り上げて歌ったのが国漢の教師・渡辺義丸作詞の記念歌であった。

儒教主義の教育を貫いた末久校長が退任した後、大正６年から田村喜作が校長

旧制甲府中学校創立四十周年記念歌

１．千古に映ゆる白雪の
富嶽を高く仰ぎ見て
青巒回る山甲斐の
清き天地を揺藍に
胸に機山の血を受けて
生れ出たる甲斐男児

２．彼の強兵の夢の跡
深く埋むる下草に
舞鶴の城の石垣も
崩れ行く世を只管に
学びの道に勤しめる
我が六百の兄弟よ

３．水泡と消えん名を負いて
人は砂上に築かんと
争い騒ぐ中にして
深き思いを胸に秘め
やがて叫ばん秋を待つ
義人の熱は我に在り

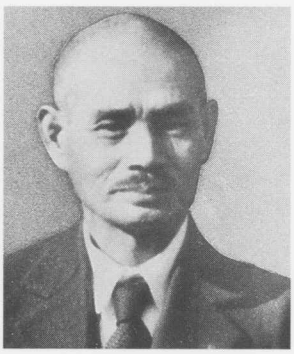
４．今新生の鐘鳴りて
遅くるる者を忘却の
悲しき淵に葬れと
一簣を挙ぐる若人の
腕に無限の力あり
眉に生命の影宿る

５．古城の桜幾度びか
遊亀の池に散りて消え
我が学舎も年古りて
今年四十の齢来ぬ
喜び集う若人の
胸に幾十の思いあり

に就任していた。

田村の在任中の大正12年春、入学試験漏洩事件が起きた。校長から入学試験の問題を漏れ聞いた有力ＯＢが、知人の子供（在校生）に教え、さらに他の子供（在校生・受験生）にもそれを広めた。これを知った在校生が校庭で「今日の試験には不正がある」旨、演説をしたから大騒ぎとなった。さらに校長室に乗り込んで、事実を確認、翌日、再試験となった。田村校長は引責辞任をした。

田村の後任となったのが、長野中学校校長だった江口俊博である。


江口校長

江口は一燈園の西田天香の崇拝者だった。西田は「無所有・奉仕」をモットーとして、田中正造や徳富蘆花・倉田百三・阿部次郎・安倍能成・和辻哲郎・河上肇・尾崎放哉など大正期の知識人に強い影響を与えたと言われている。西田に私淑する江口は、大島正健同様、禁酒・禁煙主義者だった。甲府中学校校歌を作詞した三井甲之とは帝国大学からの旧知の間柄である。江口は勤労教育を信条として、自ら雑巾をもって校内を隅から隅までピカピカに磨き上げた。また、それまで下駄履き（土足）で校内への立ち入りが自由だったのを上下履きを区別したのも江口である。

在任中の江口のエピソードにも事欠かない。

ある日、10人ほどの県会議員が学校視察に訪れた。窓から首を出した生徒らは県議の一行に「サボ議員！」と野次を飛ばした。当時の県議会は欠席や遅刻、居眠りが目立ち、新聞にも批判の記事が相次いでいた。生徒の罵声に怒った県議が「あの生徒をここに連れてこい」と詰め寄ったが、江口は「責任者は私ですから、私を責めてください」と答えるばかりだったという。

江口の着任の翌年（１３年）、県下に先駆けて甲府中学校に山岳部が結成された。生徒たちは校長に直談判をして校友会に山岳部を加え、顧問の教師も決まった。当時の甲斐山岳会の会長・若尾金造、監事の野々垣邦富の協力で、講演や映画を加えた華々しい発会式を行った。その後も再三講演と映画の会を催した。そして、その年の山行計画を次のように立てた。

第１班－駒・仙丈・白根縦走（５泊６日）　第２班－甲斐駒登山（１泊２日）
第３班－八ヶ岳縦走（１泊２日）　第４班－金峯登山（１泊２日）
第５班－富士登山（１泊２日）

いずれの班も15.6名から20名を越えていたというから、総勢で90名にも及ぶ大所帯である。最も「健脚向け」である第１班には江口校長も加わった。山小屋が一杯だったため、江口は生徒を小屋に押し込んで、自分は屋外の松の枝をはらった上に寝た。

その年、文部省が明治節の11月３日を国民体育日と定め、各自治体、諸学校は記念行事を実施せよと通達した。県内の各学校は運動会、競技会などを計画、実

施することになった。

甲府中学ではできたばかりの山岳部が、月例登山、夏季休暇中の各方面への山行の経験を踏まえて、12時間の間、歩けるだけ歩いてみようと提唱した。甲府中学には以前から２泊３日の全て徒歩による「剛健旅行」の積み重ねもあった。剛健旅行は３年生中心に行われていたが、右左口（うばぐち）峠から精進湖、青木ヶ原から船津、御坂峠から石和を経て帰甲するという強行軍だった。他にも、雪の降った日、「抜き打ち」で行われた昇仙峡までの雪中行軍もあった。

大正12年に起きた関東大震災は、文明開化以来築き上げてきた近代都市文明を一瞬にして壊滅させた。たまたま在京していた江口は、そのなかで交通手段を奪われ、平静を失って茫然自失する都会人の光景を目の当たりにしていたのである。体力と精神力の双方をバランスよく鍛えることを教育テーマにできないかと、彼は考えていた。

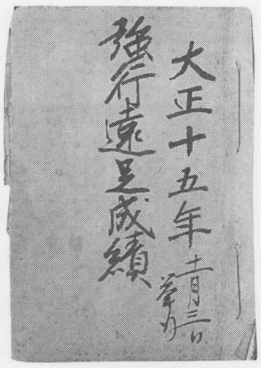
誰でもできる「歩けるだけ歩く」という生徒の提案に、江口は諸手をあげて賛成し、11月４日を期して、東へ向かって朝６時から夕方の６時までの12時間、中央線に沿って歩くことになった。実施してみると生徒たちには予想以上の好評だった。これが77年（平成12年現在）になんなんとする「強行遠足」が始まった発端だった。生徒からは、12時間では物足りない、東は笹子峠があって適切ではないとの意見集約がされた。翌年から西へ向かい、24時間かけて諏訪、松本方面を目指すこととなった。

山岳部の結成ばかりでなく、校友会の活動はさらに活発化していた。

すでに明治36年から設置されていたテニス部の活躍はめざましかった。大正末から、毎年１回、松本高校（現信州大学）を会場にした新潟、長野、山梨、富山の４県対抗テニス大会が開催されていた。本県からは甲府中学のほか、日川中、師範の３校が出場、合わせて12校が覇権を競った。が、４県では山梨県勢が断然強く、決勝を争ったのはたいていこの３校同士だった。特に甲府中学は大正12年から３回連続して優勝した記録が特筆される。さらに大正15年の全国中等学校庭球大会では日向正善・宮崎久雄のペアが全国制覇の快挙をなしとげた。

その頃には校内のテニスコートも整備され、大きなアンズの樹を挟んで２面のコートがあった。部員だった志村彦七は在校中に優勝旗23本を獲得したと誇らしげに回想している。

テニスと前後して、柔道部、剣道部、野球部の各部も第１期の黄金時代を迎えていた。



最古の強行遠足記録

第４章　昭和前期（戦前）

１．新校舎への移転と50周年



大正12年、これまで100名だった入学定員を200名に増やした。校舎はいっそう手狭になった上に、建設後25年を経て、校舎の老朽化が進んでいた。一方、県庁の庁舎自体も古く、いずれも増改築が焦眉の急となっていた。

大正15年、県議会で校舎の移転と新築が議決され、ただちに用地選定と設計に着手した。建設地は西山梨郡千塚村（現甲府市美咲）の１万坪と決まり、舞鶴城内の跡地へは県庁と県会議事堂を建設することとなった。建設予定地の地主と県との間の訴訟騒ぎもあったが、昭和２年９月、本館ならびに敷地の整地工事を起工することとなり、３年７月には、生徒控所、銃器庫、合併教室までを竣工して、移転を完了した。

前年在籍数で1,000人に達した生徒たちが、博物の標本、物理の機械などこわれやすいものを１つ１つ手で運んだ。さらに各自の机。生徒の長い列が「アリのお引っ越し」のように、連日舞鶴城の旧校舎から新校舎を目指して朝日通りを行列する風景は見物だったという。当時の新聞には、「全国に並びなき新時代の中等学校として誇り得る」とか「二十世紀の科学時代に立案された校舎であるだけに特別教室にもっとも重きをおいてその数約十六に及び……」という賛辞が連ねられた。

移転を前にした昭和２年２月、江口は「校友会雑誌」に、生徒に対するこんな内容の要望を記した。

本校にどうも少し学業に不熱心な傾向を持つ人達が往々にして居る様に見受けられる。及第した落第したでなくて問題の中心は親切気を働かせて仕事をしたかせぬかなんである。親切気を働かせ仕事に精出して暮らすなら五年の課程をよしんば六年かかり七年かかってもタイシタ損害とは思われないが間に合わせ根性、ゴマカシ根性で暮らすんだったら五年の課程をスラリと五年で通っても其人は駄目な人である。度々云うことだが吾吾は新校舎に引き移るまでに出来る限旧来の陋習を破って置きたいとおもうが、本校生徒の一部に漂うて居る怠業気分の一掃は急務中の急務だと思う。出来不出来は種々の事情よりして自ら免れ得ないとしてもグズグスに怠け気分で居る生徒は一人もない様になりたいと思う。誰を見てもカイガイしく働いて居ると云う事でありたいと思う。甲斐の国の首府、甲府中学校。甲斐の国の精鋭から成り立って居る本校生徒の旗印は甲斐甲斐しい人になると云う事でありたい。一千の青少年クスボッタ顔をして居る者は一人もなく、丁度此甲府盆地の天気の様に常に快晴で甲斐甲斐しい顔をして居る事を本校の面目としたい。澄み渡るあの日新の鐘の音を聞きながら諸君の凡てがカイガイしく働いて居る其事が何よりも頼もしい事ではないか。

「カイガイしく働く」というのは、西田天香の信奉者で勤労実践教育を信条とした江口にふさわしい言い回しで、現在で言う所の、教科学習および教科外活動の双方に対する積極的な取り組みという意味だったろう。江口は始業式その他、機会あるごとに、「引っ越し準備」としてつまらないガラクタは捨てて行こうと呼びかけている。「ガラクタ」とは一部の生徒の「心の中に蟠って居るイタズラ根性」だった。

移転後も特別教室、武道場、講堂その他の付属工事は進められ、昭和４年９月、予定の工事の全てが完成した。建物の総坪数は述べ2,011坪余、建築総工費30万675円79銭だった。本館は鉄筋コンクリート３階建ての耐火耐震構造、生徒控所、合併教室、特別教室、武道場、講堂はモルタル造りの準耐火建築だった。

この年、校歌も制定されている。甲府中学校に在籍した三井甲之助（ペンネーム甲之）の作詞である。三井は東京の私立高校に転学した後、東京帝国大学に進学、伊藤左千夫の率いる根岸短歌会の若きホープとして歌を作る一方、文芸批評の執筆、「馬酔木」「アカネ」などの根岸短歌会の文芸誌の編集に当たり、同会分裂後は全国紙「日本」（後「日本及日本人」）ほかの文芸批評で活躍していた。三井は校長の江口と旧知の間柄であった縁から作詞を依頼された。

ちなみにその後作られた日川中学校歌（現日川高校歌）は、三井のあっせんで東京帝国大学の友人で、同じく「馬酔木」「アカネ」の同人だった大須賀乙字の作詞になる。

新校舎の屋上には直径40センチメートル、高さ60センチメートルの「日新鐘」も吊られた。舞鶴城と訣別したのを機会に「古い伝統の中にあってそれを忘れず、しかも日々に新たな向上と発展を求めよう」という意図から、江口校長によって命名されたものである。校舎の正面玄関には国漢の教師で「雲母」の俳人でもあった今村霞外の撰で、江口が揮毫した、「贊天地之化育」も掲げられた。「学校教育は、大自然が万物を生み育てているのを手伝っているのだ」という意味で、江口の我執を捨てた謙虚な気持ちが端的に表現されていた。

講堂その他学校施設の全てが竣工し、待望の落成式が行われたのは、昭和４年10月22日だった。「山梨日日新聞」に

モダン新校舎で／栄ある甲中落成式／
式後先生も交わって祝賀音楽会／きょうは五十年記念式

とあるように、この機会に創立50周年を１年繰り上げて祝った。新校舎で気持ちも新たに再出発したいという決意の現れだろうか。

50周年を記念して歌も作られた。

今となっては誰の作詞がわからないが、50周年を迎えると同時に校舎が新築落成した喜びと若者の意気あふれる歌詞である。時局のなせる技か、お得意の「機山」（武田信玄）に加えて、勤皇の志士「（山県）大弐」の名も見える。

甲府中学校校歌（三井甲之 作詞）

1．我等は日本に生れたり
神の御代より一系の
皇統載く我國に
生れしことのうれしさよ
皇國に榮えは天地と
共に窮りなかるべし

2．大和島根に山めぐる
甲斐の國あり水清き
郷土の歴史顧みよ
我等の務め輕からず
見よや南に富士が嶺は
皇國の鎭めと聳えたり

3．大海原の搖りやまぬ
波をも風をも凌ぎつつ
護れ皇國を諸共に
國民擧りて國のため
撓まず萎縮まず辟易がず
進むぞ大和ごころなる

甲府中学校創立五十周年記念歌

1．南芙蓉の峰高く
　水清きさと山梨の
　徽典の流れ　よどみなく
　星霜ここに五十年
　秋たけなわに　紅葉葉の
　夕日に映えて麗しき

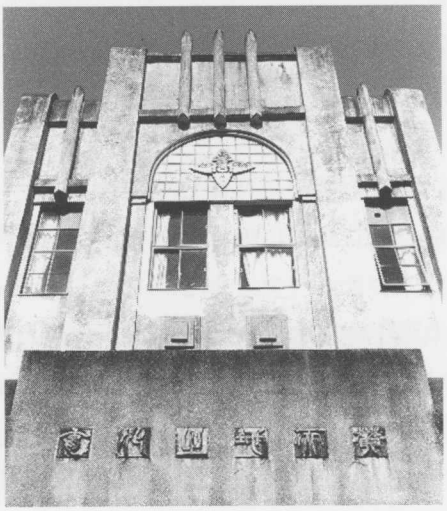
2．青巒めぐる城北に
　毅然と立てる三層楼
　機山の壮途　胸に秘め
　大弐の熱を受け継ぎて
　希望輝く一千の
　我同胞の意気見ずや

3．聞け日新の鐘の音を
　向上燃ゆる若人の
　高なる胸に響くなり
　天地の化育を賛くちょう
　重き使命を担いつつ
　立て甲州の健男児

当日の午前中は落成式、午後からは祝賀音楽会となった。東京国立高等音楽学院生徒と甲府中学音楽部員が出演した。夜になると６時から全校1,000人の生徒が、手に手に提灯を持って学校から太田町まで行進した。途中、県庁、市役所前では期せずして「万歳！」の声が上がり、太田町公園に着いてからは、万雷のような「甲中万歳」の声がとどまることを知らなかったという。

翌日は創立五十周年記念式典に引き続いて、記念講演会が催された。

さらに翌日は全生徒の参加する運動会ならびに絵画展が催された。絵画展には師範、韮崎中、都留中、身延中、甲府商業、甲府工芸からも出品があった。



美咲校舎と「賛天地之化育」の題字

2．昭和初年の学校生活　－軍事教練から甲子園出場－

新校舎の学校生活はどんなだっただろう。

１日は日新鐘の音で始まる。生徒は生徒控室の下駄箱前で上履きに履き替え、控室前に掲示されている時間割変更板を眺めてから各自の教室に入る。彼らの服装は小倉の黒の五つボタンの「軍服型」、袖には幅３分の楠筋と桜花章、帽子は白線２条縫い込み桜花章の「海軍型」帽だった。校章の真ん中には「中」の字が誇らしげだ。靴は黒の革靴かゴム底靴で、上履きはゴム底の白い運動靴だった。生徒の６割は徒歩で、２割は自転車、県下全域から通ってくるため汽車も１割いた。

教室では席が決められている。１年の最初は入学試験の成績順、進級してからは、学年成績の１番から４番を１組から４組へと振り分け、各クラスの中ではやはり成績順の席だった。後ろの席ほど前年度の成績がよかったわけで、どこに座っているかで、その生徒の成績が一目瞭然だった。最後列の隅は赤ラシャの布を２枚重ねて左肩につけた組長の席、その横に赤ラシャ１枚の２人の副組長が座った。組長と副組長は席と共に成績によって自動的に決められていたから、甲府の町でも赤ラシャの肩章は注目された。

授業は組長の号令で始まり、また、終わる。「生徒心得」には「全員起立し不動の姿勢」をとり、「上体を十五度前方に傾け先生に注目」とある。厳しい進級、卒業の条件があったから、授業態度はおおむね真面目なものだった。高等学校（現在の国公立大学）、専門学校（現在の私立単科大学）、大学予科、私立大学（総合）、

士官学校、師範学校など、８割以上が進学志望だったからでもある。

成績評価も、昭和初年から戦前までは、およそ次のようだった。80点以上－甲、60点以上－乙、40点以上－丙、ここまでが及第である。以下、20点以上－丁、20点未満－戊。

カンニングなど不正行為も少なくなかったから、それを憂う生徒の声が「校友会雑誌」にも多く見られる。昭和２年の文部省令で定期試験偏重でなく「平素の学業成績」を考査せよという通達があった。現代にも通じる「普段点」の導入である。

江口が日常の学習を「カイガイしく」せよと訴えたのは、こういう事情もあった。

学友会に設置された部活動も増えてきた。昭和５年の一覧表では、次の17の部の名が見える。雑誌部、講演部、剣道部、柔道部、野球部、庭球部、弓術部、角力部、陸上競技部、蹴球部、山岳部、水泳部、音楽部、書画部、園芸部、勤労部、会計部。学友会の会長、副会長、部長は相変わらず全て職員で、生徒から選ばれた若干名の委員がいた。これは昭和20年の終戦まで変わらなかった。県の中等学校体育連盟が結成され、対外試合の機会は以前よりも増えた。

文化部の活動も盛んで、講演部が雄弁大会に出場したり、購入したばかりのピアノの披露音楽会を始め、他校との交流も盛んになった。

この時代で特徴があるのは、大正15年に創部した勤労部である。勤労奉仕を活動とし、蓮沼門三が創始し、平沼麒一郎を団長とする全国組織の「修養団」の学校における受け皿でもあった。向上会、早起会、校舎内外の美化活動のほか、県立図書館新築移転の手伝いなどの奉仕活動を行っていた。江口の働きかけもあったとはいえ、「勤労部＝修養団」は大正という時代の社会意識、修養観念の影響を受けた職員、生徒の共感を広くよんでいた。

一年間を彩る行事としては、現在と同様な入学式、卒業式、あるいは年度、学期の始め終わりの式のほか、四大節（新年・紀元節・天長節・明治節）、修学旅行、岳麓旅行、強行遠足、運動会などが恒例行事だった。さらに、野外演習、営内宿泊、軍事教練などもあり、前述の学友会の部活動を含めると学校生活はかなり忙しいものだった。

昭和６年、文部省は「中学校令施行規則」の全面改正を行った。その要点は次の３点だった。

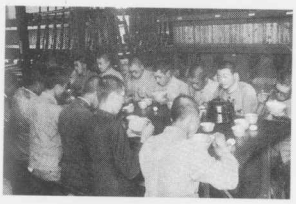
①全学年に渡って共通の基本科目の他、４学年以上における課程の選択。
②当時広がりつつあった「危険思想」に対して、すべての科目において国体観念の養成・精神教育の振興に資すること。
③勤労を重んじる気風の養成。

学校行事にも時局は反映し、例年２月の紀元節にあたっての建国祭を盛大に挙行すること、靖国神社の臨時大祭と呼応して武田神社、勤皇の志士・山県大弐を

祀る山県神社の参拝、また「宮城」の遥拝を実施し、「御神徳」に関する講話が義務づけられた。「教育者に対し下し賜りたる勅語」が出たのも、この年の10月である。その前月には満州事変が起こっていた。

以後、昭和７年の「勅語奉読式」、９年の「国民道徳振作に関する勅語」、「山梨県生徒教護連盟」の発足、教師に対する「文部省委託思想問題講習会」、文部省内への思想局設置……と教育活動、思想にかかわる統制が進んで行った。

満州事変の頃から、校内の軍事教練が強化されて行った。査閲の結果は配属将校から毎年師団長に、さらには陸軍大臣に報告される性質のものだった。教練での生徒個々の具体的な成績は、先々軍隊入隊の際の成績、在営期間を決定する基準ともされた。そのため、査閲当日は甲府連隊の将校や県職員多数が来校して、教練を見守った。


営内宿泊風景

５年生になると、５日間、陸軍甲府歩兵第四十九連隊に宿泊して軍事訓練を受ける「営内宿泊」があった。生徒の感想文には、「満州国建設の基堅く、王道楽土の建設を見た」とは言え、「国際友誼一度破るるや、武威による解決あるのみ」という言葉も見られ、この「営内宿泊」の体験によって、「軍神精神を涵養し軍紀に慣熟せしめ強固なる団結を完成する」と表現している。

軍靴の響きが否応なく教育現場を呑み込もうとする、重苦しい空気を吹き払うような明るいニュースがあった。昭和10年、野球部が憧れの甲子園に出場することになったのである。当時は「全国中等学校野球大会」と言われ、本県初の出場だった。

ここに至る道のりは平坦ではなかった。山梨・長野・新潟の甲信越野球大会があったものの、山梨のレベルは低く、常に１回戦敗退という成績だった。山梨・神奈川・静岡の山神静大会となってからもその状況は変わらなかった。それもそのはず、９名が揃わない、揃っても練習を厭うという状況が続いていたのである。東京の大学の野球部で活躍している選手や先輩をコーチに招いてから、状況は少しずつ変わっていった。昭和６年には、県下で優勝。７年には県代表となる。が、この時も山神静大会では１回戦でコールド負けを喫していた。

10年７月の地元新聞には県大会の優勝を報じる「雌伏四年－甲中制覇す」の見出しが踊った。決勝の相手は甲府商業だった。その後、行われた甲子園の県予選でも、谷村工商（20対０）・甲府商業（15対３）・都留中（27対０）・韮崎中（４対３）と圧倒的な強さで各校を撃破していった。

８月、山神静大会に県内から４校が出場したが、甲府中学のほかは全て緒戦で敗退した。甲府中は小田原中・静岡商業（４対３）・神奈川工業（５対４）を打ち破って３県対抗大会の優勝を遂げた。

８月５日の「山梨日日新聞」は第３面の全てを甲府中学の甲子園出場の記事で埋めるという異例の取り扱いであった。見出しに曰く

強豪神工を抑え三県の制覇成る／球場に爆発した狂喜乱舞
中学校球界十九年の宿望達成

甲子園出場をかけた県予選が始まって19年目の快挙は、山梨県民を熱狂させた

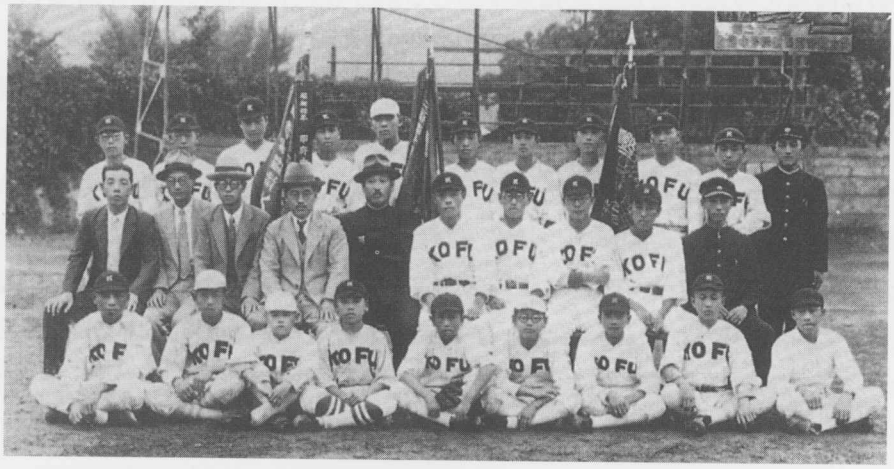
のである。

提灯行列の明けた翌９日、甲府中学にはゆかりの深い舞鶴城跡広場で行われた壮行会も、土屋県知事、新海甲府市長をはじめ、1,000人が集まるという、県を挙げての壮行行事と化した。

甲子園での初戦は青島中学。これも10対３で勝利を得た翌日の「山梨日日新聞」の記事は、こんなふうに歌い挙げている。

> ああ何たる輝かしき勝利の凱歌よ！　ああ初陣の甲中ナインの雄々しき武者振りよ！
> わが五味の怪腕に山神静の与望を担う甲斐の若獅子と、満州代表の雄戦に、早くも第一戦は熱戦を展開した。

２回戦は仙台の育英商業に11対０で敗退した。



甲子園出場を果した野球部

３．戦火の下の学園

時代は急速に戦争に傾斜して行った。それにともない校友会活動も戦時色を深めていく。

日本が国際連盟を脱退した昭和８年の校友会雑誌にも「皇道」「国恩」「使命」「覚悟」「東亜」などの文字が目立つ。音楽部の中に創設されていたラッパ鼓隊が、満州事変勃発１周年記念日の９月18日、中等学校の軍事大演習に参加、市内を行進し、合同音楽祭では「君が代行進曲」「独立守備隊の歌」「爆弾三勇士」などを演奏した。

蘆溝橋事件の起きた昭和12年の校友会雑誌の記事、校内弁論大会のテーマには「渡満兵」「日本人」「非常時」「祖国愛」「民族」など、時局に関心を寄せるものがさらに多くなっている。11月３日の明治節に実施されていた強行遠足について募集した「歌」にも、「星空高く月冴える／明治佳節の夜半／帝の偉業偲びつつ」とあった。

12年の12月には滑空部（グライダー部）が県下中等学校に先駆けて発足している。「甲中一号機」と名付けたグライダーで寒風吹きすさぶ中、部員は盛んに訓練

を行ったが、部の発足の目的としては、「皇軍大捷の要因ともなるべきものは空中戦」「現在の非常時局を打開すべき大半の責は空中防護」というものだった。滑空部はボート部と共に、昭和30年代まで存続した。

戦局は日独伊防共協定の締結、南京占領、国家総動員法（昭和13年４月）など、次第に深刻化して行った。

14年５月、皇居前広場で全国３万２千人余りの学徒を天皇が親閲した。席上、「青少年学徒に賜りたる勅語」が発せられた。甲府中学からは大野芳麿校長以下８名の生徒を加えた11名が参加していた。

「山梨教育」に乗せられた「事変下銃後に於ける本校活動状況の概略」によると、昭和14年当時の学校生活はこんなだった。

物資の節約は先ず服装から始まり、教練のある日以外は靴を禁じ、下駄で通学させた。制服の新調もできるだけやめさせ、繕って着させたから、教室の中も不揃いになってきた。これまで鉛筆や消しゴムが校内に落ちていないことはなかったが、今や「一寸」ほどの鉛筆でも丁寧に使うようになった。

毎週月曜日にはゲートルを巻いて登校、朝礼、宮城（皇居）遥拝、校長訓示の後、分列行進を行った。また、日常的な集団勤労報国作業として陸軍墓地の清掃、神社境内の除草、陸軍飛行学校分校の飛行場建設の勤労奉仕をしている。

毎月１日の興亜奉公日には、「報恩感謝大和協力節約貯蓄」の項目の実行に努め、金１銭ずつを献金させ、この日と「青少年学徒」の勅語の発せられた毎月の22日、生徒・職員は一斉に「日の丸弁当」を食し、戦地での困苦を偲んだ。さらにこの日には、勅語および親閲を記念して全校生徒の分列行進を行った。夏冬の休業中も「体操、教練、武道、水泳、集団勤労、学業」とあり、「学業」が末尾になっている点が注目される。

休業は休みではなく、心身の鍛練と勤労奉仕の連続だった。とはいえ、昭和16年当時までは、３年生以上の上級学校への進学希望者のための「課外」講座は実施されており、勤労奉仕の中心は２年生以下の生徒だった。

この頃在籍したＯＢには、学校のチャイム「日新鐘」ではなく、49連隊から響いてくるラッパの音が、学校の時制となっていたと回想する者もいる。

「信条」

一、皇国精神を深む

二、誠心誠意を以て事に当る

三、質実剛健の気風を養う

昭和15年、大野校長は３か条からなる「信条」碑を建立した。

これは、現在、百周年記念館の北に残されている碑だが、碑文は「文而真」と変わっている。昭和22年、民主教育の流れの中で、先の碑文が削られ、現在のものと変わったのである。碑陰の年号だけが、元の姿を忍ばせるよすがとなっている。

新しい文字も大野の手である。二代後の近藤兵庫校長が大野の意を酌んで処置したものと考えられる。

昭和16年、校友会は「報国団」に改組された。「目的」は「皇国の道に則り学校一致師弟同行心身一体の修練を行い校風の作興を図り報国の実を挙ぐる」とあっ

た。「部」とそれに属する「班」の一部を紹介すると、次の通りである。

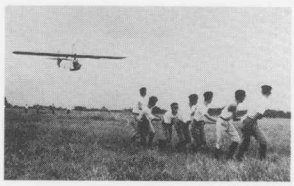
総務部
鍛練部（武道班・陸上班・水上班・庭球班・野球班・球技班・剛健班）
国防部（防護班・滑空班・射撃班・銃後班）
教養部（講演班・芸能班・興亜班・科学班・図書班）
生活部

校内の体育、文化的活動のすべてが戦争遂行のために目的化されて行ったのである。ちなみに図書室に設けられた「生徒文庫」に並べられた書名は「皇国青少年の道」「たましいきたえる少国民の戦陣訓」「少年満州読本」「空の少年兵」「国の護り」などであった。

この年の12月８日、太平洋戦争が始まった。２か月後には国民勤労報国令が下され、学徒動員が命じられるとともに、勤労動員が一段と強化され、教練も心身鍛練から戦技訓練、特攻訓練、防空訓練まで課されるようになっていった。学園に生徒の姿を見ない日が次第に増えて行った。

17年の暮、東部第六十三部隊射撃場で行われた実包射撃査閲が行われ、５年生17名が参加、命中成績第２位を得たという。県下中学校国防競技大会は綱引きなどのほか、手榴弾投擲（とうてき）などの種目があった。

18年に入って、「中等学校令」が公布された。就業年限は１年短縮されて４か年となった。また、教科書は検定制を廃止、すべて国定教科書を使うこととなった。年間の授業日数のうち30日を目安として「修練」に充てることとした。県内でも「県立中学校学則」を制定、趣旨の徹底を図った。さらに「学徒戦時動員体制確立要綱」「教育に関する戦時非常措置方策」「緊急学徒勤労動員方策要綱」「決戦非常時措置要綱に基づく学徒動員実施要綱」が次々に閣議で決定されていった。


グライダー練習（昭和19年）

11月、最終学年に在籍していた三枝直は学校にいる者全員の壮行のなか、海軍飛行学校予科練習生（通称「予科練」）に進んで行った。三枝は三重海軍航空隊に入隊、19年卒業、血書した特別攻撃隊志願書を提出、20年１月、人間魚雷回天に乗ってグアム島のアメリカ太平洋艦隊に突進して、自爆して果てた。三枝の悲壮極まりない行動は生徒に大きな衝撃を与え、感想文の中にも「三枝兄に恥ずかしい」などのことばが散見する。

19年になると、中学生の通年動員が実施されることとなった。さらには、「学徒総動員本部」が文部省に設けられ、「学校工場化実施要綱」、深夜作業強化の決定、学徒動員令、勤労動員継続のために卒業延期決定などの方策が次々に打ち出されて行った。

ついに昭和20年４月から１か年、授業が停止されることとなった。甲府中学校でも３，４，５年生は相模原の陸軍造兵廠、横須賀六浦の海軍航空技術廠、大船の第一海軍燃料廠に通年動員されることとなった。下級生は農作業の援助などの勤労奉仕に駆り出された。生徒のざわめきのめっきり減った校舎の一部は、陸軍

大学校の疎開先として徴発されることとなった。

勤労動員では日夜にわたる烈しい労働、食料事情の悪化、栄養失調などで消化器系の疾病や脚気を多く引き起こした。また、下着の洗濯もままならぬなかでシラミがはびこり、発疹チブスのおそれまであった。

５年生200名、４年生220名、３年生300名の計720名余を勤労動員に送り出している学校では、動員先に送る食料及びその輸送に苦慮した。有力者の保護者が総力を挙げて協力、副食物や間食に至るまで、終戦のその日までどうにか送り届けることができたという。

昭和20年２月、勤労動員先から約300名の上級学校進学のための願書、受験料を学校に持ち帰ろうとしていた職員が、東京新宿駅で空襲警報に遭った。自分は死んでも願書が学校に届くよう、地べたに伏せ、腹の下に願書類の入ったカバンを入れたという。無論、軍需工場である勤労動員先でアメリカ軍の機銃掃射を受ける危険には日々さらされていた。

３月には、第57回卒業生は動員先の海軍航空技術廠で卒業式を挙行した。次に掲げるのは、その際の答辞である。この答辞は読み上げられなかったが、悲壮なまでに追い詰められた生徒の心理がよく現れているので引用する。

古来陽気の発するところ金石も亦透るといはれしこの気あふるる今日　ここ第一海軍技術廠大会議室において　廠係官御臨席の上　吾等295名の為に卒業式を挙行せらる　母校講堂のそれを憶へば正に感概無量　戦局の緊迫切実に身に感ず

顧みるに吾等幸に甲府中学に入学を許されて誇らかに白線二条の制帽を載いてより明るき窓に或ひは友と語り或ひは机に向うて勉学を行ひ又外に出でては歩を信濃路に運び　田畠の耕作に奉仕せり

この間校長先生はじめ諸先生の御慈愛御教導思へばなつかしく浮び来る　然れどもこの四年に皇国は未曽有の大試練に遭遇したり　即ち大東亜戦争の詔書を拝しその後につづける勝利の光輝を身に浴びて居りし頃に　すでに敵の反撃態勢漸く現れ来つて邦家の前途多難を思はるるに到れり　吾等も亦学業に専念するを許されず　遂に昨年７月本廠に勤労動員せられたり　かくて茲に９ヶ月その間懸命に兵器の実験　研究　増産に従事し来る　然れども弱きは吾等　時に志たわみて怠り勝となり　又病に臥して思ふにまかせず　作業に能率に支障を来して廠にも又校長先生はじめ諸先生に御迷惑をおかけし御心を悩まし申せる事幾度ぞ而も寮に於ける付添諸先生の御慈愛御配慮　吾等唯感謝の誠を捧ぐるのみ　或ひは病の床に臥す者を看る慈愛　或ひは過誤をさとす温情　故郷遠き吾等の心をゆさぶりたり

鬼畜米軍今や我が神州の玄関に入り来りて土足もて乱入の気配あり　皇土の聖地醜翼に汚されつつあり　この憤怒いづくに於いてか晴らさむとする　唯吾等の努力足らざるを恥づ

今この式場は吾等の生活の一節をつくるもの昨７月行を同じうせし級友既に陸海軍諸校諸隊に入校入隊せるものあり　或ひは病を得てこの席にのぞむ得ざるものありてたのしみをともにせざるを淋しむ　唯この一節に当りて吾等のう

ち　上級学校に志を得たると否とを問はず明日否次の一刻より作業に遭進し校長先生はじめ諸先生の御許に名実ともに生徒として協心戮力　精進して国家に報い奉らむ

皇国危急の関頭に在り　国民皆働の秋到りて学校は授業の停止となる　吾等に２年の兄なる三枝 直 兄は特攻隊員として敵艦に体当りして昇神せりとかきく吾等も亦次の機到るまでこの意気もて作業に全力をつくさむと誓ふ　校長先生はじめ諸先生　庶幾くはいよいよ御指導御愛顧をたまはらむ事を

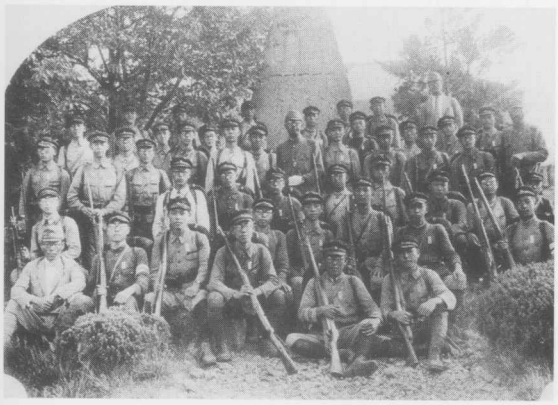
以上蕪辞をつらねて答辞とす

昭和20年３月28日

第57回卒業生総代

下級生の一部は、登美分校で陸軍大学校の農場開墾作業に協力し、次いで、学校の農園として１町歩を開墾してサツマイモ畑にした。校庭の３分の２は食料自給のための畑となり、大泉寺山の雑木をストーブの燃料に切り出したほか、農家の主婦の指導で慰問のための藁草履（わらぞうり）を編んだりもした。

すでに学園としての実質は失われていたが、さらに追い打ちをかけるような事態が起きた。７月６日から７日未明にかけて行われた甲府に対するいわゆる「七夕空襲」である。鉄筋コンクリート本館（旧校舎）以外の校舎のほとんどは、この空襲で焼け落ちた。生徒の学籍簿、成績表は焼けずにすんだ。御真影は校長が抱いて湯村山方面へ避難したという。



営内宿泊（昭和17年）



学校西の相川で玉石を拾う生徒（昭和19年頃）

第５章　戦後期

１．敗戦後の混乱と復興のきざし

昭和20年８月15日、この日、「玉音放送」があるために、県内の各工場や分校に勤労動員されていた１～３年生のうち200名が登校、本館玄関前に集合した。工場・駅・市の土木課関係の作業場へ動員されている生徒たち、前の空襲で戦災を受けた校舎・校庭の焼け跡整理、防空壕の修復に明け暮れていた生徒たちだ。最上級の４年生は大船の海軍燃料廠に出動中だった。

放送は雑音も多く、よく聞き取れなかった。本校に疎開してきていた陸軍大学校生が軍刀を握りしめ、また、抱き合って号泣しているのを目の当たりにして、職員・生徒は敗戦を実感した。

この日の「教務日誌」には、

本日正午聖上陛下親シク御放送遊バサレ、ポツダム宣言ヲ受諾遂ニ大東亜戦争茲ニ終了ス

とある。

２日後の「教務日誌」には、

大船部隊二十三日中ニ引キ上ゲノ由

とあり、早い者は終戦当日の15日に、遅い者でも20日くらいまでには、皆郷里に帰ってきた。８月25日には、大船学徒解隊式を行った。

それでも地元での勤労奉仕はまだ続いた。関東配電や県戦時援護課などへの手伝いのほか、校庭の整理、登美の農場の手入れ、開墾、金属回収、羽黒・湯村からの薪の回収等々だ。雨天の時には時間を限って授業を実施する状態だった。

９月に入り、始業式の後から、生徒を午前と午後の２パートに分けた授業が再開された。月末には７か所にあった分校が閉鎖されたから、焼け残りの校舎では生徒を収容しきれなかった。10月になって、陸海軍の諸学校からの復員者の口頭試問と身体検査が行われ、翌月、彼らの入学式を行ったから、「混雑限りもない」状態が続いた。

校内では急速に戦時色を払拭して行った。ゲートル・挙手の礼・団体遥拝・朝礼の廃止などである。

こうしたなか、校内の教育環境の悪さに学園民主化、教頭の更迭問題も加わって、生徒たちの授業ボイコットが起き、さらに同盟休校に及ぶほど深刻化した。調停をしようとした同窓会の有力メンバーの中にも、混乱をいっそう煽りたて、校長の退陣を要求する者もいた。教頭は辞職し、校長が異動することで事態はよ

「甲中だより」29号は、当時の様子をこう記す。

「十月上旬、本校の整備ようやくととのい、各地の分校を閉鎖して懐かしい母校へ、二カ月ぶりに登校が許された。併し、あまりにも変わりはてた母校の姿であった。日新鐘は始業の合図を知らせてくれる。舞鶴城の太鼓橋の欄干のギボシは、前庭の花壇東に宝永の昔を物語っている。だが、特別教室の焼失は化学実験に試験管をさえ振ることができなくなってしまった。生物を解剖すべき一枚の解剖皿も残されては居ない。それどころか全校生徒を容れるだけの教室がないではないか。それ故、隔日授業によって、やや学校らしい形態を保って、昭和二十年は暮れた。」

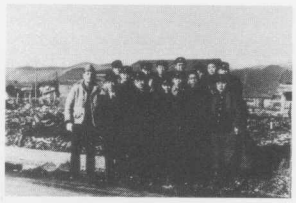
うやく収拾に向かった。「甲中だより」の一節である。

空前絶後とも言うべき不自由な隔日授業を行っていて、しみじみ感ずることは、「戦前の甲中に戻せ」ということであった。斯くして、21年度の新学期を迎えると共に永井校長は退陣し、東京高校より近藤校長を頂いて、学内にようやく清新の気風が醸成された。

旧六三部隊内の兵舎へ、医専、工専、師範、高女等が移転と決定した時、甲中でも四教室を旧兵舎内に求めて狭隘を告げる教室の打開をなさんとして居た時、県当局の好意に満ちた御取り計らいにより、某軍需工場の建物を譲り受けて本校内に４教室を建築する段取りとなり、着々と工事は進められた。

だが現状はその４教室の竣工を待っては居られない状態であった。そこで講堂を４つに区切り、４教室を作って２年生の一部に当て、武道場をまた４区分して新１年生の教室としたのであった。斯くして一応は全校2,000の生徒の這入るべき教室が整えられたとは言うものの、５年生が１組に60名、４年生も70名近く目白押ししていると言う有り様である。それはまだ我慢するとしても、物理・化学・生物の実験室を持たない授業が、どうして満足出来得よう。それはあたかも畳の上の水練にも等しい授業でしかあり得ない。

斯ういう状況にもかかわらず、世間の同情は、吾々よりも寧ろ全焼した学校に集注され、このまま放置せんか、甲中の復興はいつのことやら予測もつかない有り様であった。



焼け跡に集う生徒達
（昭和20年　甲府駅前）

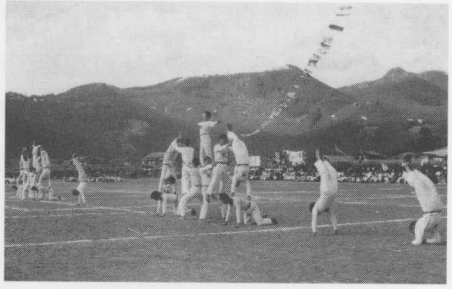
生徒の意欲とは裏腹に厳しい学校の現状がよくうかがえる。10月23日の創立65周年は、こんな混乱の中で挙行された。

校舎の復興が職員会議の議題となったのは、翌21年の５月末のことである。

復興委員会を設置し、同窓会・保護者・学校当局の三者が一致協力してあたることとなった。準備委員会・常任理事会を経て、10教室分の校舎とその設備に充てるための150万円の募金目標も決まった。娯楽に飢えている時期だった。手段として１週間の間映画会を催し、２万円を稼ぎだしたこともあった。生徒自治会も、たとえわずかでも「浄財」を集めて復興に寄与したいという思いから音楽会を開催して１万円を得た。職員は１円、生徒は50銭を拠出することも決まった。

2．新教育と生徒自治会の発足

教育を再生しようとする動きは早かった。昭和20年９月、文部省が発した「新日本建設ノ教育方針」、翌月の「日本教育制度ニ対スル管理政策」（ＧＨＱ）、さらには、昭和21年３月、アメリカ教育使節団からＧＨＱに「第一次米国教育使節団報告書」が提出され。５月の「（教師のための手引書）新教育指針」（文部省）と続いた。



戦後間も無いころの運動会

21年の入学試験は4月になって実施された。国語・数学・物象について3日がかりの口頭試問によった。他に校長による試問、運動・身体検査が行われた。621名の志願者のうち、合格したのは318名で、入学式は4月21日に挙行された。入学試験・入学式とも、旧制中学校最後の実施だった。翌22年の入学試験は、学制改革に伴い実施されなかった。

校内の気風の復興も進められた。昭和22年、近藤兵庫校長によって、民主的な選挙による生徒委員会を構成し、「校憲」を制定することが発議された。生徒委員会の委員は従来の級長に代わるものだった。職員会議の討議の末、生徒自治会を結成することとなり、その下に学年・学級の生徒理事会を設けることにした。理事・副理事の制度の始まりである。職員自治会も結成され、生徒の自治会の代表と共に協議委員会を設けることにした。

ふたたび「甲中だより」の記事である。

民主主義日本の建設は我々の双肩にゆだねられている。学校生活にも自由と人格の尊重がなされるべきであるが、放縦と自由との踏み違えが洵（まこと）に危険の瀬戸際にあると考えられる。ここに生徒自治会を制定して、生徒自身が風紀・財務などに関与すると共に自治の精神に基づいて明朗快活なる校風樹立に出発することとなった。

自治会の結成は、単に戦後の滔々たる民主化の流れの影響ばかりではなかった。敗戦後の国内に漂っていた「道義の頽廃」、裏切られた憤懣からくる「自暴自棄」的な風潮は、学園・生徒も無縁ではなかった。喫煙者の横行、すきさえあれば学校・教師の揚げ足取りをする、清掃の不徹底、登校時の態度の悪さ、市中での不品行など、目にあまる状況が校内に蔓延していた。

21年に本校を視察したアメリカ教育使節団の中尉から、生徒の廊下の通行があまりにも「騒々しい」から来週までに何とかしておくように、授業時間中に生徒が「教室内を出入りして騒々しくしていけない」などの指摘があった。履物や服装の不揃いはともかくとして、生徒に傍若無人な振る舞い、マナーの悪さが目立っていたようである。

11月の新「日本国憲法」発布を受けて、翌昭和22年3月、「教育基本法」が公布された。これは（1）教育の目的、（2）教育の方針、（3）教育の機会均等、（4）義務教育、（5）男女共学、（6）学校教育、（7）社会教育、（8）政治教育、（9）宗教教育、（10）教育行政、（11）補則の11か条から成っていた。次いで「学校教育法」が公布された。これによって旧制中学校を廃し、新制高等学校が発足することになった。本校でも新年度から新しい教育制度、教育課程によって学校運営がなされることとなった。

22年の夏には、「山梨県立甲府中学校生徒自治法」が制定される。昭和24年に

は、この「自治法」が「学校側で制定されたもので、純粋の自治の意味を逸脱していたものであった」との理由から、「生徒自治会法改正案」が制定されることになる。

校内でも１学期の末、新学制による教育をどうするかについて、討議・研究が盛んに行われた。生徒の進路希望によって文・理などのコースに分けること、教科科目を必修科目と選択科目とに分けること、習熟別の授業形態などの工夫が検討された。

このような現在に通じる制度の検討もある一方、この時点では新制高校についての国の考え方がまだ完備していなかったため、様々なアイディアが検討された。

近藤校長自ら構想したのは「高等科」の新設であった。また、新制高校のなかに中学校を設置する、さながら「中高一貫教育」のはしりのような提案をする職員・同窓生もいた。

新制高校への不信感を持つ同窓会有志は、私立「鶴城中学」を22年５月を目途に創立しようとする準備会を開いた。教育の機会均等を危うくし、「一部特権階級の独占物」とするなどの反対論もあったが、「鶴城学園」は昭和27年まで存続した。学園の閉鎖は、折から提唱され始めた公立高校への全員入学運動のあおりでもあった。

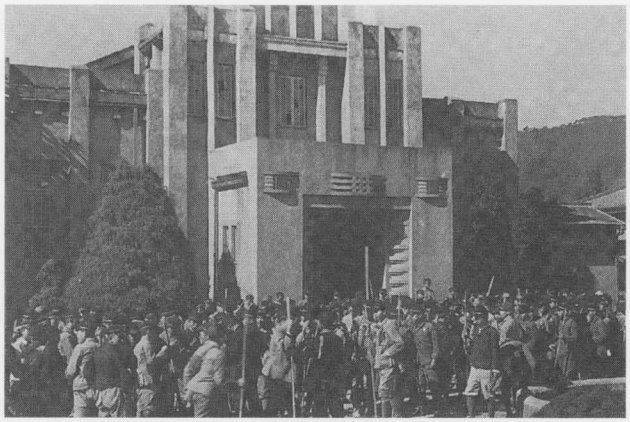
3．強行遠足の復活

強行遠足第70回記念誌『歩け、心の限り』の記録では、敗色濃い昭和19年まで続けられた伝統の強行遠足だが、昭和20年は「終戦につき中止」となっている。この「中止」には、次のような事情があった。

昭和20年の「教務日誌」によると10月４日の職員朝会（朝礼のようなものか）の話題の一つに「強行遠足実施ノ予定」とある。物資の不足、交通の悪条件、精神の動揺など悪条件が重なるうえ、校内でも連日のように薪運搬、草刈り、補肥・整地などの作業に追われている有り様である。にもかかわらず、「実施ノ予定」とあるのは、職員・生徒の強い希望によるものだった。「予定」とあるのは、そのような周囲の状況というより、この日から降り始めた雨のせいだった。

５日後には翌10日に実施することになっていた強歩練習会の注意を生徒に与えている。が、雨は依然として止まなかったために、「天候定マルマデ延期」「意見アラバ申出ルコト」と生徒には伝えられた。12日になってようやく晴天となり、16日を期して強行遠足練習会を実施した。学校－韮崎－六科－小笠原－貢川－学校の約20キロメートルのコースだった。

が、11月４日に行われるはずの本番の強行遠足は実施されなかった。この経緯についての詳しい記録は残っていない。前に述べたような、授業ボイコットなど、校内の紛争があったためとも、11月５日から農繁休業に入ったせいともとれる。



昭和21年10月の強行遠足

戦後初の強行遠足が実施されたのは、翌21年のことだった。これもすんなり実施されたのではなかった。

9月下旬、学校が甲府駅管理部に実施の許可を申請したところ、10月に入っても回答がなかった。確認をしたところ、「実施案」を提出せよとのことで、実施計画に一昨年の各駅の乗車人数を参考資料に添えて提出した。が、中旬になって、列車の混雑を理由に不許可となった。

やむを得ず、甲府－韮崎－小笠原－青柳－南湖－石和－等々力－塩山－日下部－山崎－甲府のコースで、盆地をぐるりと巡ることとした。余力がある者は、二度目の周回に入ってもよいとの計画である。

不満を抱く生徒が直接甲府駅管理部に交渉したところ、上野原を終点にするなら列車利用を許可するとの回答だった。そこで、急遽学校では職員会議を開き、盆地を1度周回した後、上野原方面に向かうとの変更案を生徒に提示した。が、従来通り松本へ向けて実施したい、盆地周回など意味がないとする生徒の不満は収まらず、今年も中止かと思われた。

その矢先、日川中学が松本方面に向けて強行遠足を実施するとのニュースが届いた。収まらない生徒が甲府駅に赴いて説明を求めたところ、駅側では「管理部の意志を無視して行おうとしているのだから、全線に指令して一人たりとも日中生は乗車させない」との返事だった。が、実際は日川中学の強行遠足は実施され、帰途の列車利用についても不都合はなかった。

6日後、本校の強行遠足は実施された。まさに「強行」で、当然のことながら松本方面コースである。「教務日誌」などを見ると、短時日での態勢の建て直し、実施はまことにあわただしかったようである。とは言え、台ケ原－上諏訪－辰野－小野－松本の道路調査は、職員が分担して行い、駅、救護所を含む各方面に次のような依頼状を送っている。

拝啓

秋冷の砌（みぎり）愈々御清祥の段賀上候　陳者20余年の伝統ある本校強行遠足も一昨年来中止の処本年より復活来る10月29日左記要領により御管内通過実施可致候間御多繁中洵に恐入候え共何卒可然御便宜賜り度右御報知旁々御悃願迄如斯に御座候

敬　具

昭和21年10月25日
山梨県立甲府中学校長　　近藤兵庫

（以下略）

実施しはしたものの、実際のところ、練習不足、食糧事情の逼迫、出発時間の変更、夜の信州路の冷雨などにはひどく苦しめられたようだ。が、「甲中だより」には、「結束し一致団結した気概の現れとか「悪条件を克服して、斯くの如き結果を収め得たのは、伝統を死守したのであり、『王座揺るがず』と賞賛したい」などの言葉が踊り、伝統と共に日川中学を強く意識している様子がうかがえる。この大会が、旧制甲府中学最後の強行遠足ともなった。

翌年、新制高校となって初めての強行遠足が実施された。「山梨日日新聞」では、一高をはじめとして「実施しない高校は一つもない」県内の状況に触れ、「生徒の自発的な意欲によるものではなく学校の半命令的な行事として行われる」、「決して愉快なものではなく苦痛そのもので」「戦争中の最も苦痛な思い出」のために「競争を是認するのであるか」、また、「質実剛健という言葉は、何か半ヤバン的非文化的な響きを与え」、「やがて極端な国家主義的軍国主義的な思想の温床」になったと批判しながらも、「新しい日本を背負って立つ若き学徒は肉体的にも精神的にも健全でなくてはならない。学問と共に常に体力を養うことを忘れてはならない」と、まことに歯切れの悪いものだった。

これに対し、本校職員が投書して、強行遠足は「自治会にはかり」民主的に実施と決定したものであり、「なまくらな身体となり、苦痛を避けて易きに就こうとする傾向が濃厚となりつつあるのを認めざるを得ない時、生徒自らの脚力を精根を傾注して験してみることが必要だ」と反論した。

復活以降、生徒の中にも自発的な「不参加者」が出ていたようだ。昭和20年代には長髪問題、生徒手帳問題などと並んで、強行遠足反対のビラがまかれるなどの動きもあった。


上諏訪付近（昭和23年）

4　改革はさらに進む

校内の改革と共学

新制高校の発足に連動して、校内での改革はいちだんと進展した。

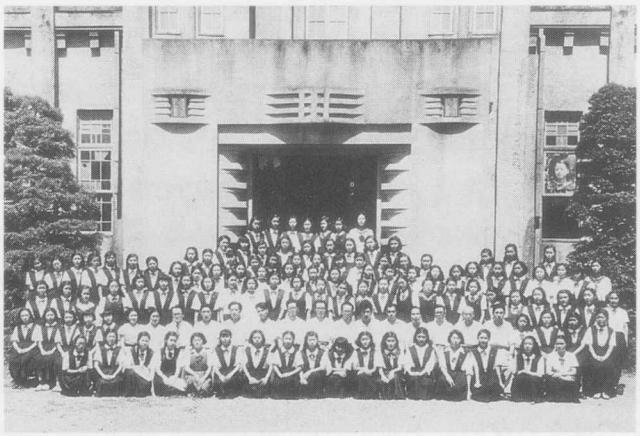
その一つに「授業５日制」がある。昭和22年５月から28年度まで、平常授業は週５日実施された。この発想は22年の「学習指導要領（試案）」が元になっていた。土曜・日曜は生徒登校しない日として、それぞれの趣味や指向に応じて自主的に「研究」を進めようとするものだった。

実際は「土曜講座」として、生徒が希望で選択した講座に参加するかたちをとった。英語・数学・国語などの教科にかかわる講座のほかに、性教育、計算尺、詩歌、フランス語、図書館、郷土研究、演劇、宗教研究、バイブルクラス、園芸、映画、新聞学などの一般教養的なものも設けられていた。これと平行して、野球、サッカー、テニス、バスケットボールなどのスポーツを選ぶ者もいた。外部講師

も招いた講座もあり、俳人で本校に在籍したことのある飯田蛇笏や英和学院の教師であったグリーン・バンクなどの講師の名前も見える。

が、生徒の目的意識、教材教具の問題、教科の授業進度との絡みなどで、当初の目標が実現されないようになっていった。県内有識者、保護者、果ては生徒の中から疑問の声があがり、28年度をもって「土曜講座」は廃止になった。

本校の歴史上初の男女共学が始まったのは、昭和25年の４月からだった。全校33学級・定員1,650人のうち女子は110人と７パーセント弱だった。クラス編成に苦労し、トイレ問題などに悩まされた共学開始だった。



夏服姿の女子生徒

新校歌の制定

校内では校歌をどうするかについての議論もされた。近藤兵庫校長の「あまりにも国家主義に偏りすぎている」との意見で、新校歌制定の運びとなった。俳人飯田蛇笏を選者に、校内外から歌詞を募集した結果、卒業生で旧制中学時代から本校の教諭を勤め、御崎神社の神官でもあった上條馨の作が当選をした。作曲は合唱曲の名手小松清が担当した。

新校歌発表会の席上、上條は作詞にいたる思い、意図を次のように語った。

去る７月20日に、始めて新校歌募集の要項が発表されました時、本校の卒業生として、また母校に奉職する私としまして、この光輝ある本校にふさわしい立派な校歌を作りたいと真剣に考えました。

入選する、しないは別として、私もこの母校に恩をうけている一人として、自分の力が少しでも母校のためになるならと思い、この夏休みの大半を校歌作制にうちこもうと心にきめたわけであります。それには、自分の心を清く気高く、また雄々しく保たなければ、とうてい立派なものができようにない。奇麗な調子のよい詞を並べても、一応歌にはなりますが、それではどうしても歌の生命はでてまいりません。

精神のぬけた歌しかできません。

幸い、この夏には生徒と一緒に、まず７月25日から３日間、南アルプスの鳳凰山へ登りました。８月３日から７日までは、北アルプスの縦走をおこなうこ

ととなり、４日に燕岳をきわめ、えんえんたる北アルプスの全容を大観することができました。無言のままにつき立っている槍が岳、どっしりと地軸に根をおろしているような常念岳、これらを一望のうちにおさめ、山の雄大さ、すばらしさに打たれたのであります。また私は数年前、富士山の頂上で20日間を過ごしたことがあります。まっ赤な太陽がすでに黒くかげって来た剣が峰の向こうに静々と沈む偉容にいくたび心をうたれたことでありましょう。こうして山の霊気にふれ、またそれを思いおこすことによって、私の精神を清浄に、雄々しいものに保ちつつ、歌にとりかかったのでありますが、なかなか詞がまとまらずにいたところ、８月も末の27日の夜、一度床について間もなく、次々に詞が浮かんでまいりまして、やっと全体の構想ができあがりました。そこでおきあがって一番、二番、三番と次々に書きとめたわけでありますが、勿論ここにありますような整ったものではありません。かなり荒削りのものでありました。それを毎日毎日何遍も読みなおし書き直し、やっと最後にここにありますようにおちついたのであります。

（歌詞省略）

簡単に歌の意味を申しますと、この甲斐の国の中心に位している我が校は、その創立の昔から剛健の気風をうけつたえて来た。今この新しい世に際会しては、この世を照し正す鑑ともなるよう大いに奮励努力しよう。この栄ある学舎において、日に新た又日に新たというのは、学徳を日々に新たに進め、という意味でありまて、本校の号鐘の日新鐘とおなじ由来によるものであります。出典は大学であります。「湯ノ盤ノ銘ニ日ク、苟ニ（ママ）日ニ新タ、日ニ日ニ新タ、又日ニ新タナルト」とあります。そうした高い理想と希望とをもってというのが「いや高きのぞみをもちて」でありますが、この一句によって、諸君は本校の第六代校長の大島正健先生が、札幌農学校において、クラーク博士からうけつたえたあの「青年よ大志を抱け」の言葉を思いおこすでありましょう。この一句にはそういう意味がふくまれているのであります。かくして学術の真理を究め、大いに励んで行こう。我ら若人達よ。

おごそかに聳え立っている富士山や、清い甲斐の山や川の精をうけて、もろともに切磋琢磨し、天地自然のめぐみ、人間の本性を賛けのばして行こう。この賛天地之化育の文句は本校玄関にある銘文でありまして、中庸の中にあります。この度の校歌制定にあたりましては、その選と批評とを快諾されました飯田蛇笏先生と、作曲をしてくださいまして、本日の発表会に御来校くださいました小松清先生に心から感謝申し上げる次第であります。（以下略）

上條が心身を充実させて校歌作詞に当たった気持ちは、本校にかかわるすべての者たちの願いと同一だった。

「Ｐ・Ｔ・Ａ」の発足

従来の保護者会が「Ｐ・Ｔ・Ａ」に衣替えされたのは昭和22年の４月の会則決定からである。最初は「ＰＴＡ」の表記には「・」がきちんと振られている。第

１回の総会は盛り沢山の内容だった。

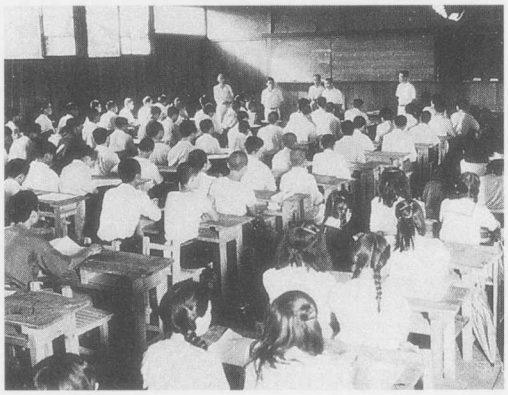
校長、ＰＴＡ会長のあいさつの後、職員によって、ストライキ突入が噂されていた教員組合についての説明があった。その後、会員の「意見発表」が行われた。実用英語を学ばせるために駐留米軍軍政部から外人教師を招くべきだとの意見その他が協議されて、議事を終えた。

続いて、２年生２人が「20年後の甲府一高」「日本再建の鍵」と題する弁論を行った。さらには、演劇部による「息子」（小山内薫原作）の上演、音楽部の合唱と合奏があった。この間、ＰＴＡの資金捻出のためのバザーも行われた。午後からは各学級の懇談会がもたれて、一日の日程を終えた。

ＰＴＡが発足して後数年の間に、体育館の建設、修学旅行の２学年実施、冬季講座の実施、月例考査、１年生の長髪禁止などがＰＴＡによって提起され、実施に移されて行った。期待され、勇躍出発したＰＴＡだったが、数年のうちに、会議などの参加者の減少、固定化という悩みも始まったようだ。

戦後初の修学旅行はＰＴＡ総会の決定によって、昭和25年11月に行われた。初めて２学年で実施することになった。４泊５日で、方面は戦前と同じく奈良・京都、概算1,800円の経費だった。翌26年は、関西と伊豆大島の２方面に分かれ、季節も５月下旬の実施だった。まだまだ、衣食住が不十分な時代であり、家計の逼迫した生徒に配慮したものだった。戦後の団体訓練を忌避する風潮のなかで、統制のとれた団体行動に課題が残った、と記録にはある。

5．働きながら学ぶ―定時制・通信制の教育



開校された
定時制・通信制

戦後の教育の機会均等、民主化の流れの中から、勤労青少年のために定時制課程および通信制課程の設置が求められた。

両課程とも、当初、昭和23年度から発足する予定で、県は定時制課程を甲府中学校をはじめとする13校に、各定員300名の男女共学の課程を開設する予定だった。また、高校段階の通信制課程は本校１校に設置されることとなった。が、通信制は年度当初からスタートしたものの、定時制は国の法整備や予算措置が遅れたため、同年夏からの発足となった。

通信制は男子160名女子76名の計183名で始まった。その後も６月、10月と補欠入学を認めている。入学してきた者の職種を見ると農業が５割近くで、４か月後に入学してくる定時制課程との違いが目立っている。

５月下旬、新聞紙上に県が「定時制課程入学希望者予備調査要項」を発表したところ、１週間後には2,072名の希望者があった。が、募集を開始し、７月の締め切り日までに志願者数が定員を上回ったのは本校だけだった。鉄道・県庁・市役所・貯金局・民間会社・家庭人などだった。

７月21日、新制中学校卒業程度の国語・数学・理科・社会の４教科について試験を行い、定時制課程の入学者を決定、８月22日に入学式を挙行した。男子部・女子部に分かれ、女子部は本校の分校だった甲府女子高校（後の第一商業高校）に振り分けられたため、１回生は男子のみだった。

スタートはしたものの、イメージのはっきりしない定時制課程の歩みは平坦なものではなかった。旧制中学校や高等女学校・実業学校の中途退学者あるいは青年学校卒業者など、学歴の様々に異なる生徒の学年所属や必要単位をどうするかの問題があった。教員組織や教育課程の問題。戦後の電力事情の悪さから、夜間の停電などの基本的な問題もあった。停電については、知事および関東配電に病院並みにして欲しいとの陳情をしたが、授業に行く職員にマッチとローソクは欠かせなかったという。入学してきた生徒の実態の多様さも想像以上だった。27歳の者、妻子のある者、軍隊生活５年という者、喫煙の習慣のある者、時間を守らない者、嫌いな科目はさぼる者など、生徒にあるまじき風潮もあった。

入学して１週間もたたないうち、生徒自身が発起人となって自治会と風紀委員会が組織された。全国の定時制高校でも最も早い結成だった。自治会では総務・文科・体育・経理・渉外などを分担することになり、風紀委員会では次のような規律を作り出すことを目標とした。

生徒の風紀殊に校内の喫煙の禁止、ダンスホールの立入禁止、服装の統一、校章バッチの統一等の一大刷新

教頭と定時制主事を兼ねた伊藤忠一ほかの職員は、県内各高校の校長・主事を集めて、月例の研究会を重ねていった。

24年になると、本校の生徒会が中心となって、全県下の定時制生徒会を結びつける学徒協議会が発足し、体育と文化の両面での活動をすることになった。

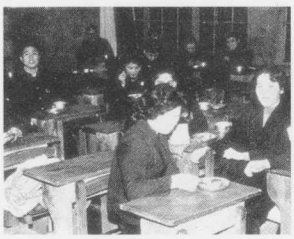
25年になると文部省が全国を４ブロックに分けて、定時制通信制課程の研究協議会を実施するようになった。

26年からは養護教諭を順次配置することになり、脱脂粉乳による夜間給食を実施した。給食はパンも配給することになったが、ミルクの配給が滞り味噌汁になったこともあった。

定時制の教育課程は、当初、国語・一般社会・体育の必修科目のほかに国語・社会・数学・理科・芸能・外国語・簿記・ＨＲの選択科目を併せて、各学年24単

位を履修することになった。昭和32年になって、芸術・商業を含め、41年には家庭を含めた。学習指導要領の変遷に伴い、科目名は変わったが、単位数は一貫して24単位だった。

味噌汁給食、ときには職員の伊藤忠一が家族に作らせていた給食は、32年度の国庫補助による完全実施まで続けられた。家庭科調理室を使っていたのが、独立した給食室を新築し、１食25円の個人負担だったが、栄養のある温かい食事が３校時と４校時の間にとられた。生徒会誌「星影」には、こういう１文を見ることができる。


定時制の給食風景

待望の給食も実施され、毎月行う体重測定の統計をみても目立って平均が上昇してきたのは、やはり給食のおかげであり、私たちの悩みの種である胃腸障害の声も少なくなったのは喜ばしいことである。

職員が継続してきた定時制教育研究会も「定時制課程運営の手引き」などを編集して、定時制課程が共通して抱える課題と指導法について詳細にまとめている。その課題としてあげられているのは、次の12点だった。

一、定時制高等学校独自の学習指導はどのようにあるべきか。
二、学習指導に際して生徒の年齢差や経験差をどのように考慮すればよいか。
三、教師は学習時間の少ない生徒の指導をどうすればよいか。
四、生徒の必要に即してどのように個別指導、特別指導をすればよいか。
五、学習を能率化するにはどのような点に留意すればよいか。
六、基礎学力を養うためにはどのような点に留意すればよいか。
七、効果的・能率的な学習方法や態度を身につけさせるようにするにはどのような点に留意すればよいか。
八、欠席欠課の多い生徒の空白を補充するためにはどうすればよいか。
九、学校はホームプロジェクトまたは現場指導をどのように利用すればよいか。
十、生徒の疲労を少なくするにはどのような点を考慮すればよいか。
十一、学習指導にあたっては学校図書館や学級文庫をどのように利用すればよいか。
十二、学校はどのように評価を行ったらよいか。

通信制課程でもさまざまな指導の工夫が見られた。昭和30年には、ＮＨＫのラジオ放送による講座が始まった。また、同年以降、県内企業や准看護学校、女子専門学校、甲府刑務所収容者などが集団受講をするようになった。生徒会や地域支部も結成され、職員は校内でのスクーリングばかりでなく、出張講座、交流会を積極的に設けている。

が、生徒の自主的な努力が基本となる通信制課程には困難もつきまとった。地域ごとの担任をつけていたのを、入学年度ごとの担任制度を併用したり、吉田高・都留高・谷村工高・桂高などを協力校として指導を行ったり、文化祭・運動会で帰属意識を高めたりしたものの、仕事との両立や学習レベル・量の問題など、

学習の継続には困難がつきまとった。

昭和46年、定時制課程の生徒総会を傍聴した「甲府一高新聞」部員（全日制）は、次のように書いている。

通信制教育が始まって20年目の「記念誌」には、こんな言葉が見える。

「門を開いて20年、入学登録者数、数千を数えながら、卒業の栄冠を得たもの50余人」

5月19日午後6時30分より本校講堂において定時制生徒総会が、根津校長、他校生徒会本部役員の臨席のもとに開かれた。出席者数は在席数148名に対し130名と、全日制の生徒総会の十分の一余りであった。しかし、内容の点では全日制と比べ決して見劣りのするものではなく、2時間30分という短い時間ではあったが、熱のこもった討論がかわされた。

中でも特筆すべきは、会場内がたいへん静かだったということである。全日制のあの“騒音”の中での生徒総会とはまるで逆の感じがある。隣の人と話したり、まんが本に読みふける全日制。配られた資料とにらめっこして、何やら真剣に考えている定時制。（中略）

自分達のことは自分達でなければ話し合えないという心構えで望んでいるので、総会は自然と熱を帯び、みんなで考えるという雰囲気になる。（中略）

割合自由奔放な生活を送っている全日制にくらべ、定時制は何かと制約が多い。定時制生徒総会に提出された議案を見ても、無理からぬものが多数ある。「給食をもっと工夫して、おいしいものにしてほしい」「最終授業を5分前に終わってほしい」「前半の授業に給食を」など、6時に授業が始まり、9時に終わる彼らには、じかに身に迫るものばかりである。こういうことを我々はどれほどわかっているだろうか。

初年度110名の入学でスタートした本校定時制は、24年から26年までは140名以上、27年110名の入学があった。その後、90名から80名前後の入学者のある年が4年ほど続き、その後、60名～50名前後の入学者を維持していたが、昭和30年代に入り、例外的な年を除いて30名前後の入学者となった。

昭和46年、定時制課程・通信制課程とも新設独立高として発足した中央高校に統合されることになった。

昭和48年3月1日、定時制第23回、通信制第17回卒業式をもって、本校の定時制及び通信制の課程は幕を閉じた。

第6章　創立百周年まで

1．「原型」としての30～40年代

生徒会活動

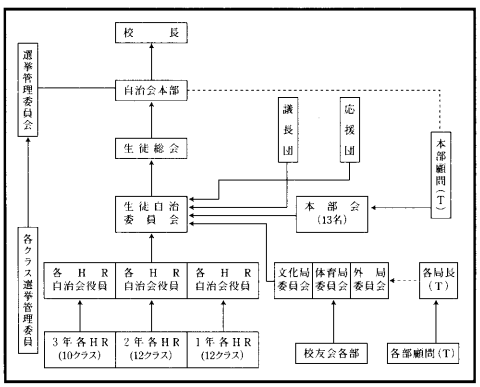
本校の生徒総会は何日にもわたり紛糾するので有名だった。昭和30年代の記録を見ただけでも、次のような日程で開催されている。

昭和31年…５月１日，２日，４日午前
昭和33年…５月２日，６日，７日
昭和34年…１１月26日，27日，28日午後（定数不足で不成立）
昭和35年…５月17日，18日午後，19日（７校時）
昭和36年…５月15日，16日午後，18日（短縮授業の後１時間）

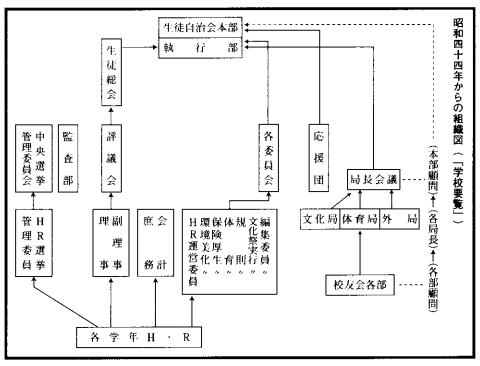
しかし、生徒総会がこのように長時間にわたっているから生徒自治会活動が盛んだったかといえば、そうとも言えないようだ。

昭和32年以降、会長・副会長の立候補者がスムーズに出ず、学年総会で推薦したり、任期を前期・後期（34年から）に分けたり、再告示、再々告示を行ったり、選挙管理委員会は東奔西走の連続だった。苦労の末、立候補者があって選挙になっても、無効票が多かったり不信任となったりする有様だった。学校生活に課題意識や問題意識を持ちながらも、自らが「自治」の先頭に立とうという者は少なかったのである。これは次第に激化する進学状況のせいでもあった。

昭和40年代に入り、生徒自治会活動への関心の度合いはますます低下し、42年には再々告示の後も立候補者がなく、２年生有志は臨時生徒総会を開くための署名集めをしたり、１年と合同の学年部会を２度にわたり開催、「生徒会衰退の原因とその対策」を議論した。そのなかで、生徒自治会が複雑な執行組織になっていたのを簡便化し、各学級・委員会と本部とを直結させるような改革の必要性が叫ばれた。従来は各学級・委員会と生徒自治会本部との間に、生徒総会・生徒自治委員会がたちふさがっていたのである。その結果、委員会が本部に直結し、各学級は評議委員会を通じて生徒総会に提案をするというように組織が改編された。



昭和43年度までの組織図



昭和44年度からの組織図

改革を受けて、昭和44年の生徒会活動の重点は、次の３点だった。

① ホームルーム活動の内容の充実
② 全生徒が生徒会の活動に参加できるようにする。
③ 理事・副理事の話の進め方、また司会者のあり方をよく理解してもらう。

②の実現のために、毎週火曜日の昼休みに「スチューデント・アワー」が放送された。また、③の実現のためには、リーダー講習会が開かれるようになった。44年８月に１泊２日で山梨市万力・子供の家で開催されたリーダ講習会のテーマは、

・生徒の生徒会の再認識
・今後の生徒会活動を活発にするための諸規定の説明
・ＨＲ運営上の諸問題

などだった。

が、その後も生徒会長、副会長への立候補がスムーズに行われた訳ではなかった。

40年代も後半になると、周囲では泥沼化していったベトナム戦争への反戦運動や全国の大学を巻き込んだ学園紛争の影響を受けて「目覚めた」生徒たちも存在した。彼らが会長・副会長に立候補することもあったが、一般生徒の意識とは乖離しており、不信任の決定を下されることもあった。


生徒総会風景

昭和50年になると、４度の告示にもかかわらず立候補者が出なかった。そのため評議員会が本部を代行するかたちも検討された。にもかかわらず、同年の「一高新聞」のアンケートによると、「生徒会を解散させるべきだ」との意見は13パーセントにとどまり、「そうは思わない」が72パーセントもあったことがわかる。解散すべきでないという理由としては、「生徒を統率する組織として必要」が37パーセント、「コミュニケーションづくりのために必要」が19パーセント、以下、「学校側に要求を出すため」「なんとなく」と続いている。

委員会活動と応援練習

昭和41年には、それまであった職員２名が清掃状況を点検した週番制度に代わって、生徒自らの手による環境美化整備委員会が設けられた。生徒総会で論議された際には、「生徒の自主性に基づいて遅刻の防止、清掃の徹底、風紀の刷新」を行うことが活動内容とされた。当初は「環境美化」と名付けられてはいたものの、現在の規律委員会をも兼ねる組織として発想されていたことがわかる。

環境美化整備委員会が議論、活動を進める過程で起こってきたのが「着帽の自

由化」の問題だった。議論は自治委員会、生徒総会と論議は広がって行った。学校の側でも、他県の実情の調査やＰＴＡ・同窓生の意見の聴取を行い、42年、「無帽も認める」という決定を見た。

昭和43年には環境美化整備委員会から規律委員会が独立し、本部の会計を管理する監査部が新設された。

伝統も古く、野球部に次いで多額の予算を割り当てられていながら活動が低調だった園芸部（園芸委員会）も、職員の指導の下、活発な活動を再開し始めた。

昭和30年代後半から１年生への入学儀礼として定着してきたのが応援練習である。昭和36年以降、８学級－10学級－12学級と学級数が急増して行く過程で、一高生としてのアイデンティティの醸成が課題となっていく。当初、１日程度だった応援練習が、２日間あるいは３日間継続して実施されるようになったのは、甲府南高校との２校総合選抜の１年目の昭和４３年のことだった。３校選抜、４校選抜と総合選抜制度が拡大するにつれて、応援練習はますます熱を帯びたものに変わっていった。

応援練習の成果を問う野球の全校応援が初めて実施されたのは、昭和46年の夏の大会だった。全校応援は薄れゆく生徒同士の連帯感、一高への帰属感を呼び覚ますのに大きな成果があったと好評だった。

文化祭から一高祭へ

秋の文化祭は文化局の発表の場として、生徒の自主的な活動の成果が問われる機会でもあった。また、外部から講師や音楽家を招いた文化公演的な行事も織り込まれていた。

昭和39年からは生徒自治会副会長を委員長とする文化祭運営委員会の手で企画・運営されるようになっていた。委員会には文化局各部、また、各学級から１名ずつが参加していた。「模造紙をただ貼ったような」「一夜漬けの感じのする展示」で面白くないマンネリズムを脱却することが大きな課題だった。

20回目を迎えた昭和42年には、仮装行列と合唱コンクールが初めて行事に加わった。翌43年には、全日制と定時制の合同文化祭を実施することとなった。

44年の「日新鐘」には、文化祭実行委員会の反省として、次のような一文が載っている。

「文化局の発表の場としての性格よりも、現在の一高のあらゆる活動の成果発表の場と考えたい。しっかりした統一テーマを早く設定し、それに基づいて行動したい。」

45年には、最後の「文化祭」が全日制・定時制・通信制の合同で開催された。この年は創立90周年にもあたり、３日間にわたって実施され、弁論大会・映画会・ステレオコンサート・演劇・招待音楽会・合唱コンクール・仮想行列と盛り沢山の内容だった。テーマは「存在」である。

46年から、「文化祭」は「一高祭」と名称を変える。運動会、クラス対抗試合、フォーク・ギター・音楽部・吹奏楽部による合同音楽会、ミス・ミスター一高などの企画が盛り込まれた。この年、文化祭運営委員会も「一高祭実行委員会」と名称をかえて現在に至っている。

95周年を迎えた昭和50年には、金魚すくい、喫茶などの飲食物の販売が加わり、翌年はゲーム大会など「お楽しみ行事」が加えられた。

一高への帰属意識を高める工夫は、文化祭の最後にも設けられていた。夕闇迫る校庭に積み上げられた薪に向かって、部室の屋根に上った弓道部主将によって火矢が放たれ、一瞬のうちに火柱が上がった。取り囲む生徒のどよめきの中を、スクールカラーである朱色の巨大な団旗を先頭に応援団が入場してくる。赤々と燃え上がるファイアー・ストームを囲み、校歌、応援歌の熱唱はいつ果てるともなく続いた。肩を組み、頬を紅潮させ、眼には涙さえ浮かべて、数多い応援歌を次々と高唱するのが、一高の学園祭の最後を飾る名物だった。そのために生徒自治会・実行委員会は、事前に近隣にあいさつをしなければならなかった。ファイアー・ストームが初めて行われたのは、昭和31年の文化祭だった。

応援につきものなのが吹奏楽部である。従来からあった音楽部は器楽班と合唱班とに分かれていた。生徒会本部、応援団では直属のブラスバンド組織の必要性を意識していた。

昭和32年２月、応援団吹奏楽部設立のため、生徒１人当たり30円の寄付を徴収した。引き続き楽器を購入し、夏の大会には間に合わせることとなった。音楽部の器楽班から「移籍」あるいは「兼任」する者のほか、新たに入部してくる者もいたが、経験豊富な者、楽器を手にしたこともない者と、部員のレベルはとりどりだった。

２．総合選抜制度の拡大

昭和30年に入るころから全国的に進学熱が高まった。本県でも高校への進学率が、昭和28年に50.8パーセントだったのが、昭和35年には60.9パーセントとなり、さらにその割合は高まっていく様相を見せた。

一方、昭和36年、それまでの学区制が全国の動向や県内の世論によって改められ、学区外入学の制限枠を廃止し、県教育委員会の承認制にした。学区外入学を希望する者が増え、昭和41年度には県下の平均で20パーセントに達し、なかでも本校では30パーセントを超える状況だった。

この中で、いわゆる学校間格差が助長され、受験競争が激化したと見られ、中学校教育の正常化と高校教育の振興を目指した、学区外入学者の制限、入試科目の制限、総合選抜制度の導入が議論された。一方、居住地や志望が考慮されないとか、同一校内での学力格差の拡大などの点から、時期尚早あるいは反対の声もあった。

甲府学区総合選抜制度は、昭和42年５月の県高校入学者選抜制度審議会によって検討され、７月、答申、８月、次の内容で４３年度からの実施が決定された。

①対象は甲府一高、甲府南高とする。
②実施方法は、学区内外に分けて２校の入学定員の合計数960の合格者を決定し、次に学区内外とも男女比率、成績が２校均等になるように配分する。

	学区外入学枠	学力検査の科目
～昭和41年	無し 承認制	9科目（英語ヒアリング、音楽実音テスト、理科実験、美術デッサン、体育実技を含む）
昭和42年	無し 承認制	英語、数学、国語、体育実技
昭和43年	10%	英語、数学、国語、理科
昭和44年	10%	英語、数学、国語、社会
昭和45年	10%	英語、数学、国語
昭和46年	5%	
昭和48年	3%	
昭和53年～	2%（甲府学区のみ）	

「県教委だより」によると、高校と地域との関係が希薄になること、家計の負担、通学の安全の点、「特定のエリート校を作る反面には意気の上がらない多数の学校を作る」点などを危惧して、甲府学区では２校間の総合選抜制度にとどめ、学区外定員を10パーセント以内に制限することとした。さらに年を追って、制限枠は縮小されていった。また、激化する受験競争や中学校教育の健全化をはかるために、入試科目を減らすことも決定された。（別表参照）

42年１月の本校の『校内研修資料』では、総合選抜後に備えて、「予測される実態」「傾向」として、次の点を上げている。

A　予測される実態

①学習能力格差の増大。

②家庭環境の多様化。

③家庭の躾（しつけ）教育の幅の増大。

④進路の多様化複雑化。

⑤生活指導面の多様化。

⑥校風の変化。

B　予測される傾向

①高校生活に不適応の生徒が増える。

②学力不振の生徒が増える。

③性行不良の生徒が増える。

④目標のない無気力な生徒が増える。

⑤自主的活動の不振・低下。

⑥学業以外のものに興味を求める生徒が増える。

⑦劣等感からノイローゼ傾向を示す生徒が増える。

43年の県議会一般質問には、総合選抜制度導入に伴う本校の校名変更問題が提出され、新聞紙上をにぎわした。

実施後の昭和44年度、県教育研修所の高校教育研究室では、「高校入試制度に関する調査研究」を発表している。本校と甲府南高の１，２年生の生徒を対象としたアンケートでは、次のような傾向が見られた。

［現行の総合選抜について］

全面的に賛成　１％

多少問題はあるが基本的に賛成　25%

いろいろ問題があり賛成できない　33%

反対　21%

わからない　20%。

（本校・甲府南高の集計を分けていない）

教師、保護者、生徒対象の調査の中で、代表的な肯定的意見をまとめると、次の３点に要約される。

○高校格差が解消され、相互が発展し、高校教育の振興がはかられる。
○過当な入試準備教育が緩和され、教育の正常化がはかれる。
○エリート意識もうすらぎ新校風も樹立される。

否定的意見の主なものは、次の通りである。

○学校選択の自由が無視されて不合理である、これに伴う不安感や向学心の障害もある。
○通学上の問題も考慮すべきだ。
○校内での学力差の拡大、学習意欲の減退、全体の水準低下、指導上の問題も起こる。
○学校差や学校の特色があってもよいではないか。

さらに、教師対象の調査で「従来の一年生に比して今年度の一年生にはどんな特徴がみられますか」という問については、

［学習意欲が以前に比して］
消極的　41％
積極的　30％
［ホームルーム活動が以前に比して］
消極的　21％
積極的　８％
［クラブ活動が以前に比して］
消極的　44％
積極的　７％

という結果が報告されている。

その後も総合選抜制度は拡大されて行き、昭和50年度からは甲府二高が加わった３校総合選抜となった。

52年度からは新設の甲府東高が加わった４校総合選抜が始まった。前年あたりから、本校・甲府南高・甲府西高では習熟度別学級編成、また、教科のグレード別授業も一般的になって行った。

昭和51年４月着任した山下穆校長は、同年の『同窓会総会資料』に次のように記している。

甲府一高は今、総合選抜の中の一校として、さらに新たなる転換期を迎えよ

直前の「甲府一高新聞」では、次のような教師の感想を掲載している。

選抜以前は質問者が多かった。授業を終わると教室をいっせいに飛び出して来て、次から次と質問を浴びせられた。中には教科書以外の難しい質問をする生徒もいて苦労しましたね。

○

昔の生徒の方が自主性が強くて、わりと自分のことは自分で解決するものが多かったようですね。今の生徒より将来の見通しを立てて真剣に取り組んでいたみたいですな。

○

現在の生徒は経済的に裕福になった反面精神力が弱いように思えます。それに細かいところまで注意しなければならなくなりました。

○

二校総合選抜になると勉強に集中する者とスポーツに集中する者とが出て、一層スポーツが盛んになるだろうと期待したが、その期待ははずれた。今の生徒からは根性というものが消えつつある。

○

校内の学力差が開くため、授業についていけなくなる生徒が関心をどこに向けていくかを教師は見守らなければならないだろう。

うとしています。これは甲府中学から甲府一高に変わり、また男子校から男女共学校となった時期と同じように大きな変革であると言えましょう。総合選抜制度そのものに関するメリット、またデメリットについてさまざまな意見があり、またその中の一校としての甲府一高のあり方についていろいろ批判があることは私も十分承知しています。その中にあって、精神的遺産とでも言うべき古い歴史と伝統を生徒たちに対する教育の中で如何に生かして行くか、また滔々として徒に新しさのみを求めようとする風潮の中で、古きもののよさ、尊さをどのように教えて行くか、これが私に与えられた最大の課題であると考えます。

59年度からは新設の甲府昭和高の加わった５校総合選抜となった。

平成10年度、甲府西高が単位制高校として甲府学区の５校の総合選抜制度からはずれるまでこの体制は続き、４校による総合選抜制度はその後も維持された。

3.「政治」の季節

昭和43年度から、本校と甲府南高校との２校による総合選抜制度が始まった。「甲府一高新聞」によると、昭和46年、生徒会本部によって、本校と甲府南高との合同行事についてアンケートが行われた。両高の親睦をはかりつつ、本校そのものを見直そうという意図があった。賛成は65パーセントに及んだが、具体化するための行事討論会は出席者が少なく、流会となった。ロングホームルームのテーマにも取り上げられたが、逆に反対意見が多く出された。結果として、合同行事は実現しなかった。

２年後の48年、両校のＰＴＡ会長を経験した同窓生によってラグビー交流のための友好カップが寄贈され、友好杯争奪ラグビー定期戦がスタートした。これを皮切りに、ラグビーのほかサッカー、剣道など体育局各部の一南戦が行われるようになった。試合の後、合同ミーティングや両校校歌の披露などが行われた。

50年には甲府第二高校（現甲府西高）が加わっての３校総合選抜となったが、３校の調整をとるのがむずかしく交流行事は次第に低調になって行った。３校による総合選抜制度のスタートを目前にした昭和49年、本校の校名変更論議が起こった。校内では変更への抵抗感が強く、生徒会が校名変更対策特別委員会を設置し、反対のための街頭署名やマスコミへの広報活動が盛んに行われた。

52年には新設の甲府東高校、59年にはさらに甲府昭和高校（新設）が加わり、総合選抜制度は５校の間で行われるようになった。

昭和43年の暮、山梨県高校生反戦会議の名で「安保粉砕」「沖縄解放」「教育の欺瞞性粉砕」と政治活動の組織化を訴えるビラ配布が始まった。スローガンを大書した立て看板が校内に現れたり、討論集会、フォークソングに託して活動をよびかける集会なども行われるようになった。

翌44年は東大事件に始まり東北大事件に暮れるという年だった。４月、日新ホール、図書館、大島正健元校長碑などの汚損行為が起こった。

県下の高校生の間にも、少数ではあるが、全国の大学に組織された全共闘の影響を受けた反戦高協とノンセクトの高共闘の２グループができていた。前者は甲府南高を、後者は本校を拠点とする趣があった。

６月、国際反戦デーを翌日に控え、本県初の高校生のデモ行動が行われた。午後３時30分、ヘルメットにタオルで顔を隠し、山梨高校反戦評議会の旗を掲げた18名（女子２名を含む）が本校正門前で集会を行った。「反安保」「沖縄解放」「高校生の指導手引粉砕」をスローガンとして、市内の朝日通り－甲府駅前－甲府市役所－県庁を経て、舞鶴城でシュプレヒコールを行った後、山梨大学へ向かい、大学生と合流、集会後、解散した。

ベトナム戦争の泥沼化、原子力潜水艦の入港、沖縄返還、羽田事件、佐世保事件、45年の日米安全保障条約改訂など、わが国を取り巻く政治・外交の情況は緊迫していた。全国各地の大学では、これらの社会問題に加えて、授業料、助手の待遇問題などに端を発する学園紛争が起こっていた。

大学進学のための勉強に追われながらも、高校生の社会現象に対する関心はいやが上にも高まっていた。「一高新聞」の特集を一覧しても、この頃の記事には「放射能の脅威－原潜入港」「砲火のカシミール」「米軍の北ベトナム爆撃」「全学連」などが散見し、一方では「沈黙か、行動化か」「校内の自由を見る－高まる関心、政治活動－文部省、高校生の指導強化」などのアンケートや解説記事もある。

彼らの加わった座談会ではこんな発言もあった。

「高共闘といったノンセクトだから、まずオルグをして、そして学習会なりデモなどをする。安保粉砕とかも掲げて。しかし、一番に掲げているのは、高校教育の帝国主義改変だから、そこがいわゆる反戦高協などとは違っている。まず教育の方面から。高校生の活動の限界があるから安保粉砕は三番目くらい。」

一般生徒の反応はどうだったのか。「一高新聞」のアンケートなどで見ると、高校生のデモなどの行動については、「反対」が40パーセント、「賛成」が37パーセント、「わからない」「無回答」が26パーセントという結果だった。まさに生徒たちの意識は三分していた。直接行動に参加している者は少数だったが、彼らに対しては「活動家をとりまくみぞは、おとなの間ばかりではなく、高校生同士の間にもある」と指摘され、生徒自治会役員選挙などへの立候補については、「拒否」の反応が目立った。

が、前述のような校内施設への破壊、汚損行動や卒業式、入学試験への妨害のおそれなどもあって、校内は日常的にぴりぴりと緊張していた。

45年の６月には、「反戦行動をとろう」という議題による臨時生徒総会の開催を求める署名活動が展開された。規約にある開催条件をかろうじて満たす署名が集められ、生徒会、学校などで数時にわたる協議、討論会を経て、６月20日開催が決定した。その間にも、50名ほどの高共闘の生徒による集会や校内でのデモ行動が行われ、職員との間にもみ合う場面もあった。

臨時生徒総会は全校生徒の出席で開催されたが、議論に参加したのは活動家と一部の生徒だけで、「反戦行動をとろう」との議題は、賛成250名足らずで否決された。「一高新聞」には「浮き上がった活動家」の文字が見える。

10年ほどを経た昭和55年、「一高新聞」の質問に答えて、当時の校長だった根津修蔵は次のように語っている。

－政治活動に入っていた生徒の考えに対してどう思いますか？

彼らはとても純粋でした。しかし、思想が自分自身の人生経験やそれによる

疑問から生み出されたものでなかった点は残念だったと思います。また、一時的な感情が強く、理性より感情が先立ってしまったような面もありました。しかし、当時の若者のエネルギーは高く評価できると思います。

－高校紛争が下火になっていったことをどう思いますか？

私は高校紛争は一時的な現象で盛り上がったものであり、一高で伝統的に受け継がれていくようなものではなかったと思います。そういう意味で、下火になって行ったのは当然でしょう。

－高校紛争によって一高生は変わりましたか？

高校紛争によって一高生が特に変わったとは思えません。高校紛争というのは社会的な認識には未熟であるが、清純な若者が一つの目標を目指した動きであり、彼らにはそれが持続できなかったため一高は変わらなかったと思われます。

－学校側の活動家に対する方針はどんなものでしたか？

徹底的に話し合いをするということでした。圧力を加えることは簡単ですが、絶対にしませんでした。

－高校紛争は一高にどんな影響を残しましたか？

ひどい災害に遭った時、それを反省する心があれば成長するのと同じように、一高は高校紛争によって素晴らしく成長したと思います。そしてそれによる成長が今の一高につながっているのですから、ぜひ、今の一高生の手で一高を大切にして行ってもらいたいと思います。

4　研修旅行、宿泊研修会の始まり

昭和30年代から40年代にかけて、学校行事にも工夫と検討が続けられた。一方で、激化する進学競争のなかで行事の簡素化と教師－生徒、生徒－生徒の融和という相反するかに見える課題の解決も迫られていた。

社会状況が次第に好転し、「もう戦後ではない」と言われた高度経済成長のなかで、修学旅行も毎年のように事前指導から実施内容を工夫し、見学地を変えていった。にもかかわらず、昭和40年の「甲府一高新聞」では「マンネリ化の様相を呈してきている修学旅行」と題して、松本深志高校や諏訪清陵高校の例を取り上げ、職員と生徒の意見を載せている。授業のマイナスになってまでするべきか、簡素化あるいは廃止などの改革論、友人や職員との交流、校外活動の意義を唱える継続論と、意見は様々だった。



志賀高原への研修旅行（昭和46年）

41年には職員会議でも修学旅行の改革が論議されている。その結果、43年5月から研修旅行と名称を変え、実施学年は2学年とし、期間は2泊3日、方面もこれまでの関西に代わって志賀高原となった。旅行の目的は次のようである。

（ア）信濃路の自然景観、歴史的遺跡を訪れ、さまざまな見聞をすることによって、各教科科目その他における指導を拡充し、広い知見と豊かな情操の育成に資する。

（イ）校外に出て旅行という生活形態と、集団行動を経験することを通して、健康・安全・集団生活のきまり、公衆道徳などについて望ましい経験を積む。

（ウ）未知の世界を見聞し、あるいは子弟や学友が生活を共にすることによって、楽しい生活を味わい、学校生活をさらに豊かなものにする。

コースは次のようだった。

1日目　小諸懐古園、鬼押し出し、草津サンバレー
2日目　殺生ケ原、白根山、植物園、志賀高原丸池
3日目　善光寺、松本城

夜は「愛について」「人生について」「現代の高校生について」「自由と放縦について」などのテーマで、クラスごとのホームルームを行った。
昭和46年になって、生徒総会で修学旅行復活の要望が提案された。検討の結果、翌47年から伊勢志摩、合歓の郷方面の研修旅行に変更された。その後、吉野・京都を付け加えたり、山陽方面に変えたりと幾多の工夫が見られた。
昭和53年より、ふたたび歴史的遺跡の密度の濃い奈良・京都方面にもどり、平成9年まで継続されていく。

これまで修学旅行を行っていた3年生は、この年、5方面に分かれて3日間の大学巡りを実施した。

目的は「進学を希望する大学の内容を実際に見聞きすることによって、大学の理解を深め、各自の進路決定に万全を期する」というものだった。各地で先輩の出迎えを受け、大学の先生・先輩とで学内を見学、入試関係、入学後の授業や卒業後の進路などの説明を受けた。夜は宿舎で先輩たちと懇談という内容だった。
県内組は1日目の大学見学の後、2日目は岩波教務主任（当時）の講演、3日目は旺文社事業局長の講演という内容になっている。
翌年からは5月に実施していた遠足が復活し、進学講演会と個別懇談のみ維持さた。

例年、3年生は昇仙峡や河口湖周辺、千代田湖、要害山などへの遠足を実施し

方面、見学大学、参加人数

東北地区－東北大（61名）

東京地区－東京大、東工大、一橋大、東教大、上智大、中央大、横浜国大、千葉大、早大、慶大（163名）

北陸地区－新潟大学などの第一、第二希望の者（5名）

関西地区－京都大学など（25名）

県内－山梨大学など上以外の者（353名）

ていたが、昭和38年、八ヶ岳清泉寮で初の宿泊訓練を行った。「試験・勉学から解放され、２日間ゆっくりと時間をとり、先生と生徒の親睦を深めるとともに話し合いなどによって生徒間の交友を深めようとする」のが目的だった。牧場での自由な時間、校長訓話、映画上映、キャンプファイアーの周りでのフォークダンスなど、生徒及び職員の評価はおおむね高かった。

３年生の宿泊訓練が好評のうちに終了したため、すでに５月に野辺山への遠足が済んでいた１年生が、９月末、身延山宿坊での宿泊訓練を急遽実施することになった。久遠寺、七面山の見学のほか、２時間のホームルームが実施された。１年生の宿泊訓練は、その後昭和46年から蓼科研修旅行、48年から箱根芦ノ湖湖畔での宿泊研修ホームルーム、52年からは愛宕山少年自然の家と、方面と形態を変えつつその後も継続実施されて行った。旅行・見学のテーマから、次第に集団訓練・ホームルーム研修の意味合いを濃くしていったわけである。



身延山研修（昭和42年）

5．強行遠足、佐久往還コースに

24時間、距離無制限で営々と実施されてきた松本方面への強行遠足は、昭和32年に岩間孝吉が167キロメートル地点の大糸線簗場到着という大記録も生み出していた。

が、30年代に入るころからコースの交通事情が悪化してきた。また、時間制、距離無制限という伝統が、生徒の生活習慣や身体の状況にふさわしくないのではないかという議論も起こってきた。現に他校の強行遠足では、人命に関わる事故を引き起こし、計画そのものを廃止あるいは縮小する学校も出始めた。本校の「質実剛健」の校是のもとで実施されてきた強行遠足への風当たりも強くなってきた。

校長の広瀬勝雄は、コースを佐久往還方面にかえることで周囲の批判をかわし、伝統行事を守ろうとした。表向きは交通事情と生徒の安全歩行が理由である。が、実際は行事の存続をかけての変更だった。広瀬はＰＴＡや生徒会の理解を得、周囲、沿道の協力を取り付けて行った。

岩波政雄元校長は『佐久往還強行遠足20周年記念誌』の中に次のように書いている。

30年代に入ると、次第に交通事情が悪化し、このコースが適当であるか否か の検討を要するようになってきた。その検討の結果、松本コースを改めて松原湖 方面へのコースをとることになった。決定に至るまでの道のりは長かった。その年の職員会議録や「甲府一高新聞」によれば、特に37年度始めから本格的な検討に入り、委員会を設けてコース変更の場合の具体的計画を練り、ようやく成案を得て、ＰＴＡにも同窓会にも変更の趣旨などを説明して賛同を得た。一方生徒には、ＬＨＲの放送を通じて縷々説明し、自治委員会でも納得のゆくまで話し合いを行った。こうして、新コースの決定をみたのである。

しかし、「親の心子知らず」というもので、生徒がこの佐久往還コースをすんなり受け入れた訳ではなかった。「一高新聞」にはとまどいと松本コースへの強い執着の論調が見られる。松本コース最後の昭和36年の強行遠足は、生徒のふんまんの現れか、コース途中の韮崎その他でいたずらが目についた。しかも、てんまつ地元新聞に報道されてしまった。周囲の非難と「強行遠足廃止」論に、広瀬勝雄校長は耳を貸さなかった。

翌年、佐久往還コースでの初めての強行遠足が実施された。安全面への配慮から、次のようないくつかの工夫が見られた。

これまで正午の出発だったのを、交通混雑を避けるために「午前０時」とし、男子の制限時間を24時間から15時間に、女子を８時間から７時間とした。さらに清里清泉寮を本部にして、おでん、うどんなどが食べられるようにし、ブラスバンドの演奏でフォークダンスができるようにした。走ることを禁止し、早く到着しても一定時間までは出発させない「先頭停止時刻」を設定した。学校内外に生徒の安全面の配慮を重視する声が高かったからである。

が、清泉寮に長時間留まる者はいなかった。軽食をとり、足踏みをしていた生徒たちは、出発をしてもいい時刻になると終点の松原胡を目指して一斉にスパートして行った。男子は学校から66キロメートル、女子は箕輪新町から38キロメートルのコースだった。

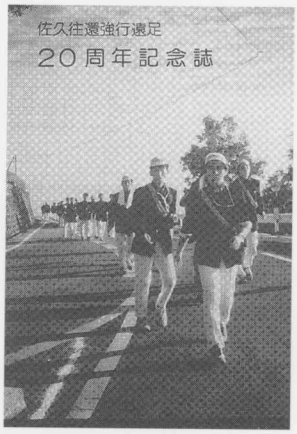
翌38年は、生徒の強い要望を容れて、男子は終点を中込（87キロメートル）まで延ばしたが、女子は制限時間は５時間で海ノ口（32キロメートル）終点と短縮された。

この年、生徒たちの士気を高め、気軽に口ずさめる「強行遠足のうた」が校内で募集された。入賞作はなかったが、佳作として選ばれたのが、本校職員だった渡辺弘・八田政季作詞の青春のロマン溢れる２作だった。芦沢正巳によって作曲されて生徒に歌われたという。（※別項参照）

39年には男子の出発時間を午後９時に改めた。女子は若神子小学校から野辺山までの36キロメートルと、さらに短縮された。実施後、女子の半数がゴールしたこともあり、距離の延長を求める声が高くなった。

男子が小諸、女子が小海という現在のゴールになったのは、その翌年40年の第40回大会からである。制限時間も男子20時間、女子５時間30分、出発時間が男子午後５時半となり、女子の出発地が三軒屋となった。

以後、出発時間が順次繰り上がって行ったこと、制限時間を調整したこと、女



「佐久往還強行遠足
20周年記念誌」（昭和56年）

子の出発地を変えたこと、検印所の場所の変更などのほかは、おおむね現在と同様な形態で実施されてきた。強行遠足の実施の変遷、現在の実施状況については『強行遠足70回記念　歩け、心の限り』に詳しい。

6．さらなる前進ー活躍する各部

年代を追って「一高新聞」や「日新鐘」などを調査していくと、教科外活動ことに部活動の状況をたどることができる。

昭和45年には、生徒自治会本部によって「３・７入部制」が提唱され、４，５月の間に限り、３日間体験入部し、気に入ればさらに１週間体験させるというものだった。

たとえば部活動の参加率については、おおむね次のようである。

昭和３１年－１年６８%、２年69%、３年59%
昭和４２年－１年５６%、２年47%、３年38%（平均47%）
昭和４４年－１年６１%、２年51%、３年44%（平均53%）
昭和55年ー学年別人数不明（平均53%）

変転はあったものの、県内各校の部活動の復活進展のなかで、本校各部の活躍が目立ち、県の総合体育大会での総合順位は次のようだった。

昭和24年（第１回）ー優勝
昭和25年ー優勝
昭和26年ー男子優勝、女子16位（初参加）
昭和27年ー男子３位、女子15位
昭和28年ー男子４位、女子17位
昭和29年ー男子４位、女子16位
昭和30年ー男子６位、女子17位
昭和31年ー男子５位、女子18位
昭和32年ー男子３位、女子12位
昭和33年ー男子４位、女子21位
昭和34年ー男子４位、女子21位
昭和35年ー男子４位、女子23位
昭和36年ー男子４位、女子13位
昭和37年ー男子４位、女子19位
昭和28年ー男子４位、女子９位
昭和29年ー男子３位、女子19位
昭和40年ー男子６位、女子14位
昭和41年ー男子10位、女子19位
昭和42年ー男子９位、女子22位
昭和43年ー男子９位、女子18位
昭和44年ー男子５位、女子11位
昭和45年ー男子５位、女子25位
昭和46年ー男子12位、女子無得点
昭和47年ー男子12位、女子21位
昭和48年ー男子12位、女子24位

昭和49年－男子12位、女子26位
昭和50年－男子11位、女子24位
昭和51年－男子10位、女子28位
昭和52年－男子９位、女子28位
昭和53年－男子５位、女子28位
昭和54年－男子10位、女子12位
昭和55年－男子12位、女子11位

山梨県高等学校体育連盟「20年のあゆみ」及びその後毎年刊行されている「高体連会誌」から、各部の活動のうち顕著なものをあげると次のようである。

[陸上競技部]
東西対抗で走り高跳び２位（昭和33）をはじめ、各年度ごとに県内優勝者、記録更新者を輩出。新人大会に男子優勝（昭35）。県総合体育大会に優勝（昭35，36，44，45）。

[バレーボール部]
国体ベスト８位（昭和24）。山静大会に優勝（昭26）。関東大会出場（昭32，33，35）、全国大会出場（昭32，33）、県総合体育大会に優勝（昭24，25，26，32）。

[バスケットボール部]
山静大会に優勝（昭和25）。県総合体育大会に優勝（昭31，34，37，38）。

[卓球部（男子）]
関東大会出場（昭和33，37）。全国大会出場（昭23，25，26，35，36）。県総合体育大会に優勝（昭25，26，37）。

[軟式庭球部]
全日本選手県大会（昭和24－団体３位，29年－準々決勝進出）。関東大会（昭34－男子複準優勝）。県春季大会（昭36－優勝）。秋季大会（昭41－優勝。新人大会（昭36，44，45，48－男子複優勝）。新人大会（昭43－団体優勝）。県総合体育大会（昭24～26，28，29－優勝）。

[体操部]
県総合体育大会（昭和39，42－優勝）。

[水泳部]
県内優勝者、例年、多数。関東大会（昭和53－板飛び込みで優勝）。

[ハンドボール部]
東日本大会（昭和23－２回戦引き分け，昭28－出場）、関東大会（昭38）。

[バドミントン部]
関東大会（昭和32，33，36－男女、昭39－男子）、全国大会（昭26，30，33－男子）。

[相撲部]
県総合体育大会（昭和24，25－優勝、昭28，29－団体優勝）。

[ラグビー部]


陸上競技部（昭和45年）

県総合体育大会（昭和24－優勝）、山静大会（昭24－優勝）、関東大会（昭34，35，36）。

[サッカー部]

国体（昭和24，26，29、昭29準優勝）、同県予選（昭32－優勝）。

[柔道部]

県総合体育大会（昭和26－優勝）、国体（昭27，28）、学年別大会（昭43，44－１年生優勝）、新人大会（昭44，45－優勝）。

[弓道部]

県総合体育大会（昭和29－個人優勝，昭32－優勝）、新人大会（昭38－男子優勝）、学年別大会（昭41－１年男子優勝，昭43－２年女子優勝，昭48－男子個人優勝）、全国大会（昭52）。

[剣道部]

県総合体育大会（昭和34－個人優勝、昭37－Ｂ組優勝）。

[登山部]

全国大会（昭和38，39）、関東大会（昭34，40）、国体（昭37～40）、県総合体育大会（昭38－優勝）。

[スキー部]

学校対抗（昭和32－男子優勝，昭34－男子優勝）、県総合体育大会（昭36－男女優勝，昭37－女子優勝・回転競技１位，昭39－男子優勝）、全国大会（昭36－大回転３位）。

[フィギュアスケート部]

県内優勝、全国大会入賞者多数。国体（昭和39－３位，昭40－３位，昭41－３位・２位）、全国大会（昭45－準優勝）、県総合体育大会（昭39－男子優勝，昭44－男子優勝，昭45－男子優勝，昭53－女子優勝，昭54－女子優勝、昭55－女子優勝）。

[ローラースケート部]

県大会（昭和35－優勝、昭36－優勝）、全国大会（昭35－５千メートル優勝・１万メートル優勝）。

[硬式庭球部]

県総合体育大会（昭和51－男子優勝、昭52－総合優勝，昭53－個人優勝，昭55－総合優勝）、全国大会県予選（昭54－男子優勝）、新人大会（昭55－女子優勝）。

[団体徒手部]

新人大会（昭和27－準優勝）。

[野球部]

山静大会（昭和21，22，24，26，29～31）、甲子園大会（昭36－２度目，昭43－３度目）、関東大会（昭36春季－優勝，昭36夏季，昭54，昭55）。

昭和43年の全国高等学校野球大会（甲子園大会）は第50回記念大会で、１県１校が出場できることになった。県予選決勝で吉田高校を１対０で破った本校は、７年ぶりに甲子園出場の切符を手にした。「甲府一高新聞」「高校野球のあゆみ」「朝日新聞」などの記事を拾いだしておく。

８月３日には、全校生徒による壮行会が開かれ、同時に応援の申し込みが行われた。また、本校出身である嶋田武氏、平野忠彦氏らが作詞作曲した新しい応援歌が贈られ、在校生と、先生方を感激させた（「甲府一高新聞」）。

○

甲子園においては山陰の雄浜田高に対戦、６回小沢の左翼ラッキーゾーンに入るホームランにより１点を先行したが、８回に１点を容れられ１対１の同点のまま延長戦に入り、10回浜田１点入れて２対１にて浜田の前に屈す（「高校野球のあゆみ」）。

○

第２試合に出場する鹿児島商のブラスバンドは７回裏一高守備のとき、一高ブラスバンドと合同演奏、親善風景をかもしだしていた。

この日運び込まれたのぼりは、知事の書いた「必勝」、大阪山梨県人会の贈った「風林火山」のほか「質実剛健」ののぼりが二本青空にはえていた（「甲府一高新聞」]。

○

長い球史を誇る甲府一が久しぶりの出場とあって、同好の応援団はなかなか多彩な顔ぶれがそろった。選手の父兄はもちろん、10日朝には前日バス５台で甲府を出発した生徒たち300人。それに歴代の野球部卒業生でつくっている「鶴城クラブ」の先輩など全部で約500人のほかに、望月県教育長や鷹野甲府市長、竹下県議会議長らも顔を見せた（「朝日新聞」）。



甲子園大会に出場した野球部（昭和43年）

（第１部「百二十年の歩み」は、山梨県立甲府第一高等学校同窓会編『百年誌』を底本として、新たに書き下した。）

第2部
近年二十年の記録



はじめに

第２部では創立100周年を経た後の20年の歴史をできるだけ具体的な記録資料として残そうとした。

この時期の学校を取り巻く状況について簡単に触れておきたい。

第１部で述べているように、昭和59（1984）年、県立高校の甲府学区は本校・甲府南・甲府西・甲府東・甲府昭和高校の５校による総合選抜制度へと移行した。このことは昭和43年、本校と甲府南高校から始まった甲府学区総合選抜制の完成を意味していた。県内でもっとも遅れた東山梨学区でも平成元年に日川・山梨・塩山の３校で総合選抜制度が実施され、県内の総合選抜制度は完成した。しかし、高校教育の平準化、平等化をめざす総合選抜制度の完成は同時にこの理念の転換点にもあたっていた。

戦後日本の教育改革がめざした理念は教育の民主化・大衆化・平等化などであった。また教育内容の系統化や向上にあった。こうして理念は30年近くにわたって公教育をリードするが、1970年代（昭和50年代の前半）までには大衆化や平等化の目的はほぼ達成されたと見られるようになり、むしろその中であらわになってきた様々な矛盾、受験競争の激化や選抜方法の過剰な公平性志向、いじめや校内暴力の問題に強い関心が向けられるようになっていた。80年代にはいると戦後の教育理念を転換し、新しい理念による教育改革が叫ばれるようになる。昭和59年に設置された臨時教育審議会は「第３の教育改革」を提唱、かっての民主化・平等化・大衆化の理念に代わって個性化・自由化・国際化・弾力化・ゆとりなどが改革の理念として打ち出されることになった。その後この「第３の教育改革」はこれまでの教育の枠組みそのものを再編する大改革と位置付けられ大きな潮流となって今日にいたる学校教育を揺り動かしている。具体的には学校教育における個性の重視、学校選抜の弾力化、教育内容の多様化、学校５日制の導入、単位制・総合学科高校の設置などが矢継ぎ早に進められている。97年の中央教育審議会の策定した「教育改革プログラム」では公立学校における中高一貫教育・飛び級なども提唱され、これも徐々に実施に移されている。

こうした状況下において、本県における総合選抜制度の完成はいわば旧理念による改革の遅れてきた完成であって、その完成はただちに新しい理念による改編へむかわざるをえない宿命をおっていた。本県でも新たな教育改革に向けて慌ただしい取り組みが始まった。この20年間に本校で起きた様々な制度的変更はこうした改革の動向に根ざしている。

この間の本校では、平成２（1991）年英語科設置、平成３年隔週５日制実施、平成５年からの40人学級、平成10年からの入学者選抜における推薦入試制度の導入などが行なわれた。平成４～５年には、本校の歴史に大きな画期をなす校舎の全面的改築も行なわれた。新しい校舎はアリーナやコモンスペースなど、ポストモダン建築の遊びやゆとりの発想を取り込んでおり、機能性と合理性だけを追求した近代建築を越えるものとなっている。第３の教育改革は教育におけるポストモダンと称されることもあるが、その意味で新校舎もこの改革の時代の傾向を表現していると云えるかもしれない。

こうして制度の変更、教育内容の変化、生徒の多様化など本校も大きな変化のなかにある。その変化が本校をどこに向かわせるのか、その方向性はまだはっきりとは見えていないと思われる。

第1章　校舎改築

甲府城内の校舎から「新時代への校舎へ」の移転として昭和３年に新築されて以来60余年にわたって山梨の多くの若者を育み、親しまれてきた旧校舎は平成４年ついにその役割を終えて、惜しまれながら解体された。この間日本は未曾有の戦争の時代から戦後の混乱と民主化の時代、さらに高度経済成長の時代へと激しい変化を経験した。学校は甲府中学校から甲府第一高等学校へと名称を変え、その性格も変容させてきた。旧校舎はその中にあって戦災による被害は受けたものの変わらぬ姿で、生徒を受け入れ続けたのであった。旧校舎に対する同窓生、在校生を含め関係者の思いは深いものがあり、改装による存続を望む声も多く聞かれた。しかし老朽化と科学技術の変容に伴う必要性には耐えられないという判断がその存続を断念させることとなった。

旧校舎が姿を消してから約１年３ヵ月後、旧校舎の面影を一部に留めるもののかってのイメージを一新し、新しいデザイン、科学技術をふんだんに取り入れた新校舎が姿を現した。

１．新校舎の構想

平成３年７月16日管理職、分掌・学年・教科主任、事務局（正・副委員長）で構成される校内校舎改築準備委員会が設置され、続く７月24日の第２回委員会までに改築の概要、日程、県との対応などを協議し、各分掌・学年・教科からの要望を集約した。これを前提に、８月５日校舎改築についての要望（第１次）を県教委に申し入れ、協議した。県教委側からの問題点の指摘もあった。県教委との協議の概要はほぼ次のとおりであった。

[出席者]

学校：校長、教頭２名、事務長、事務次長、教諭１名

県：山梨教育推進課課長補佐、学校施設課課長補佐、学校施設課副主幹、山梨教育推進課主任

[内容]

（１）学校側から基本的考え方などの説明

①21世紀における学校施設としてふさわしいものとする。

・可能な限りインテリジェント化に努める。

・機能的であると共に、ゆとり（人間味）のある施設とする。

②限られた敷地・空間を有効に活用し、ゆとりのスペースを確保する。

③文化遺産としての旧館（本館）の持つ雰囲気（重厚さ）をできるだけ生かす。

（２）基本的な要望事項

①多様な生徒に対応できる教育を進めるための施設。

・学年別職員室・相談室。

・多様な教育課程が実施できる施設。（複数の多目的教室など）

②生徒昇降口の設置。（上下履きの区別）

③空調設備の完備。

④文化創造館（または類似の施設）の用地の確保。（文化創造館内には厨房・食堂を併設する）

⑤中庭はできる限りゆとりの空間として生かす。

⑥普通教室・講義室等の床はフローリング（木製板張り）にする。

⑦駐車場の確保。

⑧倉庫棟の設置。

（3）県からの発言

①普通高校の各施設に対する基準面積があるので、ある部分を重点的にすれば他の部分にしわ寄せが生ずる。（日常の教育活動のためにどうしても必要な施設と、あると都合がよい施設とをはっきりさせないと、結果的に無駄な面が多くなるのではないか。日常の生徒の流れを考えてみる。）

②ある程度の区分設定も必要ではないか。

（例：管理ゾーン、文化的ゾーン、体育的ゾーン、など）

③ハード面とソフト面との機能的な融合を考えてほしい。

④今後への課題

・全部希望通りとはゆかないので希望の優先順位を示してほしい。

（改築・・既存施設が基本となっている。）

・必要とする施設の広さの根拠を明確にする。

（例：書庫－蔵書の数を具体的に示す。など）

・備品の有効利用を考えてほしい。

1期工事完成で使う備品

2期工事完成で使う備品

（改築なので、備品がすべて新しくなるということはない。）

・今後は2日間程度の期間で回答を求めることも多くなる。

以後第6回まで委員会を通して各分掌・学年・教科の要望（2次以降）を集約・整理し、県教委・設計者との折衝を経て、担当設計者から次のような基本設計の指針が提示された。これが平成4年1月の委員会で確認され、この基本線に基づいて改築工事が進行することになった。

（1）コンセプト

アーバン・インテリジェント・ハイスクール（Urban Intelligent High School）

山梨県で最も伝統のある甲府第一高等学校の全面改築にあたり、われわれは目前まできている21世紀に対応できる新しい学校像として「アーバン　インテリジェント　ハイスクール」を提案します。多様化し情報化する社会に対応し、地域教育センターとしても活動でき、そして何よりも生徒達の意欲を汲み上げ、より生き生きとした学校教育が行える場として、現在の一高敷地及び位置、今までの

一高の果して来た役割、これからの高校教育等を考えた時、都市的でクオリティの高い、時代に対応できる学校施設のイメージとしての「アーバン　インテリジェント　ハイスクール」。これがこの計画のコンセプトです。これにより、いままでの高校で出来得なかった、より高度な、より本質的な高校教育及び社会教育が行えるものと確信しております。

（2）ブロックプラン

コンパクト・アンド・ハイクォリティー（Compact And High Quality）

校舎の配置及びブロックプランは敷地の状況からできるだけコンパクトで、しかし、各々の部分はゆとりがあり使い易く計画しました。生徒が一般的に使用するクラスルームは南面する南棟へ、特別教室は視界の開かれた北棟に配置しました。中庭に面し回廊をまわしコンパクト化に対する騒音対策とすると同時に、廊下の所々に語らいの場やコモンスペースを配置し、生徒の生活にゆとりを持たせました。校舎をコンパクトにした分だけ校庭グラウンド及び前面パーキングスペース、緑地にスペースを割くことが出来ました。南棟を４階にしたことにより、北棟の日照を助けると同時に４階屋上を有効なスペースとして活用することが出来ます。

（3）アピール・ポイント

ラーニング・センター（Learning Center）

「アーバン・インテリジェント・ハイスクール」の目玉として、１階にラーニングセンターとして、図書室、視聴覚室、ＬＬ教室、コンピュータ教室、放送室、多目的室等を設け、これを集中的にインテリジェント化することにより、多様化する情報化社会に対応出来るようにしました。中庭－多目的室－視聴覚室等を有機的に繋ぎ合わせることにより、生徒の自主的な学習活動及び先生方の研究活動に対応出来る、本来の意味のラーニング・センターとして位置付けました。このラーニング・センターが充実し、しかも地域に有効な型で開放できた時、新しい21世紀の教育の型が見えて来るのだと思います。

２．改築の経過と新校舎の概要

新校舎完成までの経過はあらまし次のとおりであった。

平成３年７月　校舎改築準備委員会（校内）設置

平成４年６月　校舎改築工事県議会承認
同　８月　校舎改築工事開始。仮設プレハブ校舎へ移転。
同　９月　校舎解体工事終了

平成５年８月　新体育館完成
同　11月　新校舎完成　17日　竣工式挙行

平成６年５月　日新館完成

新校舎の概要は県議会議事録に拠って次のとおりである。

新校舎の概要

平成４年６月定例県議会承認

県立甲府第一高等学校管理・教室棟改築工事

工費　1,146,390,000円

延べ面積　鉄筋コンクリート４階建て　5,443平方メートル

県立甲府第一高等学校特別教室棟改築工事

工費　694,730,000円

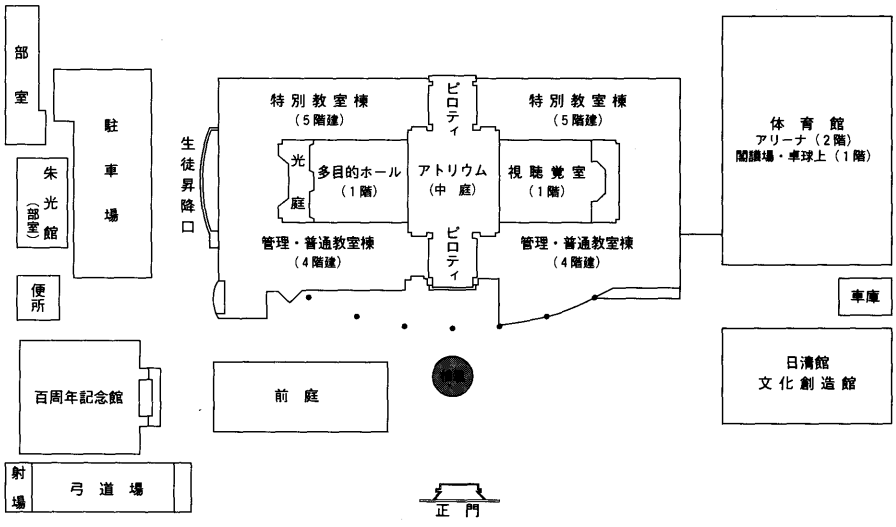
延べ面積　鉄筋コンクリート５階建て　4,208平方メートル

県立甲府第一高等学校屋内運動場改築工事

工費　556,200,000円

延べ面積　鉄筋コンクリート及び鉄骨造り２階建て　2,709平方メートル

（以上、総工費は2,397,320,000円となる。）



新校舎の配置図



解体される旧校舎





解体される校舎







新築工事



新校舎竣工式





校章の取り付け



アトリウム



日新館



体育館

第2章　学制の変遷

1．英語科の設置とその後

（1）設置の経緯

本校に英語科が設置されるに至った経過は、おゝよそ以下の様であった。

平成２年７月11日

県教委は「後期中等教育研究協議会」を開設し、生徒減少期に対応した高校教育の全面的な見直しに入った。各界から18名の委員が委嘱され、２年間かけて当面する高校教育全般の課題について審議することになった。

検討課題としては、「生徒減少期の高校の生徒収容計画」及び「県立高校の教育条件整備計画」等と並んで、「県立高校への専門学科開設」が審議項目に加えられた。背景としては、前年度の公立高校入試において、生徒減少や私学の台頭等により大量の定員割れが生じたため、公立高校の地盤沈下を危惧する世論が起こりつつあった点が考えられる。

８月２日

第２回の会合が持たれ、主として、専門学科の設置について集中審議がなされた。その際、公立高校の活性化を図る意味から、複数校の専門学科の増設が必要であるという見通しが打ち出された。

８月31日

第３回の会合が開かれ、「理数科と英語科の複数設置が妥当」との中間報告が発表され、川手千興県教育長に提出された。

理数科は「科学技術の進歩や高度情報化への対応」のため、また、英語科は「国際理解教育など国際化の拡大への対応」のため、「多くの生徒に個性に合った委員会では教育の機会を保障することは社会や時代の要請に合っている」として、地域の強い要望もあり、早急に増設の必要があると結論づけている。

10月15日

県教委は、定例の教育委員会を開き、普通高校の専門教育学科増設について、次年度から「甲府一高」に英語科を、「吉田高」に理数科を設置することに正式決定した。

決定にあたり県内を７ブロックに分けて検討し、次の基準で選定した。

①地域内の生徒数が多い（生徒の減少傾向が少ない）

②通学の便がいい（隣接ブロックからも通学できる）

③既設のブロックはできるだけ避ける

特に、甲府一高については、次のような利点が認められた。

①甲府学区の北側にあり、甲府南高とのバランスがとれる

②交通の便が良く、峡北・峡東方面など他学区からの通学が可能である

11月末

県教委は、中学卒業予定者の進路希望調査を実施して、具体的な定員策定について検討した。その結果、甲府一高の英語科は45人（１クラス）と決定された。また、吉田高の理数科は30人（１クラス）となった。

甲府一高英語科の平成２年度中学卒業予定者進路希望状況

第１回進路希望調査結果
（10月末）61人〔1.36倍〕

第２回進路希望調査結果
（１月中）70人〔1.56倍〕

平成３年度公立高校入試
（３月初）51人〔1.13倍〕

平成３年２月12日

入学志願者募集（定員45名、志願者51名、1.13倍）

３月12日

入学者選抜学力検査実施

４月８日

入学式、初めての英語科生徒入学（男子23名、女子22名、計45名）

（２）カリキュラム・教育内容等の特色

英語科設置以来、その目標、指導方針は概ね以下のように設定され、現在に至っている。

英語科の目標

①英語を理解し、英語で表現する積極的なコミュニケーション能力を養う。

②言語や文化に対する関心を深め、異文化理解・国際理解を促進する。

③難関国公立大学受験を目標とさせ、きめ細かな指導によって入試に十分対応できる学力を身につけさせるとともに、適切な進路指導を行う。

④理科系各学部の大学入試にも対応できるカリキュラムを用意し、生徒の希望に応じた指導を行う。

⑤いろいろな機会を利用し、広報活動を行い、本校英語科にふさわしい資質を持った生徒の勧誘に努める。

英語科の指導方針

①英語やその他の教科の授業、及び電子メールやインターネットの活用、姉妹校との交流を通して、外国事情を学び、国際的な視野で物事を考える力を養う。

②難関校入試に耐えうる総合的な学力を身につけさせ、国公立大学受験を目標とさせる。進路決定にあたっては、進路指導部の協力を得て、適切な指導を行う。

③英語のみならず、理科系科目の学力向上のための指導を強化する。

（３）英語科の生徒の状況・進路の状況

英語科の生徒は、国公立大学への進学志向が強く、平成５年に第１期卒業生を出して以来、定員40名のうち、およそ30名近くの生徒が国公立大学に現役合格している。また、首都圏を中心とする私立大学にも数多く合格している。

進学先は、全国の国公立大から、首都圏の私立大学まで多岐にわたっており、

また、学部・学科も文系のみでなく、理系も含めてあらゆる学科に広がっている。

発足当初より、単なる英語のみの教育にとどまらず、幅広い知識と豊かな教養をつけさせることを目標としてきたが、多方面への進学実績はその成果の現れであると言えよう。

専門の英語においては、大多数の生徒が、２学年の秋には英検２級に合格し、中には準１級に合格する者もいる。

また、勉学だけでなく、部活動、その他の課外活動においても顕著な成果をあげている。数多くの生徒がクラブ、生徒会活動に積極的に参加して、中心的な存在として活躍し、運動部のインターハイ出場、関東大会出場、文化部の全国大会出場や文芸コンクールの入賞などの成果をあげている。

このように本校英語科は、生徒・保護者や、地域の要望に応える人材の育成につとめている。入学志願者は多く、高校入試における競争倍率も常に高い。

教科	科目	標準単位	1年（平成12年度入学生）	2年（平成11年度入学生）	3年（平成10年度入学生）
国語	国語Ⅰ	4	4		
	国語Ⅱ	4		3	
	国語表現	2			
	現代文	4		2	3
	現代語	2			
	古典Ⅰ	3			2
	古典Ⅱ	3		文	
	古典講読	2			
地歴	世界史A	2	2		
	世界史B	4	2	2	3
	日本史A	2			
	日本史B	4		2 2	2
	地理A	2			
	地理B	4		2	2
公民	現代社会	4			
	倫理	2			
	政治経済	2	2		
数学	数学Ⅰ	4	4		
	数学Ⅱ	3		3	3
	数学Ⅲ	3			4 1
	数学A	2	1	2	
	数学B	2			
	数学C	2			1
理科	物理ⅠA	2			
	化学ⅠA	2	2		
	生物ⅠA	2			
	物理ⅠB	4		4	
	化学ⅠB	4	2	3理 理	
	生物ⅠB	4		3文 4	
	地学ⅠB	4			
	物理Ⅱ	2			3
	化学Ⅱ	2			3
	生物Ⅱ	2			3
	地学Ⅱ	2			
保体	体育	7~9	2	2	3
	保健	2	1	1	
芸術	音楽Ⅰ	2	2		
	美術Ⅰ	2	2		
	書道Ⅰ	2	2		
家庭	家庭一般	4	2	2	
	食物	2			
普通科目計			22	22	21

専門科目	総合英語	7~12	7		
	英語理解	6~10		4	3
	英語表現	6~10		3	2
	外国事情	4~6			4
	英語一般	2~5	1	1	
	時事英語	2~4			2
	LL演習	3~5	1	1	1
専門科目計			9	9	12
特別活動	ホームルーム	3	1	1	1
合計			32	32	34

英語科のカリキュラム

2．選抜制度の変遷・学校週５日制（土曜休日）の導入

20年間に入学者の選抜制度はめまぐるしく変化した。とくに昭和43年に初めて導入された総合選抜制度はその後次第に拡大し、高校進学率のたかまりとあいまって、本校の教育に大きな変化をもたらした。

また1970年代から進行した企業の週休２日制導入の傾向にともない、公立学校においても学校週５日制への移行が決定されて、平成４年度から土曜休日が順次拡大されるようになった。学校週５日制はやがて平成14年度から完全実施される。これにより授業時数は減少し教科内容も縮減されるが、このことも学校教育に大きな変化を迫るものとなっている。

同じ1970年代後半、全国の高校進学率は95パーセントを越え、高校の準義務教育化が進んだが、この傾向は山梨県においても同様であった。これも高校教育に変化をもたらしている要因として、一言触れておきたい。

ここでは入学者の選抜にかかわる制度の変遷と、学校週５日制などについて年表的に整理しておく。なお総合選抜制度の導入とその後の変遷については第１部第６章に詳しい。

昭和43年３月（1968）	甲府南高校と２校による入学者総合選抜制度開始
〃 50年３月（1975）	甲府第二高校（現甲府西高校）を加え３校による総合選抜開始
〃 52年３月	甲府東高校を加え４校による総合選抜開始
〃 59年３月	甲府昭和高校を加え５校による総合選抜開始
〃 60年	この年の学級数27学級
平成３年３月（1991）	英語科設置される　この年の学級数25学級
〃 ４年３月	学校５日制に移行するため毎月第２土曜日を休日とする
〃 ５年	１学年より40人学級となる
〃 ６年３月	志願者の入学学校の希望を考慮する選抜方法を導入
〃 ７年４月	第２・第４土曜日を休日とする
〃 ９年３月	甲府西高校が単位制高校への移行に伴い総合選抜制度から離脱、４校による総合選抜へ 英語科に傾斜配点方式を導入
〃 10年３月（1998）	普通科、英語科とも推薦入学制を導入



入学者発表風景

3．大学入試制度の変容・進路の状況

「共通1次試験」および
「大学入試センター試験」出願者数

（）内は対卒業生徒数

年　度	出願者数
昭和54年	245 (61)
昭和55年	146 (36)
昭和56年	185 (46)
昭和57年	144 (36)
昭和58年	155 (39)
昭和59年	194 (44)
昭和60年	174 (43)
昭和61年	122 (30)
昭和62年	147 (33)
昭和63年	124 (31)
平成元年	141 (40)
平成2年	136 (38)
平成3年	164 (42)
平成4年	156 (39)
平成5年	142 (35)
平成6年	199 (57)
平成7年	170 (47)
平成8年	152 (43)
平成9年	149 (46)
平成10年	201 (63)
平成11年	187 (58)
平成12年	187 (59)
平成13年	204 (66)

高まる高学歴志向と受験競争の過熱化のなかで、入学試験制度の改善のため国公立大学の入学試験に大学入試センターによる「共通１次試験」（国公立大学共通１次学力試験）が導入されたのは昭和54年であった。この制度は国公立大学の入学試験に共通の１次試験を課し、これに各大学独自の２次試験の結果をくわえて入学者を選抜する方式で、戦後の大学入試制度を大きく変更するものであった。概ね１月に実施される試験の時期、マークシート方式と呼ばれる試験方法などとあわせ、この制度は高校の側にも学校行事の在り方や受験指導など様々な変化をもたらすものであった。

この制度はその後、昭和62年からは全国立大学をＡ・Ｂ群に分け、２大学の受験を可能にしたり、同年受験教科目を５教科７科目から５教科５科目にするなど様々な変更を加えながら、平成２年に私立大学も参加可能な大学入試センター試験として新たに発足して現在にいたっている。

「共通１次試験」の時期の本校の同試験受験者は概ね150人前後で、卒業生の30から40パーセント程度であった。しかし「センター試験」への転換後受験生は次第に増え、ことに近年は60パーセント前後の受験率となっている。

本校が歴史的に進学をめざす者の多い高校であったことは言うまでもなく、その傾向は今も一貫して変わっていない。この間の本校の卒業生の進路において、就職者の比率は昭和56年5.7パーセント、61年10.5パーセント、平成２年5.0パーセントと５から10パーセントの率を保っていたが、平成５年以降は急速に減少して全体で10人を切る程度になっている。逆に専修学校等も含め本校の進学率は90から95パーセントを越える状況である。

なお全国的な傾向で見ると高校生の大学進学率は専修学校も含めると1970年代後半には50パーセントを越えるようになった。

高い進学率のなかで、受験競争の厳しさは共通一次試験の導入などの入試改革によっても必ずしも緩和されたわけではない。しかしながら昭和58年（1973）年生まれの第２次ベビーブームのピーク時の生徒を高校に迎えた平成元（89）年に全国の高校在学者数はピークを記録したが、その後高校生の数は急激な減少を見ることとなった。山梨県においては平成元年、県内の高校進学者数は14,301名と増大したが、その後はやはり急激な減少をつづけ、10年後の平成10年の入学者数は11,087名となった。こうした傾向はその後も続き、いわゆる少子化が社会問題とされる事態となっている。この少子化の大学進学に対する影響もまた顕著になりつつある。大学入学者の定員はこれまで増加を続けてきたが、近年は入学者が定員に満たない大学も現われ、したがってその受験においてもこれまでの受験競争と異なる様相を見せはじめている。

卒業年度	昭和56年(1981)	昭和57年	昭和58年	昭和59年	昭和60年	昭和61年	昭和62年	昭和63年	平成元年(1989)	平成２年
大学進学者(含短大)	225	254	212	230	231	232	221	171	190	240
専修学校(含予備校)	148	119	175	148	132	166	157	157	145	121
就　職 その他	29	28	49	24	38	47	26	21	24	33
卒業生数	402	401	436	402	401	445	404	349	359	394

平成３年	平成４年	平成５年	平成６年	平成７年	平成８年	平成９年	平成10年	平成11年	平成12年
229	233	187	216	230	203	234	208	231	221
151	145	142	132	115	112	72	101	77	82
19	23	20	9	9	7	9	9	7	8
399	401	349	357	354	322	315	318	315	311

４．研修旅行・対外交流・ＡＥＴ

１　研修旅行

本校の研修旅行は平成９年度まで京都・奈良を中心とした関西方面への旅行を実施してきた。年度によって多少の違いはあるものの、概ね次のようなコースをとった。

第１日　甲府一高－－－（中央・名神・東名阪経由）－－－奈良（泊）

第２日　奈良県内クラス別見学－－－京都（泊）

第３日　京都市内班別自主見学－－－京都（泊）

第４日　京都市内クラス別半日見学－－－（名神・中央経由）－－－甲府

一例として、平成４年度の第２日目のクラス別見学コースを示す。

１・４組：天理ＩＣ－－－飛鳥寺－－－石舞台－－－奈良（泊）

２・８組：針ＩＣ－－－室生寺－－－安倍文殊院－－－奈良（泊）

３組：針ＩＣ－－－長谷寺－－－大三輪神社－－－奈良（泊）

５組：針ＩＣ－－－柳生の里－－－新薬師寺－－－奈良（泊）

７組：伊賀上野ＩＣ－－－伊賀忍者屋敷－－－興福寺－－－東大寺－－（泊）

第３日目は、クラス別に、奈良の宿舎から、次のような見学地を経由して、京都市内の旅館に入った：

飛鳥村・伊賀上野市内・万福寺・三井寺・平等院・醍醐寺・慈光院・秋篠寺・浄瑠璃寺・薬師寺・唐招提寺・奈良国立博物館

また同年度の第４日クラス別自主見学の見学地は、次の通りであった。

1　　組：高山寺・天竜寺・嵐山
2　　組：清水寺・広隆寺
3　　組：竜安寺・仁和寺
4・5・8組：三千院・寂光院
6　　組：嵐山（清涼寺・二尊院・天竜寺）
7　　組：三十三間堂・東福寺・古代友禅院

→ 昼食会場 → 甲府へ

さて、平成８年度から、修学旅行における航空機の利用が可能になって以来、本県でも多くの学校において、航空機を利用して北海道・九州・沖縄、さらには韓国・中国など、海外への旅行を実施するようになった。

このような動向から、本校でも航空機を利用しての旅行が検討された。平成９年度入学生については、生徒を対象に希望する旅行地に関するアンケートを実施するとともに、教職員サイドでも費用・日程・他の学校行事との関連などが検討された。その結果、長崎県を中心とした、西・北九州への旅行が決定された。このあと臨時のＰＴＡ委員会を開いて保護者の理解を求めるとともに、コース細部についての希望も聴取した。

平成10年度に実施した本校ではじめての九州への、航空機を利用した研修旅行の日程は概ね次の通りである。

第１日　甲府 ── 羽田空港 ── 福岡空港 ──（九州・長崎道）── 平戸（泊）
第２日　平戸 ──（航路）── ハウステンボス（自主見学）── 長崎（泊）
第３日　長崎市内班別自主見学－－長崎（泊）
第４日　長崎 ── 太宰府または吉野ケ里遺跡 ── 福岡空港 ── 羽田空港 ── 甲府

長崎方面への旅行は12年度まではほぼ同一のコースで実施されることが決定されている。


九州方面への研修旅行

一方、本校では将来の海外への研修旅行を視野に入れて、平成８年度に「海外研修旅行小委員会」を設置し、様々な角度から検討を加えてきた。現在のところ、次のような問題点が指摘され、さらに検討中である。

（1）経費が国内旅行に比べ、割高になる。例えば３泊４日の九州方面への旅行が約９～10万円であるのに対し、韓国旅行では12～14万円と見込まれる。

（2）学年の規模が320人（８クラス）であり、全団を１つの航空機に乗せることができない。

（3）海外においては生徒の班別行動がほとんどできず、自主性に乏しい旅行となる。

このような結果を踏まえ、本校ではここ当分は九州方面への国内旅行を実施する予定である。なお、本校の大きな行事である強行遠足が例年10月に行われることから、実施時期は従来どおり11月が最も適当と考えられている。この時期での

実施を前提とした場合、北海道方面は気候の関係からやや難があるため、今後検討する場合、中・南九州、四国、または沖縄等が候補地となるであろう。

2　対外交流

平成３年４月に本校の英語科が発足し、その事業の一環として、海外短期研修が計画された。対象とする生徒を英語科のみとするか、普通科も含めるか、また派遣人数をどの程度とするか、また目的地をどこにするかなどで様々な議論がなされた。最終的には、（1）対象を１学年英語科及び普通科とする（2）派遣人数は20人前後とする（3）派遣時期は３月とする（4）引率教職員は２名とする、などが決定された。派遣初年度の平成４年３月には、県のアイオワ州との交流から、同州デモイン市の、フーバー高校を訪れることになった。

本校とフーバー高校は、平成12年に正式に姉妹校の協定を結んだ。

以後、フーバー高校との間では、３年を１サイクルとし、第１年目に本校からフーバー高校へ派遣、第２年目にはフーバー高校から本校へ派遣、第３年目は休止とする計画が合意された。本校がフーバー高校へ派遣しない年度には、他の国または地域へ派遣することも合わせて決定された。

平成３年度以降の派遣実績は次のとおりである。

◎印　団長

実施時期	派遣国・地域	参加生徒数	引率者氏名
平成４年３月	アメリカ(アイオワ洲)	12	◎足達輝夫・長田嘉昭
平成５年３月	アメリカ(アイオワ洲)	12	◎田中忠夫・高瀬孝人
平成６年３月	オーストラリア(クイーンズランド洲)	24	◎金子寛・桜田紀代美
平成７年３月	オーストラリア(クイーンズランド洲)	24	◎矢崎勉・保坂博文
平成８年３月	アメリカ(アイオワ洲)	24	◎高瀬孝人・保坂博文
平成９年３月	イギリス(ケント洲)	24	◎依田道彦・中込勝也
平成10年３月	カナダ(ブリティッシュコロンビア洲)	24	◎大西勉・新津　元
平成11年３月	アメリカ(アイオワ洲)	24	◎高瀬孝人・辻　泰
平成12年３月	カナダ(ブリティッシュコロンビア洲)	40	◎保坂さつき・三間恵子・高橋正文

なお、平成12年３月の派遣は、英語科１年生１クラスの、単独派遣である。

フーバー高校生の受入れは平成６年・９年・12年の３回行われた。それぞれの概要は次のとおりである。

進路別卒業者数	生徒数（男・女）	引率者宿泊先
Mr & Ms Wilkerson	７人（男子３人・女子４人）	長田嘉昭・高瀬孝人
Mr Wilkerson Ms Judy Renault	11人（男子８人・女子３人）	保坂博文・金子寛・三森美和・新津元
Mr Wilkerson Mr & Ms Renaul	16人（男子５人・女子11人）	保坂博文・新津元 数野氏宅・(保護者)

主な行事は、歓迎式典・甲府市内半日見学（県庁表敬訪問を含む）・１日見学旅行（ホストの生徒を含む）・授業及び部活参加・日本文化に関する講義・サヨナラパーティーなどである。



姉妹校の協定書を交換する両校校長（平成12年）


海外短期体験留学（アイオワ州議会事堂前にて）

３　外国人英語指導助手（ＡＥＴ）

本校では、平成１年度から、県教育委員会の教員配置による外国人英語指導助手（以下ＡＥＴと略称）を受け入れてきた。ＡＥＴは日本人英語教師と協力して、主に英語の聞く・話す技能の向上を主な目標にして英語教育にあたることになっており、本校でもその目標のもとで授業を実施してきた。

授業形態は、初期のうちは英語Ⅰ・Ⅱの教科書を使用して、１つのクラス全員に対して、週１時間、日本人英語教師とのティームティーチングが行われた。しかし英語Ⅰ・Ⅱの教科書を使用しての授業ではＡＥＴの活動が限定されてしまい、聞く・話す技能を十分高めることができない傾向があった。その後、指導要領の改訂により、新しく「オーラルコミュニケーション」という科目が設定されたことから、教材や授業方法について、様々な選択ができるようになった。また40～45人を対象としての授業では十分な効果が期待できないことから、１つのクラスを２パートに分け、奇数週はＡグループがティームティーチング・ＢグループがＬＬ、偶数週はその逆とする型がほぼ定着した。

本校でこれまでに受け入れたＡＥＴと、その期間は次のとおりである。


AETによる授業風景

勤　務　時　期	年　数	氏　　名	国籍
昭和63年８月～平成１年７月	１年	Ms Phynarete Osako	アメリカ
平成１年８月～　２年７月	１年	Ms Katie Delaney	イギリス
２年８月～　４年７月	２年	Ms Tamara Boorstein	アメリカ
４年８月～　７年７月	３年	Mr Timothy Cooper	アメリカ
７年８月～　９年７月	２年	Mr Jay Williams	アメリカ
９年８月～　10年７月	１年	Mr Howard Wall	カナダ
10年８月～　12年７月	２年	Ms Anita Miletic	オーストラリア
12年７月～		Mr Benjamin Aston	アイルランド

第3章　生徒会活動20年の歩みと近況

初めに

紙数と特に時間の関係から、20年に亙っての分析については極めて不十分なものとなり、専らここ数年の近況についての整理・報告の様相とならざるを得なかった。唯、たかだか近年20年といえども、意外なほど正確で網羅した資料が少なく、作業的にはすぐにまとめ上げられるほどのものではなかった。部活動の記録については、かなり根気強く各種資料を追ったり、照らし合わせたりして、鋭意正確さに努めたつもりであるが、猶且つ間違いや遺漏があることを恐れる。

ここ20年の生徒会活動の分析については、時代環境や生徒の変容、教育課程（教育制度）や高校・大学入試の改革とも密接に絡まって総合的な分析を必要とする。又、21世紀を迎え、完全週五日制や新指導要領の実施を見通した現在進行中の高校改革の行方とも深く関わっている。このため、こうした流れと成果が定着した所で、さらなる評価が必要となろう。

1．生徒会活動の変化と課題

「初めに」で記したように、年を追った細かな分析については省略するが、基本的な流れでは本校の生徒会活動や組織において大きな変化はない。

平成元年度、センター試験の１月実施が早まった所で、学園祭（「一高祭」）の６月実施が定着したこと。更に平成６年、週５日制月１回実施が始まったこと（翌年度より２・４週土曜日、月２回）、平成８年、本県で全国高校総合体育大会が実施されたことなどが相俟って「一高祭」日程が３日から２日になったこと。或いは、春季文化部発表会の性格を持っていた４月当初の「新入生歓迎オリエンテーション」の規模が、全校生徒参加の行事から紹介のクラブ生徒と１年生のみとなったことなど、日程の変更や規模的な縮小は見られるが、「新入生応援練習」などを含む主要行事の根本的な変化・削減にまでは至っていない（但し、恒例となっていた生徒会本部役員宿泊研修会は無くなっている）。

生徒会関係では行事の精選は既に終わった感が強く、寧ろ新指導要領で謳われる「総合的学習の時間」の在り方や特別活動重視の流れから言って逆に規模の拡大と充実した企画を打ち出す時期かとも考えている。50年殆ど変わらない生徒自治会規程の大幅な改正と並んでここ１・２年の課題でもあろう。

なお、生徒会本部の組織で言うと、本校の独自のスタイルであった一年を前期（１月～６月）と後期（７月～12月）に分けて生徒会本部役員（時期はずれるが、付随的にＨＲ正副理事・庶務・会計等も含む）を選出した遣り方は、平成９年度から年度は跨るが７月～６月まで１年間通してのスタイルに改められた。負担は大きくなるが、腰を据えた運営が可能となる所に長所を見い出せよう。

又、生徒会本部にとって何と言っても最大の行事は「一高祭」の運営であるが、委員会組織である「一高祭実行委員会」の非主体化・非活発化に伴って、平成10年度より生徒会本部直属の性格を持つ「一高祭実行企画部」が生まれた。「応援委員会」と「応援団」の関係で捉えられる組織関係であるが、自主自律に相応しい本校生徒会の改革だと思っている。

次に課題についてだが、先に触れた全般的なものを除き、日常の生徒会活動の課題についてのみ若干触れたい。

第一にＨＲ自治会と委員会組織の活発化が指摘出来よう。伝統と人材に支えられていくら生徒自治会本部と直属（応援団吹奏楽部・応援団）とが頑張った所で限界がある。全校規模での生徒自治の活性化を促すにはやはりＨＲや委員会の日常的な取り組みが不可欠である。例えば、規程上、監査部の活動は本校自治の骨格を成すものであるが、その形骸化した現状は憂うべきと言える。

又、部顧問の選出や部間の負担軽重の問題、日常の指導時間や文化部の活動場所の確保、行き届いた部室の管理・部室周辺の清掃、円滑な外部コーチとの連絡調整等、部活動が抱える問題も様々である。更に、クラス正副理事等のリーダーの研修と育成、生徒会本部役員の研修と他校との交流が不足している問題も見逃せない　〔かっては甲府総合選抜５校間で定期的に本部役員の交流会（ＦＯＷＳＳＥ…総合選抜交流会）が催されたり、本校が呼び掛け結成された30年以上の歴史を持った甲府地区高等学校自治協議会も存在していたのであるが、今は消滅状態にある〕。

いずれにしてもこれらの対策は職員の共通理解と意思統一を図りながら、学校の全教育活動のバランスや方向とも関わって、粘り強く長期的に考えねばならないだろう。「ゆとりの中での生きる力の育成」が唱えられている以上、それに与かる生徒会活動の重要性は何人も否定出来ないはずであり、文武両道に秀でてこそ本校の伝統は生き続け発展することが約束されるのである。

2．今日の生徒会活動の状況

（1）生徒会指導目標・具体的指導内容

指導目標（平成12年度）

① 生徒の生徒会活動への参加を促し、活動の効率化と活性化を図る。

② 生徒の自治能力を育てる指導を目指す。

《「自由」とは単なる放任と異なり、厳しい自己責任が伴う》

具体的指導内容（平成12年度）

［生徒に対して］

① 生徒会活動への積極的な参加を求める。

② 活発な討議を組織し、安易な決定はさせない。

③ 決定した事項は実行を求める。

④ 自分達の行動に自分達で責任を負うことを求める。

［教師間で］

① 生徒会活動が学習活動の自信や人格的な形成にもきちんと結び付くような指導過程と内容を検討し合う。

② 指導の前によく討議し、協同して生徒に対応・指導できるようにする。

（2）本校生徒自治会の組織

1　生徒会本部所属生徒

①平成12年４月新年度開始時(1～3年生徒数約990名中､6%所属)

3年 14名〔普通科13名（男子６・女子７）・英語科１名（男子１・女子０）〕

2年 17名〔普通科９名（男子４・女子５）・英語科８名（男子０・女子８）〕

1年 28名〔普通科25名（男子７・女子18）・英語科３名（男子０・女子３）〕

計 59名〔普通科47名（男子17・女子30）・英語科12名（男子１・女子11）〕

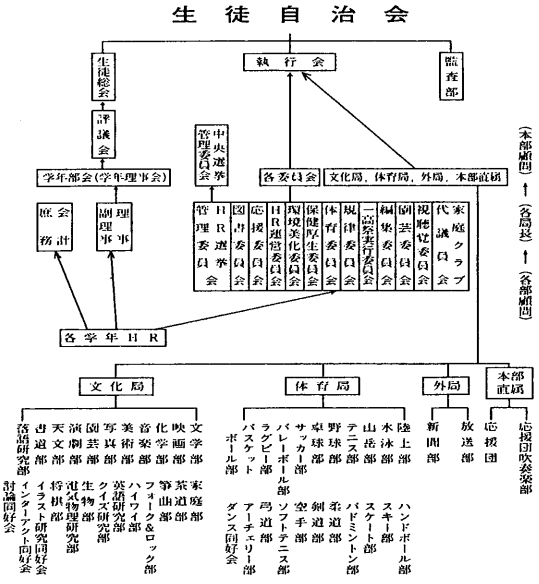
②平成12年７月新体制発足時(1･2年生徒数約670名中､6%所属)

2年 16名〔普通科８名（男子３・女子５）・英語科８名（男子０・女子８）〕

1年 25名〔普通科22名（男子６・女子16）・英語科３名（男子０・女子３）〕

計 41名〔普通科30名（男子９・女子21）・英語科11名（男子０･女子11）〕

2　生徒自治会組織図(平成12年度生徒手帳より転載)と執行部任務分担(所属人数はH12･9)



執行部組織（生徒会本部役員--正副会長・各局長）

※平成９年度７月から実質的には５局１部体制。又、平成９年度から自治会執行部・HR役員共に１年任期となる。

会　　長〈１〉（2年男・普通科）
副　会　長〈２〉（2年女・英語科　1年男・普通科）
総合事務局〈６〉（局長2年女・英語科）
＊生徒会誌『日新鐘』
＊（クラブ活動）延長届・公欠届・借用書
総合企画局〈８〉（局長2年女・普通科）
＊生徒総会・応援練習・総合体育大会・（一高祭）
自治局〈７〉（局長2年女・英語科）
＊部長会議・部活動・部名簿・一斉委員会
＊壮行会・新入生歓迎会　（＊印刷一般）
渉外情報局〈９〉（局長2年女・英語科）
＊他校交流・渉外関係
＊福祉講話・「強行遠足新聞」
＊書記一般
会計局〈５〉（局長2年女・英語科）
＊会計一般
一高祭実行企画部〈８　H13･1/25現在〉（部長2年男・普通科）

（3）今日の主な生徒会活動の事項・内容

以下列記する主な生徒会活動の事項・内容は、福祉活動の一部を除き全校（少なくとも学年）参加規模の行事に限定したが、実際の生徒会係・生徒自治会本部の活動は通年的であり、その忙しさは恒常化している。

加えて、ここ五年来、「強行遠足新聞」の発行が生徒会係に委ねられ、昨年度より生徒自治会本部生徒も年４回発行の中、１回は携わるようになったり、国際交

流が活発化するに伴い、外国視察団等の来訪〔例えば、昨年（平成11年）12月中国四川省教育友好視察団。本年（平成12年）４月（姉妹提携校）米国フーバー高校教員生徒一行。同９月ＣＩＳ（ロシア等）高校教員学校視察団〕も目立つが、生徒自治会本部、応援団吹奏楽部、茶道部、箏曲部、各運動部等々、生徒会組織を通しての歓迎は「一高の顔」としての役割を果たしたりしている。

この種の臨時的なものを除いても、次年度の学園祭に向けての構想・企画、対面式、応援練習、新入生歓迎会、壮行会、総体・野球応援、文化局・体育局部長会議、評議会、生徒総会等、様々な生徒会諸行事を遂行するためには相当な下準備を必要とする。日常の活動について詳述出来ないのが残念であるが、活発で真摯な議論が連日北館３階生徒会室で繰り広げられていることは高く評価されて良い。


球技大会

以上を踏まえ、主な生徒会行事として「新入生歓迎会」「新入生応援練習」「学園祭（一高祭）」「福祉・ボランティア活動」の４点についてその概要を記したい。

なお、７月上旬（１日目終日・２日目放課後）と３月中旬（２日間終日）の年２回実施のバスケット・バレー・卓球・サッカー・ソフトボール・バドミントン等を種目とする球技大会も生徒全員参加の大きな行事であるが、実質的には体育委員会に企画運営が委ねられている。


新入生歓迎会

1　新入生歓迎会

春季文化部発表会の性格を多分に残す、新入生歓迎各部紹介のオリエンテーションである。文化局の発表や文化局・体育局各部の紹介を通して、生徒会活動への理解を深め、積極的な参加と「一高生」の一員としての自覚を促すことに狙いがある。

数年前までは、全校生徒が参加して行われていたが、現在は新入生全員と発表・紹介の部員のみで各部紹介のオリエンテーションの要素を強くしている。

昨年まで準備に時間がかかるので４月下旬に行われていたが、オリエンテーションの役割を果たすには時期的にもっと早めた方が良いとの意見を酌んで、今年度４月13日（木）実施となった。生徒会本部生徒の誘導から始まり、５・６校時、休憩を挟み約２時間に亙って本校体育館で催される。

今年度発表及び寸劇・競技実演を含む紹介の部は、（紹介順に）生徒会本部・一実企画部・箏曲部・音楽部・弓道部・アーチェリー部・演劇部・柔道部・フォーク＆ロック部・落語研究部・園芸部・ラグビー部・応援団吹奏楽部等に及び、それぞれ２～６分の持ち時間の中で一所懸命、新入生にアピールしている。発表以外の部も幕間を巧みに利用して紹介に努めている。新入生にとっては入学後の緊張がやや解ける楽しい一時のようで、例年、部の内容もよく分かったとの好評を得ている。

生徒会本部にとっては、自治局を中心に前年度２月中旬頃から準備に入らねばならず大変な負担ではあるが、来る学園祭の準備体操として位置付けることが可能で、魅力的なプログラムや緻密な時間予定表の作成・各部との連絡調整・音響装置の扱い等、実践的な企画運営力育成の好機でもある。

２　新入生応援練習

「一高生」の言わば、通過儀礼としての側面を持つ本校の伝統行事であり、最早「恐怖と畏怖の応援練習」は「強行遠足」と並ぶ一高のアイデンティティーとも言えよう。一方でその集団主義の姿勢に対して、民主主義や個性尊重とは相容れないとの批判はあるが、①校歌・応援歌・応援の型を集中的に指導することに依って、短期間に習得させる。②中学生的気分を払拭し、剛毅な甲府一高生としての自覚を持たせる。③先輩の指導を通して、生徒自治の見本を示す等を目的とする時、その効果は絶大である。

例年、４月中旬（今年度17日～19日）に３日間に亙り放課後２時間行われる。既に３月の新入生オリエンテーション時に、校歌・応援歌録音のカセットテープを入学予定者全員に貸与し、覚えるように指示した上での本番の練習である。応援団員を中心に応援委員も含めた演技指導、生徒会本部員のサポート、応援団吹奏楽部の校歌・応援歌の吹奏、保健委員の救護等、整然とした企画運営に沿って自主的に実施され、時間毎・日毎の急速な練習成果は感動的である。

勿論、実施に当たって係としては、①指導する生徒には、自らの服装を正さすなど要項の遵守事項を守らせる。②暴力は絶対禁止させ（馬乗りなども含む）、無意味な肉体的苦痛を強いることがないよう注意する。③指導の内容を、１年生に分かりやすく具体的に示し、納得させる。④練習は合理的に行わせ、時間を厳守させる。⑤事前に体調の悪い生徒や持病がある生徒を調査し、列外で指導する。⑥救護は保健委員会を中心に行い、体育館器具置場を一時的な救護場所とする。⑦３日間毎日反省会（生徒会・応援団顧問、１学年主任合同）を開き、指導の改善を行わせる等を留意事項として細心の注意を払っている。

最終日、応援団長・生徒会長の慰労の挨拶や団員・応援委員・本部員の拍手に送られての退場場面では感極まって泣き出す生徒も散見され、先輩と一体化する中で「一高生」としての自覚が確実に促されるのである。

３「一高祭」

言うまでもなく生徒会最大の行事であり、準備期間も含めると、多くの時間は「一高祭」のために割かれているのが現状である。

「一高祭」の準備は既に終了直後の全生徒・職員アンケートに始まり、アンケートの集計、結果の分析、次年度「一高祭」に向けての基本方針や中身の検討、一実企画部の募集、ＨＲ自治会からの意見収集、本部の基本方針に対するＨＲ自治会での検討、組織の編成、人員配置（生徒会本部員・一実企画部員の割振り）、評議会の開催、再度のＨＲ自治会での検討、総会直前の評議会、後期総会での「一高祭」大綱の検討・承認等、前段階的な準備期間として約９ヶ月、新入生歓迎会・応援練習・総体等で中断されるが、具体的・作業的な準備期間として約３ヶ月、ほぼ一年を通して計画的に進められなければならない大事業である。

限られた紙数の中で、このような「一高祭」の全貌を明らかにするのは至難であり、ここではその骨幹をなす「一高祭」の意義と目的、平成元年度以降の「一高祭」の大まかな内容紹介にとどめたい。意義と目的を明らかにすることは、「一高祭」に臨む我々生徒会係の根本精神を披瀝する意味で重要であり、又、平成元

年度以降の「一高祭」の流れを通して、生徒会活動が如何に時代の特質と関わりを持たざるを得ないかが確認出来る意味で有意と考えたためでもある。

1）第53回（平成12年度）「一高祭」の意義（目的）

① 総合的な学習の場として位置付けが可能で、生徒の教育的諸活動の成果を発表し、高校生活の良き思い出を形成する重要な場である。〈学園祭そのものの今日的意義〉

② 本校の教育目標「自主自律に徹する」を具現化したり、教室での単なる教科授業では窺えない生徒の諸側面を知る絶好の機会となる。〈特に本校が重点とする学園祭の意義〉

③ 進級して間もないクラス内の団結を図り、全校生徒で協力し感動的なものにする。併せて、教師・生徒間の交流も促す。〈6月上旬実施の教育的意義〉

④ 体育的な行事が多い中で、本校生の文化的な面を伸ばす総合的な機会であり、文化部最大の成果発表の場である。〈本校における学園祭の根源的意義〉

⑤ 伝統校としての本校への関心に応えたり、地域に開かれた高校として地域住民や保護者・他校生徒の理解を得る機会とする。〈公開や来客との交流の意義〉

2）同　指導重点

① 学園祭を通して、個々の生徒が人間的に成長出来るよう指導すると共に、総合的な学習の機会としても位置付ける（「企画・準備・発表・作製・運営・片付け」等あらゆる時間・場を利用する）。

② 自主性の育成を図りながらも、「時間を守る」「環境を整備する」「自分勝手な行動を無くす」などの規律ある学園祭を追求する。

③ クラスが集団的に取り組むことを重視する（「クラス企画」・「クラス合唱」の充実）。

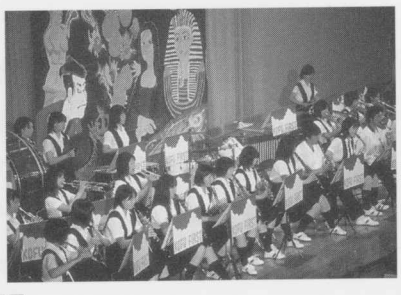
④ 全校生徒の協力と団結を確認する場ともする（今年も「巨大壁画」を製作）。

⑤ 文化的色彩の濃いものとする（2日間共、種目的には昨年とほぼ同内容で、クラスと文化部が中心となる）。

⑥ 限られた期間であっても苦労して取り組むことを重視する。

⑦ 今年度は創立120周年を記念した企画・内容にも留意させる（「120周年記念事業協賛委員会」記念行事部門とも連携）。





一高祭風景

3）平成元年度以降、本校12年間の学園祭の概要

※ここ20年間、昭和63年度までは基本的に9月実施であった。
※網かけ(▒)→公開日　①→一日目、②→二日目、③→三日目

実施年度	実施時期〈日数〉	主な実施内容			備　考
平成元(第42回)	6/17·18(日)·19 〈3日間〉	①私の主張·文化局発表 展示·一高ｸｲｽﾞ等	②仮装 オリジナルショップ等	③運動会 クラス合唱	
平成2(第43回)	6/16·17(日)·18 〈3日間〉	①私の主張·文化局発表 展示·一高ｸｲｽﾞ等	②仮装 オリジナルショップ等	③クラス合唱 運動会·フォークダンス	
平成3(第44回)	9/9·10·11 〈3日間〉	①クラス合唱 運動会	②私の主張·文化局発表 展示等	③仮装·一高クイズ フォークダンス	
平成4(第45回)	6/14(日)·15·16 〈3日間〉	①私の主張·文化局発表 展示等	②運動会	③クラス合唱· 一高クイズ選手権·応援団紹介式	校舎改築に伴う時期変更
平成5(第46回)	6/19·20(日)·21 〈3日間〉	①文化講演会 文化局等発表·展示	②運動会	③クラス合唱·仮装 展示等	
平成6(第47回)	6/12(日)·13·14 〈3日間〉	①文化講演会 文化局等発表·展示	②運動会	③ｸﾗｽ発表(合唱or仮装) 展示等	新校舎 第2土曜休業
平成7(第48回)	6/11(日)·12·13 〈3日間〉	①文化講演会 文化局等発表·展示	②運動会	③クラス合唱 展示等	第2·4土曜休業実施
平成8(第49回)	6/8(土)·9(日) 〈2日間〉	①運動会	②クラス合唱 文化局等発表·展示		本県ｲﾝﾀｰﾊｲ会場
平成9(第50回)	6/13(金)·14(土) 〈2日間〉	①運動会	②クラス合唱 文化局等発表·展示「ありがとう祭り」		
平成10(第51回)	6/14(日)·15(月) 〈2日間〉	①文化局等発表·展示	②クラス合唱 「ありがとう祭り」		
平成11(第52回)	6/13(日)·14(月) 〈2日間〉	①文化局等発表·展示	②クラス合唱 「ありがとう祭り」		
平成12(第53回)	6/11(日)·12(月) 〈2日間〉	①文化局等発表·展示	②クラス合唱 「ありがとう祭り」		

（4）福祉・ボランティア活動

近年ますます重要視されている活動であるが、生徒会は一つの窓口に過ぎず、本来全校挙げて取り組むべきものであろう。この項に関しては、平成12年度の主な内容と実施時期をそれぞれ箇条書きにして示すに留めたい。

① 福祉・ボランティアについての啓蒙活動 ……年間
② バザー（６月１１日学園祭）・募金活動（９月「愛の絵葉書」11月「赤い羽根共同募金」）
③ 特別養護老人ホーム「尚古園」入所者の招待（６月11日）と訪問（12月26日）
④ 身障者とのサッカー観戦交流会 ……９月24日
⑤ 聴覚障害者との交流ボーリング大会……11月18日
⑥ 福祉講演会（１・２年生対象…講演と感想文集作成）……３月９日
⑦ 音楽部を中心とする峡西病院「リスタート病棟」慰問……３月15日

3　生徒会部活動について

（1）生徒会部活動の近況について

筆者は先に、たまたま平成12年度東京同窓会便り「日新鐘」のコラム欄「母校だより」に「生徒会活動の近況」と題して次の一文をしたためた。本校部活動のまとめとしてこの一文を転載したい。

文武両道と言う一高の伝統を守るべく、生徒は日々部活動に勤しんでおります。

本校の今年度部在籍率は、（生徒会本部員除く）文化局（男24%・女49%）、体育局（男66%・女47%）となり、重複者を含んでいるとは言え、設置部数（文化局25・体育局27）の多さと合わせ、県下でも有数の活動を誇っています。

一高の部活動の全体的な特徴は、統制の取れた自主的な練習が出来ることではないでしょうか。グラウンドや体育館で野球・サッカー・ラグビー・バレー・バスケット・バドミントンなどの練習風景を垣間見るだけでもその思いを強くします。それは又、先輩から後輩へと脈々と受け継がれてきた伝統の成せる業とも言い得ましょう。

次に幾つかの特徴的なクラブを紹介します。


野球大会の応援

先ず、昨夏の、全国高校選手権県大会で日川、峡北を破り、強豪市川に２点差で惜敗して、古豪復活を印象付けた野球部ですが、部員数も40名を越え、夏の大会に向けて燃えています。又、ハンドボール部女子ですが、総体では３位を勝ち取り、久々の関東大会出場の快挙を成し遂げました。剣道部、柔道部、空手部、弓道部と言った日本的なものと硬式・軟式テニス、アーチェリーと言った西洋的なものとが程よく混在して成果を上げているのも伝統と進取の気性に富む一高ならではの特徴と言えます。地味ながら、陸上や水泳、卓球、山岳などの活躍も光っています。

さて、文化部においても健闘しています。

先ず、昨年も県吹奏楽コンクールで金賞を獲得し、西関東吹奏楽コンクールに出場した応援団吹奏楽部。近隣の中学生にとって「一高のブラバン」への憧れは強く、今年も20名もの新入生が入部しています。

書道部・放送部・演劇部・写真部・化学部等も今年は大いに期待されています。特に書道部は８月の静岡県での全国高校総合文化祭への出場が約束されていて日々精進しています。

更に、今年も高校選手権団体戦準優勝の将棋部。そして馥郁とした文化の香りを放ち続ける美術・音楽・書道・箏曲・茶道・新聞・文学部等、伝統性の強い部の存在も忘れる訳には行きません。

最後になりましたが、生徒会本部と直属の応援団吹奏楽部・応援団の活躍ほど一高の生徒会活動を象徴するものはないでしょう。本部役員の自主性と吹奏楽部・応援団の統制の見事さは高い評価を得ており、120周年同窓会では、応援団の演技披露に熱い拍手が送られました。

今年も伝統と同窓会に支えられて本校の部活動は意気軒昂と言った所です。

2000(平成12)年5月29日

（2）創立101周年から120周年に至る主な部活動の記録

主に山梨県高等学校体育連盟発行「高体連会誌第24号～42号」、同文化連盟発行「高文連会誌第１号～19号」に拠ったが、本校「年報第１号(1981.４～1982.３)～１５号(1995.４～1996.３)」「冊子版平成八年度年報～平成十一年度年報」、生徒自治会誌『日新鐘』（第15号～33号）・「やまなし体協」創立70周年記念特別号(平成12年4月発行) 等からも参考にして補った。

なお、体育局関係では、原則として、県高校総合体育大会団体３位以内、個人１位の記録を掲載したが、注目すべき大会については適宜補った。

文化局関係においても基本的に同じであるが、県高校芸術文化祭に関しては、団体個人を問わず、優秀賞以上の記録を掲載している。部所属が不明か、所属外の生徒の場合は、部名を省略した。

「◇」は体育局関係の大会を、「◆」は文化局関係の大会を示す。2000（平成12）年度の記録に関しては、平成13年１月10日までの記録に基づく。

1981（昭和56）年度

◇〈第33回県高校総合体育大会（5/14～16)　総合順位男子10位　女子20位〉
　○（S55 12/18･19)スケート部（女子）　フィギュア　団体　１位
　○ハンドボール部（男子）２位
　○庭球部（男子）１位　　個人（ダブルス）　村松・末木　１位
◆〈県高校総合体育大会参加競写会（5/14～16)〉
　○写真部　　第２位
◆〈第21回山梨県吹奏楽コンクール（8/23)〉　A部門　金賞
◆〈第２回県高校芸術文化祭（11/11～18)〉
　○美術部　　飯野泰子　芸術文化祭賞

1982（昭和57）年度

◇〈第34回県高校総合体育大会（5/13～15)　総合順位男子９位　女子26位〉
　○ハンドボール部（男子）３位
　○庭球部（男子）３位
　○登山部（男子）２位
　○庭球部（女子）２位　　個人（シングルス）　望月真紀　１位
◇〈昭和57年度全国高校総合体育大会庭球山梨県予選（5/30 6/5･6)〉
　○女子団体１位　　個人（シングルス）　望月真紀　１位
◇〈昭和57年度全国高校総合体育大会弓道山梨県予選兼第24回室井旗争奪弓道大会（6/12)〉
　○女子団体１位
◆〈第６回全国高校囲碁選手権大会予選山梨県大会（6/20)〉女子個人　石部志保　優勝
◆〈全国高校将棋選手権大会　山梨県大会（7/18)〉　将棋同好会　男子団体優勝
◆〈第22回山梨県吹奏楽コンクール（8/22)〉　A部門　金賞
◆〈山梨県高校放送コンテスト（8/22)〉
　○放送部《総合》３位
◆〈第３回県高校芸術文化祭（11月)〉
　○吹奏楽部　　芸術文化祭賞
　○美術部　　今村功仁子　芸術文化祭賞
　　《シンボルマーク》　　松井李恵　優秀賞
　　《ポスター》　　柿塚恵子　最優秀賞　　西山りつ巳　優秀賞

1983（昭和58）年度

◇〈第35回県高校総合体育大会（5/19～21)　総合順位男子１１位　女子23位〉
　○（S57 12/20･21)スケート部（女子）　フィギュア　団体　２位

○水泳部　3位　　男子200m自由形　堀　勝章　1位
　　男子400m個人メドレー　清水直紀　1位（県高校新）
　　男子800mリレー　1位
　　女子200m自由形　中込好美　1位
○ハンドボール部（男子）1位
◇〈昭和58年度全国高校総合体育大会弓道山梨県予選兼第25回室井旗争奪弓道大会（6/18)〉
○女子個人　島田美穂　1位
◆〈第23回山梨県吹奏楽コンクール（8/20)〉　A部門　金賞
◆〈第4回県高校芸術文化祭（11月)〉
○美術部　牧野奈緒　芸術文化祭賞　《ポスター》　田中敬子　最優秀賞
○演劇部　第3回山梨県大会（11/5・6）優秀賞　＊演技賞　荻野聡子
○書道部　高田千賀　芸術文化祭賞
○箏曲部　芸術文化祭賞
◆〈第7回山梨県吹奏楽アンサンブルコンテスト（11/19)〉
＊打楽器五重奏のための「サーカス」演奏の本校チーム、関東大会（S59　1/29神奈川県)で関東地区代表権を得て、全日本アンサンブルコンテスト（3/20高松市）に出場
◆〈全国高校将棋選手権大会　山梨県大会〉　将棋同好会　男子団体優勝

1984（昭和59）年度
◇〈第36回県高校総合体育大会（5/17～19）　総合順位男子8位　女子15位〉
○陸上競技部　　男子3000mSC　古屋友章　1位（大会新）
○水泳部（男子）3位　　男子100m平泳ぎ　三谷　到　1位
　　男子100mバタフライ　清水直紀　1位
　　男子200mバタフライ　清水直紀　1位
　　男子400mリレー　1位
　　女子400m自由形　中込好美
○ハンドボール部（男子）2位
○庭球部（女子）2位　　個人（シングルス）　山本由美子　1位
　　個人（ダブルス）　山本・浅沼　1位
◇〈昭和59年度全国高校総合体育大会庭球山梨県予選（6/2・3・17)〉
女子個人（シングルス）　山本由美子　1位
女子個人（ダブルス）　山本・浅沼　1位
◇〈昭和59年度全国高校総合体育大会弓道山梨県予選兼第26回室井旗争奪弓道大会（6/16)〉
○女子団体1位
◆〈県高校総合体育大会参加競写会（5/17～19)〉
○写真部　第2位
◆〈第5回県高校芸術文化祭（11月)〉
○吹奏楽部　芸術文化祭賞
○美術部　土屋夏子　芸術文化祭賞
◆〈第24回山梨県吹奏楽コンクール（8/17～19)〉　A部門　金賞
◆〈山梨県下高校放送コンテスト（8/26)〉
○放送部《総合》3位

1985（昭和60）年度
◇〈第37回県高校総合体育大会（5/16～18）　総合順位男子8位　女子16位〉
○陸上競技部　　男子200m　中島秀文　1位
○弓道部（男子）2位
○庭球部（男子）2位　個人（シングルス）　望月弘昭　1位
○アーチェリー部（男子）1位　　個人　長田　道也　1位
○アーチェリー部（女子）1位　　個人　中込佐知子　1位
◇〈第1回県高校女子駅伝競走大会（S61 2/2）〉　1位
◇〈昭和60年度全国高校総合体育大会弓道山梨県予選兼第27回室井旗争奪弓道大会（6/15)〉
○女子個人　小宮山かおり　1位

◆〈県高校総合体育大会参加競写会（5/16～19）〉
○写真部　第１位
◆〈第25回山梨県吹奏楽コンクール〉　Ａ部門　金賞
◆〈第６回県高校芸術文化祭（11月）〉
ポスター入選者　有賀香里（美術部）　優秀賞
◆〈ＮＨＫ杯全国高校放送コンテスト山梨地区予選（6月）〉
〔ラジオ自由〕　１位
◆〈第２回国際理解と国際協力のための高校生の主張大会〉
（高校ユネスコクラブ部門）３年　牧野奈緒　「言葉を越えるもの」　最優秀賞
＊本県代表として全国大会に参加し、次の賞を得た。
第32回「国際理解・国際協力のための高校生の主張コンクール」大会
（11/16 東京）　第４位　日本国際連合協会長賞

1986（昭和61）年度
◇〈第38回県高校総合体育大会（5/15～17）　総合順位男子11位　女子５位〉
○陸上競技部　男子400ｍＨ　数野　公正　１位
（女子）１位　男子三段跳　平山　茂　１位
女子100ｍ　塚田美佐子　１位
女子3000ｍ　鈴木　和美　１位（大会新）
女子100ｍＨ　市川　理映　１位（大会新）
女子４×100ｍＲ　奥山・熊沢・市川・塚田１位（大会新）
女子走幅跳　市川　理映　１位
やり投　河野多津美　１位
○水泳部　男子100ｍ背泳ぎ　長沢　俊仁　１位
男子200ｍ背泳ぎ　長沢　俊仁　１位
男子100ｍバタフライ　奥石圭太郎　１位（大会新）
男子200ｍバタフライ　奥石圭太郎　１位
女子400ｍ個人メドレー　田村　まり　１位
○弓道部（女子）２位　個人　小宮山かおり　１位
○庭球部（男子）２位
○庭球部（女子）３位　個人（シングルス）　小林真佐美　１位
○アーチェリー部（男子）１位　個人　石水和彦　１位
○アーチェリー部（女子）１位　個人　中込恵子　１位
◇〈昭和61年度全国高校総合体育大会庭球山梨県予選（5/31 6/14･15･21）〉
○男子団体１位　個人（シングルス）　樋口　勇人　１位
○女子団体１位　個人（シングルス）　小林真佐美　１位
〈第19回全国高校アーチェリー選手権大会（7/26･27沖縄県宜野湾市）〉
○女子団体（中込佐知子・中込恵子・石川　歩）　２位
女子個人　中込恵子　１位
◇〈第２回県高校女子駅伝競走大会（S62 2/1）〉　１位
◆〈県高校総合体育大会参加競写会（5/15～17）〉
○写真部　第１位
◆〈第26回山梨県吹奏楽コンクール〉　Ａ部門　金賞
◆〈第７回県高校芸術文化祭（11月）〉
○美術部　保延さゆり　芸術文化祭賞
○書道部　森沢つるえ　芸術文化祭賞
○箏曲部　芸術文化祭賞

1987（昭和62）年度
◇〈第39回県高校総合体育大会（5/14～16）　総合順位男子７位　女子４位〉
○（S61 12/18･19）スケート部（女子）　フィギュア　団体　１位
フィギュア　個人　市川裕子　１位

○陸上競技部　　女子3000m　鈴木和美　1位（県高校新）
（女子）1位　　女子100mH　市川理映　1位
女子4×100mR　奥山・市川・宮沢・塚田　1位
女子走幅跳　　市川理映　1位
○軟式庭球部（女子）3位
○水泳部　男子100m背泳ぎ　　長沢　俊仁　1位
男子100mバタフライ　輿石圭太郎　1位（大会新）
男子200mバタフライ　輿石圭太郎　1位（大会新）
○庭球部（男子）1位　　個人（シングルス）　樋口勇人　1位
個人（ダブルス）　　神田・樋口　1位
○庭球部（女子）3位
○アーチェリー部（男子）1位　　個人　石水和彦　1位
○アーチェリー部（女子）1位　　個人　中込恵子　1位
◇〈昭和62年度全国高校総合体育大会庭球山梨県予選（5/30･31　6/6）〉
○男子団体1位　　個人（ダブルス）　樋口・神田　1位
◇〈第20回全国高校アーチェリー選手権大会（7/25･26京都府）〉
○女子団体（中込恵子・石川　歩・松永智春）　5位
女子個人　中込恵子　3位　　石川　歩　4位
◇〈昭和62年度全国高校総合体育大会　水泳（8/17～20函館市）〉
男子100mバタフライ　輿石圭太郎　7位（県新記録）
◇〈第3回県高校女子駅伝競走大会（S63 2/7）〉　1位
◆〈第8回県高校芸術文化祭（11月）〉
○美術部　山田容子　　芸術文化祭賞
《ポスター》　石川浩之　優秀賞

1988（昭和63）年度
◇〈第40回県高校総合体育大会（5/19～21）　総合順位男子13位　女子6位〉
○（S62 12/17･18）スケート部（女子）　フィギュア　団体　2位
フィギュア　個人　市川裕子　1位
○陸上競技部　　男子三段跳　小沢　一隆　1位
（女子）1位　女子100m　奥山　忍　1位
女子200m　長田　麻希　1位（県高校新）
女子400m　塚田美佐子　1位（大会新）
女子800m　高畑美智子　1位
女子3000m　高畑美智子　1位
女子4×100mR　奥山・宮沢・長田・塚田　1位
○ハンドボール部（男子）3位
○庭球部（男子）1位　　個人（シングルス）　馬場　章博　1位
個人（ダブルス）　　馬場・鈴木　1位
○アーチェリー部（男子）1位　　個人　吉田　賢　1位
○アーチェリー部（女子）1位　　個人　中込恵子　1位
◇〈昭和63年度全国高校総合体育大会庭球山梨県予選（5/28･29　6/4）〉
個人（シングルス）　馬場章博　1位　　（ダブルス）　馬場・鈴木　1位
◇　〈第9回関東高校アーチェリー選手権大会（6/5東京）〉
男子個人　吉田　賢　1位　　女子個人　中込恵子　1位
◇〈第21回全国高校アーチェリー選手権大会（7/26･27北海道旭川市）〉
○男子団体（吉田　賢・村松太一・中村久彦・小田切秀夫）　5位
男子個人　吉田　賢　1位
◇〈第24回ソウルオリンピック（10月 韓国）〉　女子個人　中込恵子　52位
◇〈第7回関東高校アーチェリー選抜大会（12/5千葉県）〉
男子個人　吉田　賢　2位　　女子個人　中込恵子　2位
◆〈県高校総合体育大会参加競写会（5/19～21）〉
○写真部　　第3位

◆〈第９回県高校芸術文化祭（11月)〉
○美術部　七沢秀一郎　芸術文化祭賞
《ポスター》　秋山友紀　優秀賞

補記

この年は、本校のみならず、本県にとっても記念すべき年として長く記憶されるであろう。即ち、本校アーチェリー部、中込恵子のソウルオリンピック出場である。このことに関わって、本県アーチェリーの普及に献身的な役割を果たして来た本校アーチェリー部顧問兼県アーチェリー部委員長、吉成　謙教諭が高体連会誌第３１号に次の一文をしたためている。アーチェリーにかける吉成教諭の熱意をも汲み取っていただきたい。なお、本誌（172頁）に、中込（現姓恒吉）恵子が一文を寄稿しているので併せてお読み願いたい。

「一年を振り返って」

アーチェリー部　委員長　　吉成　謙

今年は、アーチェリー部にとって忘れることのできない年となりました。４年に一度の世界のスポーツの祭典である第24回ソウルオリンピックアーチェリー競技に本県より中込恵子（甲府一）が参加したことです。高校生のオリンピック代表は、本県にとっても初の快挙であり、日本のアーチェリー界にとっても始めてのことでした。この様な選手が、まだ歴史の浅いアーチェリー部から育ったことを誇りに思うと同時に、応援して下さった皆様に心より感謝申し上げます。かいじ国体以降アーチェリーの火を消さないようにと努力してきましたが、昨年も満足のいく成果が残せ、そして今年、オリンピック出場という夢のような結果が産まれ、今までの苦労が一度にどこかへ行ってしまった思いがします。

今年一年を振り返ってみると、まず６月の関東大会で吉田（甲府一）中込（甲府一）がそろって優勝という幸先の良いスタートをきることができました。続いて夏の全国選手権大会でも吉田（甲府一）が高校チャンピオンになり、団体も男子が初の５位入賞を成し遂げてくれました。又、10月の全日本選手権大会にも吉田（甲府一）中込（甲府一）が出場し、11月に本県で開催された関東選抜大会でも２人がそろって準優勝しました。この様に関東、全国に、山梨県のアーチェリー強しという印象を今年も残すことができたと思います。一年を通じてほとんど休む暇もなく毎日、緑ヶ丘の洋弓場で練習をしている生徒の姿を見る限り、今後も生徒たちは我々の期待を裏切ることなく活躍してくれるものと信じています。そして生徒たちにとって、男子では高校チャンピオンの吉田、女子では、オリンピック代表の中込が、仲間から出たことによって、自分達もできるという自信と励みになったことと思います。第２の吉田、中込が登場してくる日もそう遠くはない様な気がします。

国体が終っての２年間、アーチェリー部にとっては、予想以上の良い成果が現れた訳ですが、ここでもう一度、初心に帰り、新たな目標を定め、来年、１からスタートする気持ちでがんばっていきたいと思います。そして今後共、アーチェ

リーの火を細く長く燃やし続けていきたいと考えています。そのためにも皆様方のご支援、ご協力を心よりお願いいたします。

1989（平成１）年度

◇〈第41回県高校総合体育大会（5/18～20）　総合順位男子８位　女子６位〉

○（S63 12/16･17）スケート部（女子）　フィギュア　団体　２位
フィギュア　個人　市川裕子　１位

○陸上競技部　女子100m　原崎映理子　１位（大会タイ）
（女子）３位　女子800m　松田　早苗　１位（大会新）
女子3000m　松田　早苗　１位
女子４×100mR　岡田・宮沢・大久保・原崎　１位

○サッカー部３位

○弓道部（女子）２位

○庭球部（男子）１位

○アーチェリー部（男子）１位　個人　吉田　賢　１位

○アーチェリー部（女子）１位　個人　保坂朋美　１位

◇〈平成１年度全国高校総合体育大会テニス山梨県予選（5/27･28 6/3）〉

○男子団体１位

◇〈第10回関東高校アーチェリー選手権大会（6/3横浜市)〉

○男子団体（長田雅也・村松太一・吉田　賢）３位
女子個人　小林由美　２位

◆〈全国高校将棋選手権大会　山梨県大会〉

男子団体　優勝　個人　杉野忠夫　優勝

◆〈第10回県高校芸術文化祭（11月）〉

○美術部　全国ポスター部門（第14回全国高校総文祭）　秋山友紀　最優秀賞

1990（平成２）年度

◇〈第42回県高校総合体育大会（5/10～12）　総合順位男子12位　女子９位〉

○陸上競技部　女子100m　原崎映理子　１位
女子200m　原崎映理子　１位
女子４×100mR　山口・志村・長田・原崎　１位
女子走幅跳　市川　理映　１位

○水泳部　女子100m平泳ぎ　小林　夏　１位
女子200m平泳ぎ　小林　夏　１位

○テニス部（男子）３位　個人（シングルス）　雨宮史雄　１位
※「庭球部」より名称変更　個人（ダブルス）　若尾・金丸　１位

○アーチェリー部（男子）１位　個人　後藤　真　１位

○アーチェリー部（女子）１位　個人　堀江カンナ　１位（大会新）

◇〈第11回関東高校アーチェリー選手権大会（6/10栃木県)〉

男子個人　後藤　真　２位

◆〈第37回ＮＨＫ杯全国高校放送コンテスト山梨地区予選（6月)〉

○放送部《朗読部門》　坂本美樹　１位

◆〈全国高校将棋選手権大会　山梨県大会〉

男子団体　優勝　個人　杉野忠夫　優勝

◆〈第11回県高校芸術文化祭（11月）〉

○放送部《朗読部門》　坂本美樹　芸術文化祭賞

＊次年度（平成３年)、本県代表として全国大会に参加し、次の賞を得た。
第15回全国高校総合文化祭（8/1～4香川県）　奨励賞

1991（平成３）年度

◇〈第43回県高校総合体育大会（5/9～11）　総合順位男子７位　女子４位〉

○（H2 12/17･18）スケート部（女子）　フィギュア　団体　１位

○水泳部（女子）３位　女子100m自由形　木口ゆう子　１位
女子100m平泳ぎ　小林　夏　１位
女子200m平泳ぎ　小林　夏　１位
○弓道部（男子）２位
○弓道部（女子）１位　個人　有賀由紀美　１位
○テニス部（男子）１位　個人（ダブルス）　金丸・若尾　１位
○アーチェリー部（男子）１位
○アーチェリー部（女子）１位　個人　山本陽子　１位
◇〈平成３年度全国高校総合体育大会テニス山梨県予選（6/1・2・15・22)〉
個人（シングルス）　若尾和英　１位　（ダブルス）　種田・望月　１位
◇〈第10回関東高校アーチェリー選抜大会（12/1栃木県)〉
女子個人　清水みどり　３位
◆〈第38回ＮＨＫ杯全国高校放送コンテスト山梨地区予選〉
○放送部《朗読部門》　坂本美樹　１位　《番組部門》〔ラジオ自由〕　１位
◆〈山梨県高校放送コンテスト〉
○放送部《総合》２位　《ラジオ番組部門》　１位
◆〈第12回県高校芸術文化祭（11月)〉
○美術部　桜井陽子　芸術文化祭賞

1992（平成４）年度
◇〈第44回県高校総合体育大会（5/14～16）　総合順位男子14位　女子27位〉
○（H3 12/17・18）スケート部（女子）　フィギュア　団体　２位
○水泳部　男子50m自由形　横内聡一郎　１位
女子100m自由形　木口ゆう子　１位
女子200m自由形　木口ゆう子　１位
○テニス部（男子）２位　個人（ダブルス）　望月・木村　１位
○アーチェリー部（男子）１位　個人　馬場　聖和　１位
○アーチェリー部（女子）１位　個人　加賀美牧子　１位
◇〈平成４年度全国高校総合体育大会テニス山梨県予選（6/13・14・20)〉
○男子団体１位　個人（シングルス）　望月直樹　１位
◆〈第39回ＮＨＫ杯全国高校放送コンテスト山梨地区予選〉
○放送部《番組部門》〔ラジオ自由〕　１位
◆〈山梨県下高校放送コンテスト兼第30回全国高校放送コンクール県予選〉
○放送部《番組部門》〔テレビ〕　１位
◆〈第13回県高校芸術文化祭（11月）〉
○放送部《朗読部門》　寺田幸代　芸術文化祭賞
○演劇部　芸術文化祭賞

1993（平成５）年度
◇〈第45回県高校総合体育大会（5/13～15）　総合順位男子19位　女子16位〉
○（H4 12/17・18）スケート部（女子）　フィギュア　団体　２位
○水泳部　女子100m自由形　木口ゆう子　１位
○テニス部（男子）１位　個人（シングルス）　川野泰司　１位
○アーチェリー部（男子）１位　個人　須藤一貴　１位
○アーチェリー部（女子）１位　個人　岡部雪絵　１位
◇〈平成５年度全国高校総合体育大会テニス山梨県予選（6/5・6・19・20)〉
○男子団体１位　個人（シングルス）　村松和彦　１位
◇〈第14回関東高校アーチェリー選手権大会（6/13群馬県）〉
○女子団体（岡部雪絵・加賀美牧子・赤池政江）３位
◇〈第26回全国高校アーチェリー選手権大会（8/1～4栃木県)〉
○女子団体（赤池政江・加賀美牧子・岡部雪絵）４位
◆〈第17回全国高校囲碁選手権大会山梨県予選（6/27)〉
個人男子　久保寺正人　優勝

◆〈山梨県下高校放送コンテスト兼第31回全国高校放送コンクール県予選〉
○放送部《朗読部門》　山村里奈　1位
◆〈第14回県高校芸術文化祭（11月）〉
［家庭部門］　県高校家庭クラブ第41回研究発表大会　橋本　結　優秀賞

1994（平成6）年度
◇〈第46回県高校総合体育大会（5/12～14）　総合順位男子25位　女子27位〉
○水泳部　男子50m自由形　平島　純　1位（大会新）
男子100m自由形　平島　純　1位（大会新）
○アーチェリー部（男子）1位　個人　長田武生　1位
○アーチェリー部（女子）1位　個人　斎藤美由希　1位
◆〈第41回ＮＨＫ杯全国高校放送コンテスト山梨地区予選〉
○放送部《朗読部門》　山村里奈　1位
◆〈山梨県下高校放送コンテスト兼第32回全国高校放送コンクール県予選〉
○放送部《アナウンス部門》　早川麻美　1位
◆〈第15回県高校芸術文化祭（11月）〉
○放送部《アナウンス部門》　早川麻美　芸術文化祭賞
○演劇部　芸術文化祭賞
○箏曲部　芸術文化祭賞
［囲碁部門］　個人　久保寺正人　芸術文化祭賞

1995（平成7）年度
◇〈第47回県高校総合体育大会（5/11～13）　総合順位男子15位　女子24位〉
○水泳部　男子100m自由形　平島　純　1位
男子200mバタフライ　平島　純　1位
女子200m自由形　坂本千穂　1位
○テニス部（男子）3位
○アーチェリー部（男子）1位　個人　堀端　真　1位
○アーチェリー部（女子）1位　個人　長田すみれ　1位
◇〈第16回関東高校アーチェリー選手権大会（6/11東京）〉
男子個人　堀端　真　2位
◆〈第42回ＮＨＫ杯全国高校放送コンテスト山梨地区予選〉
○放送部《アナウンス部門》　早川麻美　1位
◆〈第16回県高校芸術文化祭（11月）〉
○美術部　内田敦子　芸術文化祭賞
○演劇部　優秀賞
［文学部門］《小説》近藤ちはる　優秀賞　《戯曲》工藤さやか　芸術文化祭賞
《俳句》小澤香奈　優秀賞　《随筆》青柳裕子・飯島貴美子　優秀賞
［囲碁部門］　個人　久保寺正人　優秀賞
◆〈第19回全国高校囲碁選手権大会山梨県予選（5/14）〉
個人男子　久保寺正人　優勝

1996（平成8）年度
◇〈第48回県高校総合体育大会（5/9～11）　総合順位男子9位　女子23位〉
○水泳部　女子200m自由形　坂本　千穂　1位
女子50mバタフライ　千野祐美子　1位
○ハンドボール部（男子）3位
○テニス部（男子）2位
○アーチェリー部（男子）1位　個人　笠井　貴行　1位
○アーチェリー部（女子）1位　個人　長田すみれ　1位
◆〈第43回ＮＨＫ杯全国高校放送コンテスト山梨地区予選〉
○放送部《朗読部門》　倉崎衣子　1位
◆〈山梨県下高校放送コンテスト兼第34回全国放送コンクール県予選〉

○放送部《総合》１位　《アナウンス部門》　村松絵美　１位
◆〈第17回県高校芸術文化祭（11月)〉
○放送部《アナウンス部門》　村松絵美　芸術文化祭賞
○書道部　牧野果奈　優秀賞
○箏曲部　優秀賞
［文学部門］《小説》天野さやか　優秀賞

1997（平成９）年度
◇〈第49回県高校総合体育大会（５/８～10）　総合順位男子15位　女子13位〉
○テニス部（男子）２位
○テニス部（女子）３位
○アーチェリー部（男子）１位　個人　天野　聡　１位
○アーチェリー部（女子）１位　個人　岩間理紗　１位
◇〈平成９年度全国高校総合体育大会テニス山梨県予選（６/14･15･21)〉
個人（シングルス）　山下　毅　１位
◆〈第18回県高校芸術文化祭（11月）〉
○書道部　牧野果奈　芸術文化祭賞
○箏曲部　優秀賞
［社会科学部門］　歴史研究同好会　優秀賞

1998（平成10）年度
◇〈第50回県高校総合体育大会（５/14～16）　総合順位男子10位　女子14位〉
○ソフトテニス部（男子）３位
○水泳部　女子50ｍバタフライ　千野祐美子　１位
○ハンドボール部（男子）３位
○テニス部（男子）２位
○アーチェリー部（男子）１位　個人　伊藤隆寛　１位
○アーチェリー部（女子）１位　個人　平賀広美　１位
◆〈第38回山梨県吹奏楽コンクール（８/３）〉　Ａ部門　金賞
◆〈第19回県高校芸術文化祭（11月）〉
○書道部　清水麻理　芸術文化祭賞
○箏曲部　芸術文化祭賞

1999（平成11）年度
◇〈第51回県高校総合体育大会（５/13～15）　総合順位男子18位　女子27位〉
○テニス部（男子）３位
○アーチェリー部（男子）１位　個人　花輪　秀剛　１位
○アーチェリー部（女子）１位　個人　望月恵梨子　１位
◇〈第20回関東高校アーチェリー選手権大会（６/12群馬県)〉
女子個人　望月恵梨子　２位
◆〈全国高校将棋選手権大会　山梨県大会（４/29)〉　男子団体　準優勝
◆〈第39回山梨県吹奏楽コンクール（８/６〉　Ａ部門　金賞
◆〈第20回県高校芸術文化祭（11月)〉
○書道部　清水麻理　芸術文化祭賞　千野亜希子　優秀賞
○箏曲部　芸術文化祭賞
［文学部門］《小説》駒井詩織　芸術文化祭賞　平井百子　優秀賞
＊第14回全国高校文芸コンクール【小説部門】において、平井百子『ヒマワリ』が優良賞を受賞した。

2000（平成12）年度
◇〈第52回県高校総合体育大会（５/10～12）　総合順位男子21位　女子17位〉
○登山部（女子）３位
○ハンドボール部（女子）３位
○テニス部（男子）３位

○アーチェリー部（男子）１位　　個人　花輪秀剛　１位
○アーチェリー部（女子）１位　　個人　神田美佳　１位
◇〈平成12年度全国高校総合体育大会ソフトテニス山梨県予選（6/18)〉
○男子団体１位
◇〈第18回全国高校アーチェリー選抜大会（3/26～28静岡県)〉
男子個人　花輪秀剛　２位
◇〈第33回全国高校アーチェリー選手権大会（8/9～12岐阜県高山市)〉
男子個人　花輪秀剛　３位　　※花輪は準々決勝で日本高校新記録を樹立
◆〈第21回県高校芸術文化祭（11月)〉
○吹奏楽部　　優秀賞
○放送部《朗読部門》　石田真美　優秀賞
○化学部　　最優秀賞（山梨科学アカデミー賞）
○書道部　　石橋由梨・古谷美和・西山真実　芸術文化祭賞　　河口容子　優秀賞
○茶道部　　優秀賞
○箏曲部　　優秀賞
○将棋部　　武田大輝　準優勝



新聞　昭和63年（1988年）6月27日　月曜日

18歳 射止めた「夢の座」

若さで重圧はねのける

高校生五輪代表 中込さん

やった中込さん、県史上初の高校生五輪選手誕生だ。アーチェリーのソウル五輪最終選考会最終日の二十六日、静岡・つま恋で甲府一高三年の中込恵子選手（18）が五輪代表の座を射止めた。「負けてもいいから思い切りやろう」と心に決めていた」と言う中込さん。若さ、思い切りの良さでプレッシャーをはねのけた。これで県内からの五輪代表選手はラグビーシング、ボクシング、自転車、カヌーそれぞれ一人ずつに続き九人となり、史上最多となった。元五輪選手で県体育協会専務理事の飯室芳男さんは「山梨の選手の活躍が刺激となり、相乗効果を生んだ。九人の選手には自分を見失わず、ソウルで力を発揮してきてもらいたい」と激励している。

選考会最終の20射。三射を始めたのは客席中一年の時、姉・佐知子さんの影響だった。持ち前の集中力に磨きがかかり、甲府一高に進学後、一年生で関東大会、全国高校大会を制し注目を浴びた。地元の敷島町で開かれたかいじ国体では少年女子3位。

佐知子さん（当時甲府一高三年）が優勝を飾り、姉妹で団体優勝に導いた、前年は全日本選手権5位と着々と力をつけて迎えた五輪選考会だった。

「初めは五輪なんて全く意識していなかった」と言う一次選考会の8位から初日は3位、二日目には2位と急浮上。最終日の最終射は、プレッシャーに強いはずなのにガタガタ震えた。

「最後の矢が的に刺さった瞬間、四日間の長い試合の緊張が解けた」と涙をぬぐった。

吉成監督は「最後はソウルを意識したようだ。息の抜けない大試合でよく頑張った」と目を細めた。

これまで海外遠征もしたことがない中込選手は「ロス五輪の開会式をテレビで見て感動した。今度、あの中に自分が入っていくなんて信じられない。世界のレベルについていけるよう頑張る」と意欲を語る。

甲府一高の望月敏広校長へは、吉成監督から電話で代表決定の知らせが入った。望月校長は「わが校はもとより、県内の高校生の士気を高める快挙と思う。中込さんの頑張りは意義のあるものだ。今度は本番にベストの状態で臨めるよう、学校側としても支援していきたい」と話した。

飯室専務理事は「かいじ国体の遺産が完善し、高校生など新しい力が育ってきた。職場、学校の選手を取り巻く環境、山梨の雰囲気が盛り上がってつかんだ快挙」と喜んでいる。

出掛け、この日は仕事で晴れ姿を見られなかった八巻敬治郎アーチェリー協会理事長は「身と頑張った」と自分のことのような喜びよう。「世界のレベルは高いが、持てる力を出し切ってほしい」とソウルへの励ましの言葉を贈った。

3位と大健闘、ソウル五輪代表に決定し、喜びの中込恵子選手
＝静岡・掛川市のつま恋特設射場で

中込の五輪代表決定を報じる記事
1988（昭和63）年6月27日　「山梨日日新聞」より

第４章　強行遠足

この20年間も伝統の強行遠足はますますさかんとなって続いている。

この間の大きな出来事をあげれば、平成２年、第65回となるはずの強行遠足が折からの台風のため中止を余義なくされたこと、平成４年から北海道の北見北斗高校との交流が始まったことなどであろう。コースは平成３年に女子の出発地がそれまでの高根東小学校から須玉小学校に変更され、距離も数キロメートル延長された他は大きな変化はない。

一方、強行遠足に対する社会の注目は増し、マスコミ等の取材もしばしば行われて、その有名度はますます高まっている。

第70回を迎えた平成８年には、これを記念して強行遠足記念誌「歩け、心のかぎり」も刊行された。

１．20年間の変遷（1981年～2000年）

第56回（昭和56年・1981年）10月６日～７日実施

男子：終点小諸（101km）制限時間21時間30分　参加609人　小諸到着394人

女子：高根東小学校から小海（41.5km）制限時間８時間　参加564人　小海到着535人

佐久往還20周年記念事業として、記念誌を発行した。

臼田警察署の指導により、男子の歩行については全員夜光反射付のタスキを使用した。

走る仲間のスポーツ・マガジン「ランナーズ」の記者が同行取材し、生徒と一緒に小諸まで完全歩行した。

距離測定を正確に行うために、係の教師延べ８人が数回に分けて測定した。

事前指導の充実と安全歩行の徹底を図るため、事前指導係を新設した。（職員の配置希望調査が復活）

野辺山本部前が舗装され、シジミ汁を作るのに薪の使用ができなくなりプロパンガスバーナーを購入した。

第57回(昭和57年・1982年）10月６日～７日実施

男子：終点小諸（101km）制限時間21時間30分　参加599人　小諸到着415人

女子：終点小海（41.5km）制限時間　８時間　参加574人　小海到着543人

８月の台風により国鉄小海線が普通になったが、国鉄の努力により予定を大幅に縮めて開通し、強行遠足実施に事なきを得た。

朝日テレビが「モーニングショー」で本校の強行遠足の状況を全国に放映した。



野辺山検印所

第58回(昭和58年・1983年）10月５日～６日実施

男子：終点小諸（101km）制限時間21時間30分　参加602人　小諸到着414人

女子：終点小海（41.5km）制限時間　８時間　参加594人　小海到着533人

臼田警察署の好意により、一般ドライバーに対する強行遠足歩行者への安全運転呼びかけ用の垂れ幕掲揚を本年より実施した。

ＰＴＡ協力者との全職員による合同反省会を本年より開催。

第59回(昭和59年・1984年) 10月４日～５日実施

男子：終点小諸（101km）制限時間21時間30分　参加610人　小諸到着342人

女子：終点小海（41.5km）制限時間　８時間　参加581人　小海到着538人

女子コース一部変更、松原湖～小海間（141号線新道→旧道へ）距離不変

小諸コース設定20周年記念行事として講演会開催「平沢弥一郎：足の裏からみた人生」ＰＴＡ研修会を兼ねる。また、「生徒体験記文集」発刊

第60回(昭和60年・1985年) 10月２日～３日実施

男子：終点小諸（101.5km）制限時間21時間30分　参加584人　小諸到着391人

女子：終点小海（41.5km）制限時間　８時間　参加564人　小海到着535人

男子コース一部変更、松原湖～小海間（141号線新道→旧道へ）距離不変。

女子コース一部変更、高根東小～長沢間、距離不変。出発式男女合同で実施。

60回強行遠足を記念して、以下のことが計画実施された。

（１）小諸市長出発式に出席

（２）60回記念誌刊行（強行遠足要覧）

（３）記念式典において功労者に感謝状贈呈

（４）小諸・小海到着者に記念文字入りのメダル授与

（５）創立105周年と合わせて記念品（文鎮）の制作頒布

（６）強行遠足記念像の建立（須藤貘氏作品）記念像銘文「君よ走れ、新たなる歴史を創る道程」

第61回(昭和61年・1986年) 11月４日～５日実施

男子：終点小諸（101.7km）制限時間21時間30分　参加546人　小諸到着281人

女子：終点小海（41.5km）制限時間　８時間　参加509人　小海到着487人

かいじ国体のため11月４～５日実施。相当な気温低下が予想されたので、高地（清里・野辺山・市場）付近の気温調査を試みるも、実施当日は暖かく、好条件に恵まれた。

市場～海ノ口間の歩道の不整備がひどく、生徒有志・教師による清掃隊が出動し空き缶回収や雑草除去を行った。

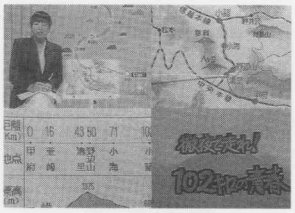
第62回(昭和62年・1987年) 10月７日～８日実施

男子：終点小諸（102km）制限時間21時間30分　参加539人　小諸到着295人

女子：終点小海（41.5km）制限時間　８時間　参加505人　小海到着446人

緊急連絡用としてポケットベルを全線巡視車に携行する。

研数学館の記者が同行取材する。



TBSテレビ「ギミアブレイク」で放映された強行遠足

第63回(昭和63年・1988年) 10月６日～７日実施

男子：終点小諸（102km）制限時間21時間30分　参加541人　小諸到着272人

女子：終点小海（41.5km）制限時間　８時間　参加543人　小海到着497人

雨天のため初めて１日順延された。そのため、ＪＲ小海線の増結・増発ができず女子の輸送については、貸切バスを急遽チャーターした。

女子の出発時刻を１時間遅らせ、また最終制限時刻も１時間遅らせた。

「月刊高校教育」（学事出版）・「キャリアガイダンス」（リクルート社）に掲載

第64回平成元年・1989年）９月27日～28日実施

男子：終点小諸（102km）制限時間21時間30分　参加560人　小諸到着292人

女子：終点小海（41.5km）制限時間　８時間　参加580人　小海到着516人

大学入試センター試験が早まったために、９月の最終週に実施。

「ギミアブレイク」ＴＢＳテレビ・「青春スクランブル」ＮＨＫで取り上げられ、全国ネットで放映される。

平成２年（平成２年・1990年）台風18号のため中止

創立110周年記念式典県民文化ホールにて挙行。強行遠足功労者に記念品・感謝状を贈呈する。また、臼田のお婆ちゃんこと、依田トミ子さんから本校生徒に、「コリアーズエンサイクロペディア」全24巻が寄贈された。

第65回(平成３年・1991年）10月２日～３日実施

男子：終点小諸（103.6km）制限時間21時間30分　参加541人　小諸到着257人

女子：終点小海（46km）制限時間　８時間10分　参加544人　小海到着318人

コース一部変更（若神子～三軒屋間）女子の出発地を須玉小学校に変える。また、出発時刻を10分繰り上げ午前６時30分とし、制限時間を８時間10分とした。

従来の「箕輪新町」「長沢」検印所を廃止し、新たに「津金」検印所を設置した。

第66回(平成４年・1992年）10月13日～14日実施

男子：終点小諸（103.6km）制限時間21時間30分　参加521人　小諸到着220人

女子：終点小海（46km）制限時間　８時間40分　参加517人　小海到着281人

校舎の改築工事がはじまる。

北見北斗高校との交流が始まる。代表生徒男女各２名がそれぞれの高校の強行遠足に参加した。

本校と北見北斗高校との強行遠足交流は、両校が共に長い歴史を誇る強行遠足を実施していたことから、平成４年から始まった。この前年、北見北斗高校校長、斉藤静之氏が発案、本校の廣瀬重雄校長に呼びかけて翌年に具体化した。１年おきに相互に生徒が訪問、参加し、３年目は休むという形で交流が続いている。

交流が行なわれるようになった経緯は強行遠足70回記念誌「歩け、心のかぎり」に詳しい。



北見北斗高校の強行遠足に参加した本校生徒

女子制限時間を30分延長した。

女子終点小海でコンピューターによる記録処理を始めた。

第67回(平成５年・1993年）10月６日～７日実施

男子：終点小諸（103.6km）制限時間21時間30分　参加495人　小諸到着237人

女子：終点小海（46km）制限時間　８時間40分　参加504人　小海到着360人

校舎改築竣工式

オーストラリアからの女子留学生参加。

校長車等に携帯電話を使用する。

第68回(平成６年・1994年）10月４日～５日実施

男子：終点小諸（103.6km）制限時間21時間30分　参加467人　小諸到着197人

女子：終点小海（46km）制限時間　８時間40分　参加497人　小海到着243人

出発当日午前中まで雨模様、決行したが途中ほとんど雨に降られず無事終了。

ＴＢＳテレビから取材の申し入れがあったが北海道東北沖地震発生のため中止。

第69回(平成７年・1995年）10月３日～４日実施

男子：終点小諸（103.3km）制限時間21時間30分　参加456人　小諸到着148人

女子：終点小海（45.8km）制限時間　８時間40分　参加472人　小海到着335人

創立115周年記念式典において、強行遠足関係代表者に感謝状贈呈。永年救護検印所等でお世話になっている皆様に学校長が出向いて感謝状を贈呈した。

北見北斗高校から代表生徒男女各２名が参加。(男子４位５位、女子、２位３位)

係が、ウォーキングメーターで全コースを測定した。

第70回(平成８年・1996年）10月１日～２日実施

男子：終点小諸（103.3km）制限時間21時間30分　参加452人　小諸到着124人

女子：終点小海（45.8km）制限時間　８時間40分　参加464人　小海到着291人



強行遠足に参加した
北見北斗高校の生徒

台風20・21号の接近により、前日まで大雨、当日は雨が上がり無事終了。

全職員・生徒に心肺蘇生法講習会を実施。

ＪＲ東日本小海線営業所と覚え書きを交わす。(本校独自の団体乗車券を廃止、学生団体特別契約乗車票を使用)

小諸市長の人事異動により、小諸到着者上位30名に送られていた色紙の廃止。

必要なものは自ら背負っていくという行事の本旨に戻すため、小諸到着者に無料で提供されていたパン（えびす屋）・牛乳（小諸市役所）・リンゴ（小松農園）を丁重にお断りする。

北海道北見北斗高校の強行遠足に本校の生徒男女２名参加。(女子２名３位)

マイクロバス購入、強行遠足の準備・有事の際の利用が可能になる。

名物であるシジミ汁を30年以上作り続けて下さった丸山良雄氏ご死去。

第70回強行遠足記念誌「歩け、心のかぎり」発行

第71回(平成９年・1997年）10月１日～２日実施

男子：終点小諸（105km）制限時間21時間50分　参加456人　小諸到着164人

女子：終点小海（47.4km）制限時間　９時間00分　参加452人　小海到着285人

男女コース一部変更、津金～三軒屋間、大門ダム上を通過していたが、落石により通行禁止となる。津金救護検印所～海岸寺～南清里浅川地区～三軒屋とコースを変えた。その結果男女とも1.6kmの延長となる。制限時間も20分延長した。

海ノ口～松原湖間は、一部歩道が無く非常に危険である。「強行遠足実施中、安全運転に御協力下さい」の垂れ幕を準備し対応した。

下水道を整備するための工事がコース上で多く行われはじめた。

小諸救護検印所協力者（保護者７名）から合図灯５本を寄贈していただく。

第72回(平成10年・1998年）10月６日～７日実施

男子：終点小諸（105km）制限時間21時間50分　参加452人　小諸到着156人

女子：終点小海（47.4km）制限時間　９時間00分　参加470人　小海到着304人

北見北斗高校から代表生徒男女各２名が参加、男子12位･女子４位５位の成績

「永六輔の小海線ロマン紀行」（山梨放送テレビ）に強行遠足の映像をのせる。

第73回(平成11年・1999年) 10月５日～６日実施

男子：終点小諸（105.3km）制限時間21時間50分　参加468人　小諸到着174人

女子：終点小海（47.4km）制限時間　９時間00分　参加495人　小海到着324人

男子コース一部変更、韮崎～須玉間、桐の木橋付近歩道が無く危険なため、141号線バイパスに変更、そのため300ｍの延長

ＪＲ小海線団体乗車切符として、「業務連絡書」を使用。

男子の参加率（470名中欠席者６名）過去最高98.7%

第74回(平成12年・2000年) 10月３日～４日実施

男子：終点小諸（105.3km）制限時間21時間50分　参加468人　小諸到着162人

女子：終点小海（47.4km）制限時間　９時間00分　参加493人　小海到着353人

創立120周年、強行遠足関係者（永年救護検印所等でお世話になっている方）に感謝状を贈呈する。

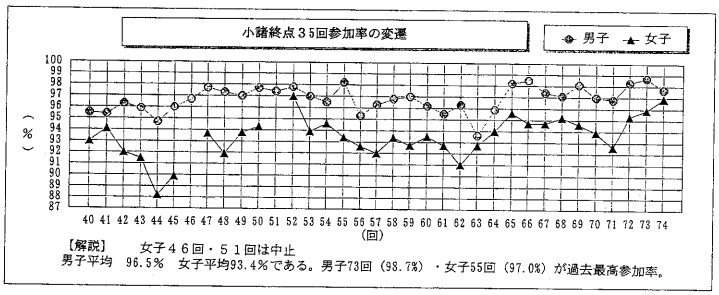
女子の参加率（509人中欠席者16名）96.9%歴代２位

北海道北見北斗高校の生徒男女各２名が参加、男子８位・14位、女子４位・８位と健闘した。

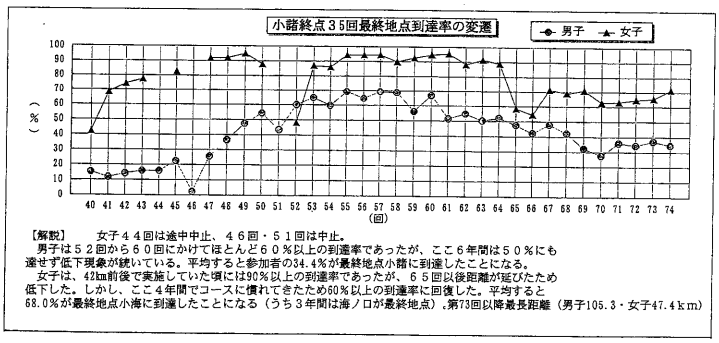
記録ビデオの作成（株アドブレーン社）

ＰＴＡ保健体育専門委員会で心肺蘇生法の講習会を実施した。（委員対象）

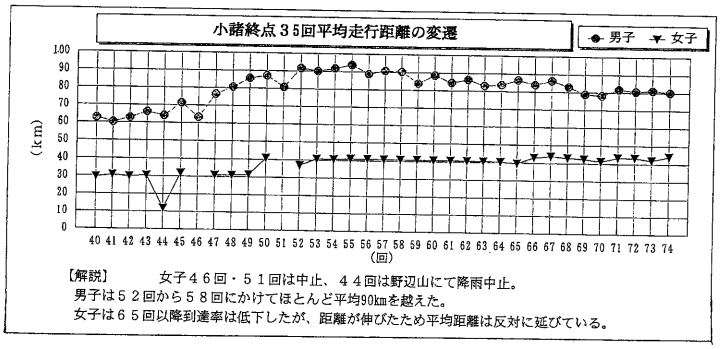
三岡検印所提供者（柏木宇三郎氏）から鶴と亀の置物をいただく。



【解説】　女子４６回・５１回は中止
男子平均　95.5%　女子平均93.4%である。男子73回（98.7%）・女子55回（97.0%）が過去最高参加率。



【解説】　女子４４回は途中中止、４６回・５１回は中止。
男子は５２回から６０回にかけてほとんど６０%以上の到達率であったが、ここ６年間は５０%にも達せず低下現象が続いている。平均すると参加者の34.4%が最終地点小諸に到達したことになる。
女子は、42km前後で実施していた頃には90%以上の到達率であったが、６５回以後距離が延びため低下した。しかし、ここ４年間でコースに慣れてきたため60%以上の到達率に回復した。平均すると58.0%が最終地点小海に到達したことになる（うち３年間は海ノ口が最終地点）。第73回以降最長距離（男子105.3・女子47.4km）



【解説】　女子４６回・５１回は中止、４４回は野辺山にて降雨中止。
男子は５２回から５８回にかけてほとんど平均90kmを越えた。
女子は６５回以降到達率は低下したが、距離が伸びたため平均距離は反対に延びている。

2．2000年第74回強行遠足救護検印所の点描



創立120周年を迎えた2000年10月３日、男子生徒492名は、青空の下午後２時10分に元気よく小諸を目指した。翌日、朝６時10分辺りがうっすらと明るくなり始める頃、女子518名も元気よく小海を目指した。

不安・緊張・興奮、出発時に身震いを覚えた者も多くいるだろう、そんな生徒を温かく、時には厳しく迎えてくれる救護検印所の様子を綴ってみた。

○若神子救護検印所

甲府を出発して２つ目の検印所が若神子。まだまだ先は長い。西日も傾きはじめ、辺りは夕暮れ色に染まっていく。ここではほとんどの生徒が食事をとる。これからの長い道程をのりきれるか不安な表情を浮かべながらも、それを強い意志でうち消そうとする様子がひしひしと伝わってくる。意を決して出発する頃はすっかり暗くなり、車のライトに蛍光タスキを光らせながら遠ざかる姿は、水辺を漂う蛍の姿を思わせる。無事ゴールまでたどり着いて欲しいという願いを込めて送り出す。

○津金救護検印所

ここでの夕食は、車で10分ほど離れた宿舎で、午後４時に。その直後から夜中の１時過ぎまで、男子の検印にあたる。ここは交通の便が悪い。実は何もないのである。中止した生徒は、家から車で迎えに来てもらうしか帰る方法が無い。家の人が迎えに来てくれるまでの間、生徒たちはどんな気持ちで親の到着を待っているのだろうか。車に乗り込むとき、多くの生徒に、ちょっとバツの悪そうな、それでいてほっとした表情が見て取れる。思わず「来年は絶対通過しろよ」と声をかけたくなる。一方女子は、最初の検印所と言うこともあり、怒濤のごとく押し寄せる。午前７時前から８時ちょっと前までの短期決戦で、ゆっくりと生徒に声をかける暇もない。全員が通過し終わり、はじめて遠くの八ヶ岳やほのかに色付いた辺りのリンゴ、黄ばみかかった稲穂が目に入ってくる。



○三軒屋救護検印所

三軒屋は、強行遠足全区間中生徒にとっては最も疲れを感じる難所である。夜になると津金～三軒屋間は全く暗闇となる。その中を生徒は、思い思いの表情でやってくる。そしてお母さん方の用意してくれたレモンや麦茶で一息入れる。疲労した生徒は一時休むが、励まして何とか清里まで送り出してやる。そのころは、もう翌日であり寒さが一段と身にしみる時でもある。

○野辺山救護検印所

男女のコースとも、中間点となる野辺山。途中の国鉄最高地点の踏切手前では、恒例になっている吹奏楽部ＯＢによる激励の演奏が響いてくる。暗闇の中から校歌や応援歌が流れ、甲府からの長い道程で疲れた生徒たちの心を奮い立たせてくれる。名物の「シジミ汁」が待っている検印所に向け、気もはやる。検印所に着くとテントからもうもうと湯気が立ち上がっている。そのテントでは、ＰＴＡの方々が次々と到着する生徒たちに声をかけながら忙しく「シジミ汁」を渡す。生徒たちは熱い「シジミ汁」をゆっくりと味わいながらすすり、冷え切った体を温める。体を温め、ゆっくりするとみんな元気を取り戻し、次へ向けて元気に出発

する。

○海ノ口救護検印所

野辺山から続く長い下り坂は、市場の検印所を出てもまだ終わらない。両側に広がる畑の単調な風景の中、道はだらだらと降りてゆく。甲府を出てから60km余り、疲労もだいぶたまっている。歩道には雑草が繁茂し歩きにくく、ついつい車道にはみ出してしまう。しばらくして、大きな左カーブを過ぎると、コースは国道を右折、旧道に入っていく。かつてはこの入り口の目印となっていた電話ボックスも撤去され今はもうない。木の鬱蒼と茂る墓地の横を通り、両側に民家の並ぶ集落を抜けて道は再び国道に出る。杣添洞門をくぐると右手に千曲川が現れる。ここまでくれば海ノ口検印所までもう一踏ん張りだ。右カーブの先に公民館が見える。そのすぐ先の小海線の踏切を越えれば検印所だ。検印所は毎年お世話になる南牧村役場前の駐車場。平成７年庁舎が新築され立派な建物となった。昨年は、すぐ手前に千曲川を渡る海ノ口大橋が完成しコースの様子は少しずつ変わっていく。

○松原湖救護検印所

変わらないこそ尊い・・・・が

松原湖の救護検印所は、小諸コースになってから38年間変わることなく小池龍太郎さんのお宅を拝借しています。当初「湖入口」のＴ字路の「泉屋酒店」の店頭でその後、ＪＲ松原湖駅前の旧宅となりました。嫁入り、入院、出産、引っ越し・・・不思議にも強行遠足と小池さんの家の大行事・事件とが重なることが多いのです。昨年は、高齢のおばあさまの体調が悪いとうかがい案じていましたが、実施中は例年のように奥座敷で端然と正座しておられて安心したものでした。数日後おばあさまは天寿を全うされました。あたかも強行遠足の無事故実施を見届けて下さったように思われました。今や普段は殆ど空き家となった住居。ＪＲ松原湖駅の懐かしくもオンボロな駅舎も小さな四阿風になりました。穏和なご主人、元気のいい奥さん、美人の娘さんたちは、「空き家にしといてもしょうがないので、おおいに使って下さい」とおっしゃいます。小池さんご一家に感謝！！　ご一家と強行遠足がいつまでも障り無いことを！！



○臼田救護検印所

初日の15:00ころが臼田検印所となる下越公会堂に職員や協力者（保護者）が到着する時間である。お茶と手作りの漬け物等を準備して待っていてくれるのが「お婆ちゃん」こと依田トミ子さん（90歳）である。40数年来、毎年徹夜で生徒を暖かく優しい眼差しで迎え激励して下さる姿には感謝と敬服するばかりである。脇の火鉢で温めたコーヒー牛乳・心のこもったおにぎり、お母さん方と一緒にピカピカに磨いた紅玉リンゴを１つ１つ到着生徒に渡してくれる。「私はこの強行遠足のために長生きしてるだよ」と微笑みながら嬉しそうに語る。ご主人が生前、行商中行き倒れとなり、命の恩人となったのが山梨県の方であったことから、検印所の協力を申し出て以来地区の方共々ご家族で続けて下さっている。例年、応援団長は到着後、依田家でお婆ちゃんのご主人の霊前に線香を手向け感謝と報告をする。生徒は、「お婆ちゃん」に会うまではと、臼田まで足を進め、ここでほっと一息ついて終わってしまう者も多いが、お婆ちゃんの一言とリンゴに心の温も

りを感じ、小諸への20kmを踏み出して行く。

○三岡救護検印所

三岡は、男子最終到達地の１つ手前の検印所である。生徒はここまで来ると、あとは小諸だけという意識で、大半の者が前進する。最後の力を振りしぼって気を取り直して前進する生徒の姿を見られると言う意味でもっともやりがいのある勤務地であるといえる。三岡検印所は、柏木宇三郎様ご一家の全面的なご協力で設営されてきた。倉庫、敷地、机、ストーブ、照明器具などの大型備品の提供、14～5名のスタッフの宿泊、食事の世話まで含む。今後は宿泊と食事は別形態となるが、柏木様は、なお協力し続けて下さるといわれる。感謝を表す言葉も見つからないほどお世話になってきた。この行事を支えてくれる大きな要素である信州気質のありがたさをあらためて思う。



○小諸救護検印所

小諸は感動の地である、自信の源ともなっている。第16検印所、三岡を出ると最早残り４キロとなるが、坂の城下町小諸中心部を目指して死力を尽くさなければならない。自らの精神と肉体の限界に挑戦し、乗り越えた者のみに許される歓喜の瞬間が待っている。小諸に到着するものは皆「小英雄」である。たとえ、トップの如く迎え入れられずとも、月桂樹を心に挿頭（かざ）したことに変わりない。午前２時に配置につく。緊張感が走る。やがて暁のしじまを破り、弾んだ声が響く。「トップが来るぞ！」・・・いよいよドラマ「強行遠足」の終焉を迎えるのである。手を振りながら笑顔で到着する者、大粒の涙をポロポロ落としながら検印カードを提出する者など姿態は様々だが、一様に演じ終えた安堵感が窺える。保護者の献身的な働きに対する感謝の念は勿論であるが、特に小諸で感じることは、小諸市民（長野県民）の協力と支援の温かさである。検印所として毎年お借りする市民会館では職員が徹夜して下さり、小諸警察署の所長室の月予定表にはきちんと「甲府一高強行遠足」と記され、朝には、市長さんと教育委員長さんがわざわざ激励に来て下さるほどである。早暁からリンゴや麦茶の提供、暖かなおしぼりの用意等、青年会議所の皆様の温かい持てなしも忘れる訳にはいかない。甲府一高の生徒にとって、今や小諸は青春の忘れがたい郷愁の地でもあるのだ（女子にとっても心のゴールは小諸ではないだろうか）